宮城県文化財調査報告書第188集

名生館遺跡ほか

平成14年3月

宮城県教育委員会

序　　文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器の普及は一般化し、これら無くしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はますますこれからも進歩し、我々の社会生活や世の中の仕組みまでも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって我々の行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性はますます増してきていると言って良いでしょう。

歴史は、過去に起こった、あるいは行われたこと、つまり事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。特に地域との結びつきの深い埋蔵文化財は、情報の共有化により均質化する地域の、個性ある歴史を明確にするためにも欠くことのできない位置を与えられてきています。しかし、埋蔵文化財は道路や住宅の建設、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発などに関係する機関に遺跡の所在を周知徹底すると共に、開発とかかわりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねた結果、調査することとなったもののうち、平成13年度に当教育委員会が国庫補助金を得て本発掘調査及び確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後に、各遺跡の保存にご理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係各機関をはじめ、調査にあたり多大なるご協力をいただいた地元市町村教育委員会に対し、深く感謝申し上げます。

平成14年3月

宮城県教育委員会

教育長　千　葉　眞　弘

平成13年度発掘調査の概要

平成13年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費5,782千円、補助率1/2）を得て実施したほ場整備事業・住宅建築・宅地造成等の開発行為に伴うもの、保存資料を得ることを目的にした発掘調査のうち、本報告書は一定の成果が得られた以下の遺跡の成果を収録したものである。

〔名生館遺跡〕

古川市北西部、東大崎地区の台地に立地している。調査の契機は県営ほ場整備事業に伴うもので平成10年度から発掘調査を進めている。４年目の今年が調査の最終年度で、遺跡南西端にあたる第Ⅲ工区南水田面及び道路敷にかかわる確認調査と水路敷にかかわる事前調査である。調査の結果、古代とみられる掘立柱建物跡、井戸跡、土壙等が多数検出された。

〔館の内遺跡〕

山元町北部の丘陵上に立地している。調査は遺跡北側の既存畑地を盛土して畑地整備が計画されたことに対応したものである。工事内容からみて遺構は損なわれないと判断されたが、遺構の分布状況や内容把握を目的に平成13年３月の試掘調査を経て、６月に確認調査を実施した。調査の結果、古代の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟等が発見され、遺跡の内容について一定の資料が得られた。

〔一本柳遺跡・小沼遺跡〕

小牛田町東南部、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。県営ほ場整備事業に伴い、平成11年度から発掘調査を進めている。今年が調査の最終年度で、現道下に埋設される排水管部分の事前調査である。調査の結果、一本柳遺跡では古代の溝跡と畦畔、小沼遺跡では古代から中世の掘立柱建物跡、土壙などが発見された。

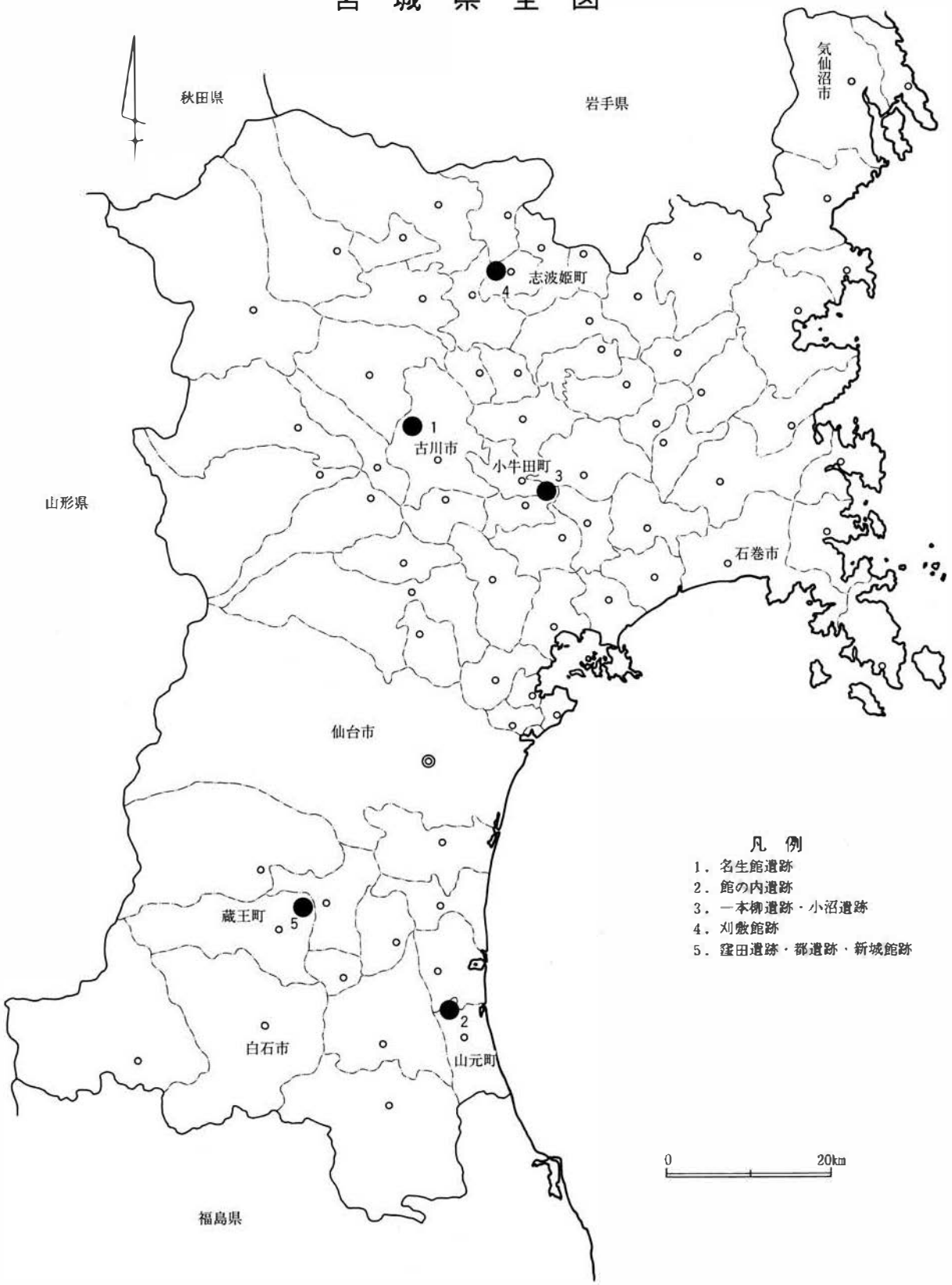
〔刈敷館跡〕

志波姫町北西部、一迫川右岸に形成された自然堤防上に立地している。平成９年度に県営ほ場整備事業が計画されて以来協議を重ねた結果、小排水路以外は掘削しないなど遺跡への影響を最小限に留める工法で工事を実施することとなった。調査はそれに対応したもので、調査の結果、東西の屋敷跡とそれを取り囲むように幅の広い堀跡が検出された。その後、西側屋敷跡及び堀跡に設置される小排水路は遺構面を損なう恐れがあったので、一部計画を変更し盛土によって保存を図ることとなった。

〔窪田遺跡ほか〕

蔵王町円田盆地北側の微高地上に立地している。平成８年度に円田２期地区の県営ほ場整備事業計画が示され、現地協議を行った結果、窪田遺跡など11遺跡が事業区域に含まれることが明らかになった。その後事業年次計画が示された平成12年度に再度現地確認を行ったところ、遺跡との関わりが予想以上に大きかったため、事業区域からの除外区域拡大等の要望を行った。さらに、町教育委員会が改めて分布調査を実施した結果、新たに3遺跡が発見され、また周知の遺跡も従来知られていた範囲よりも拡大した。今回の確認調査は平成14年度以降に工事が行われる区域との調整を図るため、窪田遺跡・都遺跡及び新城館跡の範囲確認と内容把握を目的に実施したものである。調査の詳細は本文を参照されたい。

宮城県全図


秋田県
岩手県
気仙沼市
志波姫町
4
1
古川市
小牛田町
3
山形県
石巻市
仙台市
凡例
1．名生館遺跡
2．館の内遺跡
3．一本柳遺跡・小沼遺跡
4．刈敷館跡
5．窪田遺跡・郡遺跡・新城館跡
蔵王町
5
2
白石市
山元町
0
20km
福島県

目　　次

平成13年度の調査の概要
名生館遺跡……1
館の内遺跡……57
一本柳遺跡・小沼遺跡……81
刈敷館跡……91
窪田遺跡・都遺跡・新城館跡……103

例　　言

1．本書は宮城県が平成13年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して行った発掘調査の報告書である。
2．各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3．各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
4．本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を参照した。
5．本書に使用した各遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の1/25,000もしくは1/50,000の地形図を複製して使用した。
6．本書の図中の座標値は、国家座標X系による。
7．本書は調査員全員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成13年度発掘調査の概要	阿部博志
名生館遺跡	須田良平
館の内遺跡	引地弘行
一本柳遺跡・小沼遺跡	千葉直樹
刈敷館跡	天野順陽
窪田遺跡・都遺跡・新城館跡	佐久間光平

8．発掘調査、遺構・遺物の整理、報告書の作成にあたって、次の方々からご協力、ご教示いただいた。（五十音順・敬称略）

及川規・大谷基・佐藤優・藤沼邦彦・藤原二郎

9．発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

名生館遺跡

目　　次

第一章 遺跡の概要

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境……1

第二章 調査の経過と調査方法

第三章 発掘調査の成果

Ⅰ．基本層序……5

Ⅱ．発見された遺構と遺物……5

Ⅲ．考察……33

Ⅳ．まとめ……41

引用・参考文献……41

写真図版……45

調　査　要　項

遺 跡 名：名生館遺跡（みょうだていせき）（宮城県遺跡地名表記載番号27018、遺跡記号 ＰＪ）

所 在 地：宮城県古川市大崎字名生館他地内

調査原因：東大崎地区県営ほ場整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

須田良平・吉野武・引地弘行

調査期間：平成13年（2001年）７月16日～９月21日、10月１日～10月４日

調査対象面積：7,438㎡（水路・道路部）

調査面積：7122㎡（水路・道路部）、1164㎡（田面部）

調査協力：宮城県古川産業振興事務所、大崎土地改良区、古川市教育委員会、宮城県農業公社

第一章　遺　跡　の　概　要

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境（第１図）

名生館遺跡は大崎平野の北西端にあたる古川市大崎字名生館、城内、名生北館・小野柄堂・上代・小館・弥栄に所在する。遺跡はJR陸羽東線東大崎駅の西側に広がり、奈良・平安時代の陸奥国府多賀城の北西約40㎞に位置する。

江合川と鳴瀬川の沖積作用で形成された大崎平野は東西約13㎞、南北約17㎞の広さをもつ。四周は主に丘陵で、東は広淵丘陵が南北に、南と北はそれぞれ三本木丘陵、清滝丘陵が西から東に延びる。西は江合・鳴瀬川が形成した扇状地が段丘化した高位段丘面（通称青木原台地）が発達し、緩やかに傾斜（0.7～0.8°）しながら北西から南東に舌状に延びて沖積面下へ没している。高位段丘は第四紀更新世に噴出した浮石凝灰岩（柳沢凝灰岩）を主体とした堆積物で構成される。沖積地との漸移付近は礫・砂などの河岸段丘堆積物からなり、尾花沢一肘折テフラ層を挟むところもある。遺跡はこうした江合川右岸の高位段丘の南東端に立地する。標高は36～47m、沖積地との比高差は３～15mである（第４図）。

第二章　調査の経過と調査方法

本調査は古川市東大崎地区県営ほ場整備事業に伴うものである。この事業に伴う発掘調査は平成８年度の試掘調査をへて、平成10年度から本調査に入り、４年目の今年が調査の最終年度である。調査に至る経過と昨年度までの調査成果はすでに報告書にまとめられている（天野 1999、村田ほか 2000、須田・吉野・稲毛 2001）。したがって、それらの内容についてはここでは省略する。

今年度の調査は遺跡の南西端にあたる第Ⅲ工区南が対象である（第２・３図）。水路・道路敷については、水路敷は掘削が遺構面に及ぶため事前調査、道路敷は未舗装で掘削も遺構面に及ばないため確認調査にとどめた。さらに対象地域のほぼ全面を対象にした、遺構面の高さを確認するための田面部分の調査を任意にトレンチを設けて行った。調査区は細長く、かつ広範囲に及ぶため、昨年度までの調査区Ａ～Ｖ区に引き続き、事前調査対象の水路敷をＷ区、確認調査対象の道路敷をＸ区、田面部の調査で遺構がまとまって確認された地点をＹ区とし、さらに畦畔などを境にＷ－１区、Ｗ－２区などのように細分した。

調査は７月16日～９月21日と10月１日～10月４日に行った。検出した遺構は国家座標軸を基準線として、1/20または1/100、1/200平面図、1/20断面図を作成した。同時に35㎜、６×７モノクロ・カラーリバーサルによる写真記録も行った。以上の方法で調査を進め、10月４日に今年度の調査を終了し、東大崎地区県営ほ場整備事業に伴うすべての調査を終了した。道路・水路敷の調査対象面積は7,438㎡、発掘調査面積は7,122㎡、田面の高さを確認するための発掘調査面積は1,164㎡であった。

また、一昨年度、昨年度の調査で、報告書に収録しなかったＡ区及びＦ区の成果、さらに昨年度、田面工事中に藤原二郎氏によりＡ区北側で発見された土壙出土遺物についても併せて記載した。

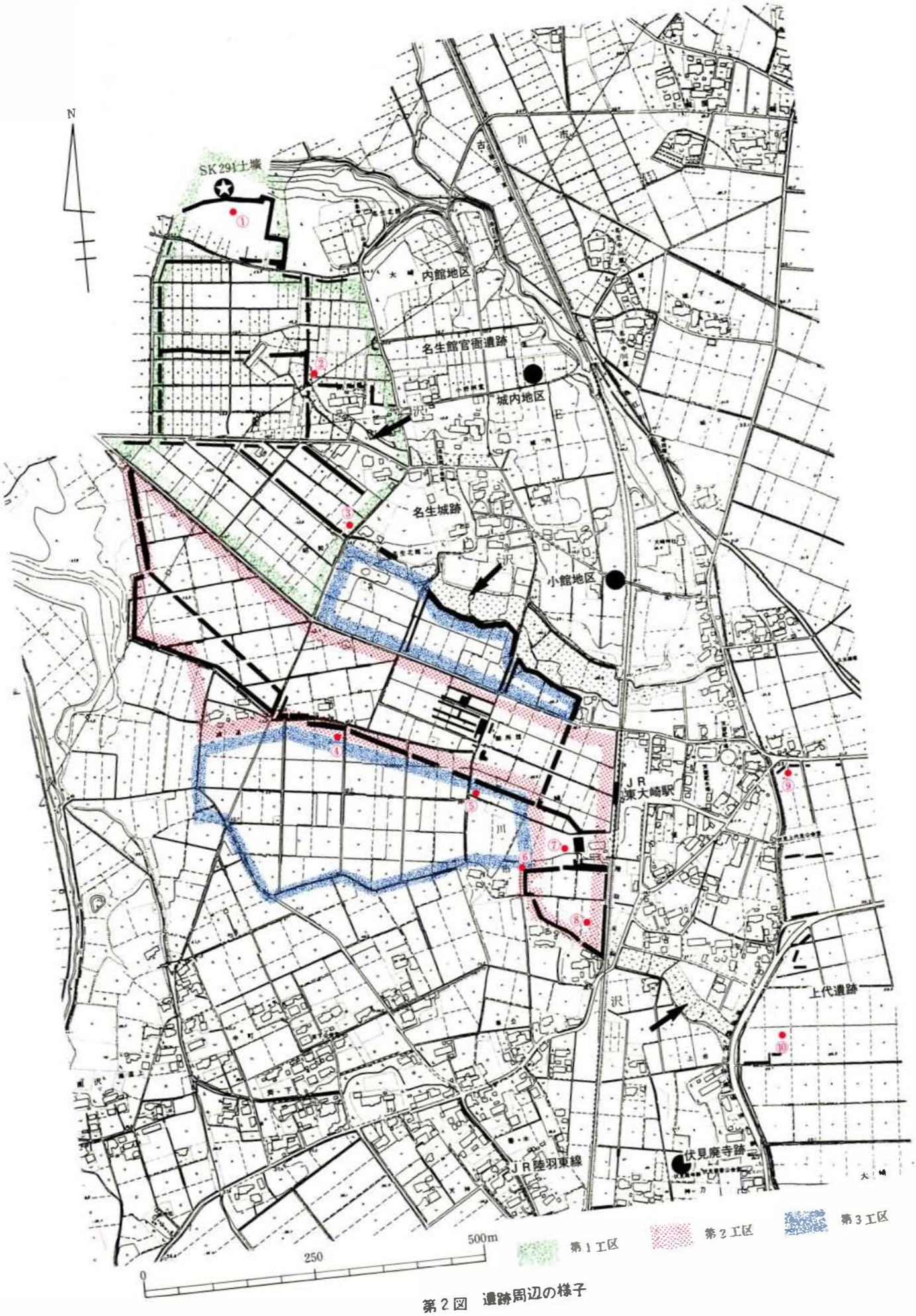
No.	遺跡名	種別
1	名生館遺跡	官衙（玉造郡家）・集落 ※
2	伏見廃寺跡	郡家付属寺院
3	宮沢遺跡	城柵（推定玉造柵跡） ※
4	三輪田遺跡	城柵付属寺院 ※
5	杉の下・小寺遺跡	城柵
6	南小林遺跡	官衙 ※
7	熊野堂遺跡	官衙？
8	城生柵跡	城柵（推定色麻柵跡）
9	菜切谷廃寺跡	城柵付属寺院
10	一の関遺跡	寺院
11	大吉山窯跡	瓦窯（多賀城Ⅰ期）
12	合戦原窯跡群	瓦窯、須恵器窯
13	土器坂窯跡	瓦窯
14	愛宕山窯跡	瓦窯
15	官林窯跡	瓦窯

No.	遺跡名	種別
16	日の出山窯跡群	瓦・須恵器窯（多賀城Ⅰ期）
17	大門遺跡	瓦窯？
18	権現山遺跡	集落 ※
19	上代遺跡	集落 ※
20	高幌遺跡	集落
21	元宿遺跡	集落
22	地蔵堂遺跡	集落 ※
23	堤根遺跡	集落
24	舟場・中沢遺跡	集落
25	安藤前遺跡	集落
26	小高横穴墓群小高支群	横穴墓
27	〃　朽木橋支群	横穴墓 ※
28	〃　岩崎支群	横穴墓
29	内林古墳群	群集墳
30	塚原古墳群	群集墳 ※

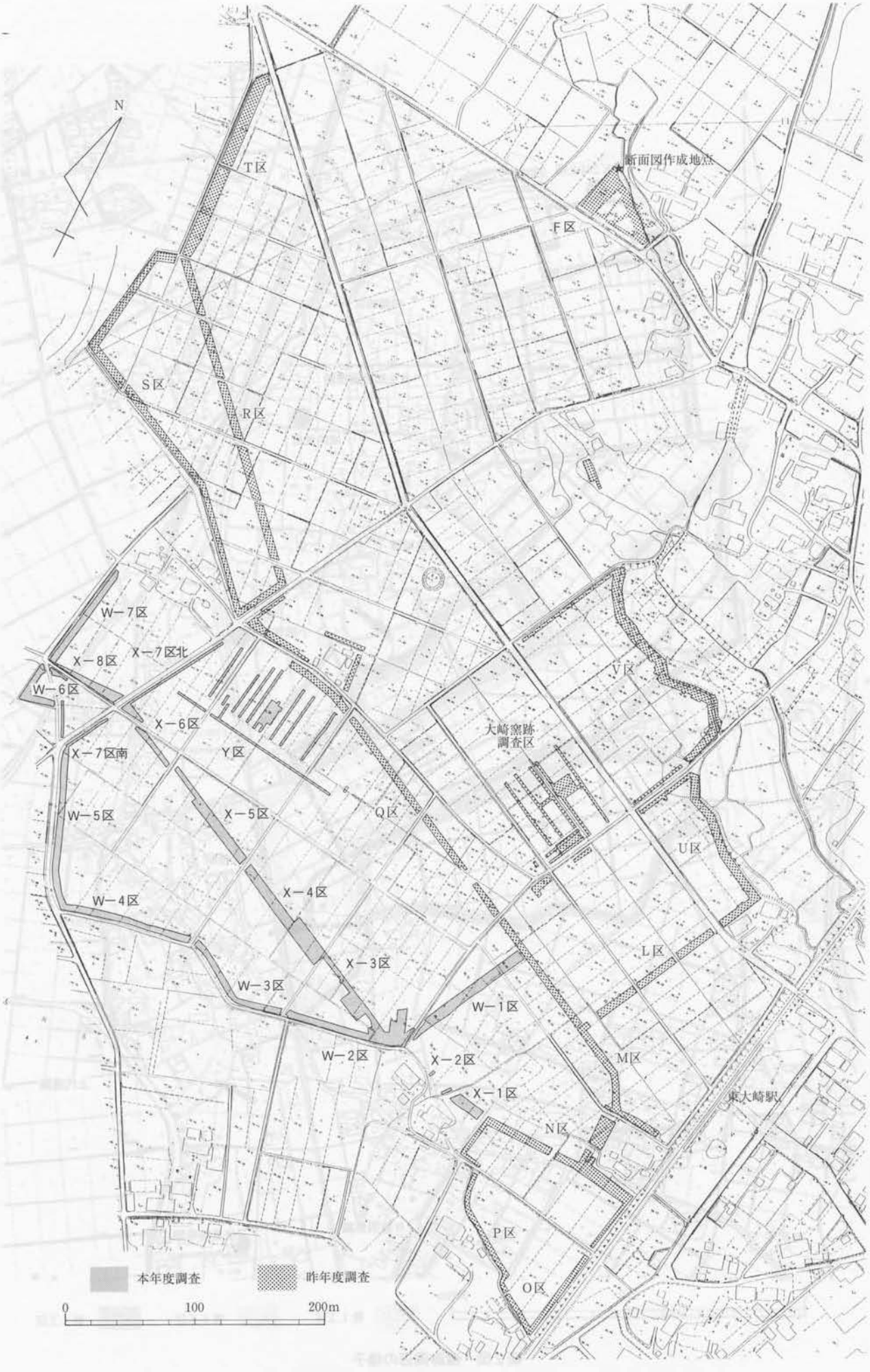
No.	遺跡名	種別
31	新谷地北遺跡	墓 ※
32	日光山古墳群小寺支群	群集墳 ※
33	〃　成田支群	群集墳
34	川北横穴墓群	横穴墓 ※
35	色麻古墳群	群集墳 ※
36	東原横穴墓群	横穴墓
37	根谷地横穴墓群	横穴墓
38	坂本館山横穴墓群	横穴墓
39	青山A横穴墓群	横穴墓
40	青山B横穴墓群	横穴墓
41	寺下横穴墓群	横穴墓
42	山畑横穴墓群	横穴墓 ※
43	湯内山横穴墓群	横穴墓 ※
44	多高田横穴墓群	横穴墓

※印　関東系土師器出土

第1図　名生館遺跡と周辺の遺跡


N
SK291土壙
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
内館地区
名生館官衙遺跡
城内地区
名生城跡
小館地区
JR東大崎駅
上代遺跡
伏見廃寺跡
JR陸羽東線
第1工区
第2工区
第3工区
0
250
500m

第２図　遺跡周辺の様子


N
T区
F区
断面図作成地点
S区
R区
W−7区
X−8区
X−7区北
W−6区
X−6区
X−7区南
Y区
W−5区
X−5区
Q区
W−4区
X−4区
X−3区
W−3区
W−2区
W−1区
X−2区
X−1区
V区
大崎窯跡
調査区
U区
L区
M区
N区
東大崎駅
P区
O区
本年度調査
昨年度調査
0
100
200m

第３図　調査区の位置

第三章　発掘調査の成果

Ⅰ．基本層序（第４図）

本遺跡の層序は地点によって異なるものの、基本的に以下の層に大別される。

Ⅰ層：耕作土。部分的に現代の盛り土も含まれる。

Ⅱ層：黒ボク土（旧表土）。Ⅲ層との境界に部分的に漸移層が認められる。

Ⅲ層：尾花沢ー肘折テフラ層（肘折軽石層）。遺跡の西部に主に分布する。

Ⅳ層：ソフト・ローム層（10YR5/4にぶい黄褐色）。場所により締まりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となる。

Ⅴ層：ソフト・ローム層（10YR5/4にぶい黄褐色）。旧石器時代文化層。Ⅳ層より締まりがある。

Ⅵ層：ハード・ローム層（10YR6/4明黄褐色）。下位は灰白色（10YR8/2）粘土になるところもある。

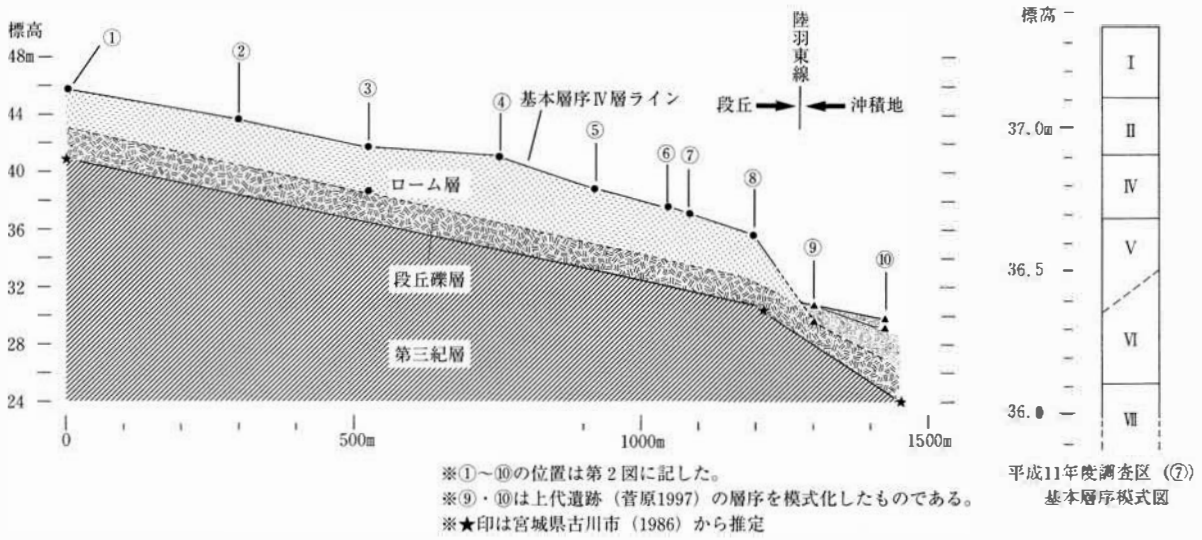
Ⅶ層：凝灰岩層（10YR6/6明黄褐色）。

遺構の検出面は基本的にⅣ層である。

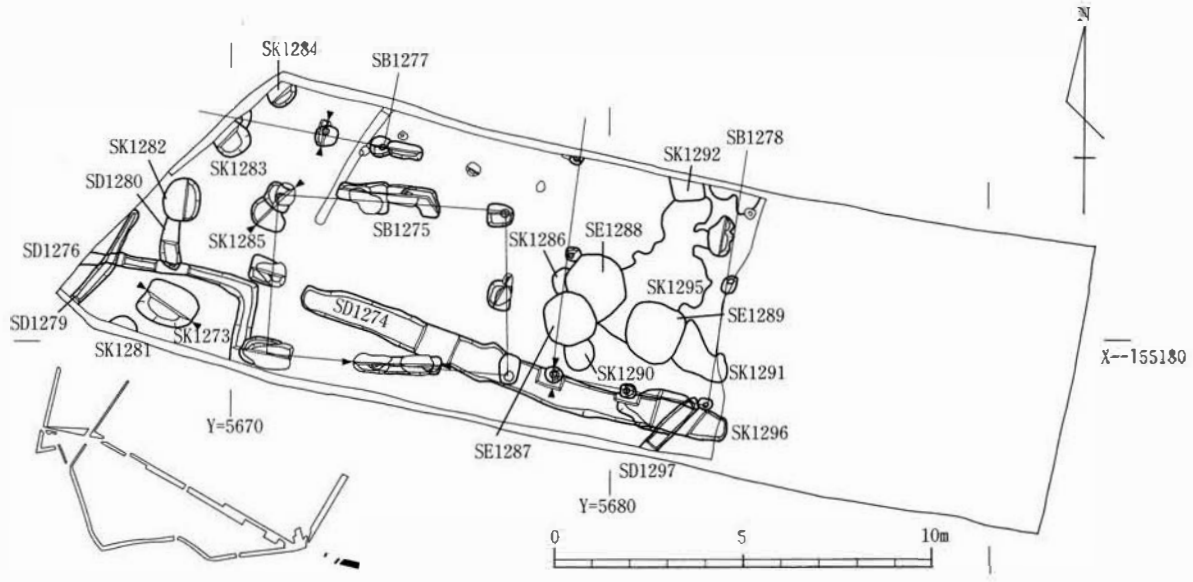
Ⅱ．発見された遺構と遺物

今回の調査の対象地域である第Ⅲ工区南で発見した遺構は堀跡３、掘立柱建物跡22、井戸跡５、溝跡56、土壙90などである。開田時の削平などにより全体的に残存状況はよくない。遺物は土師器、須恵器を中心に縄文土器、陶磁器、鉄製品などが出土しているが総数は整理用平箱で５箱ほどであり、調査面積に比して非常に少ない。

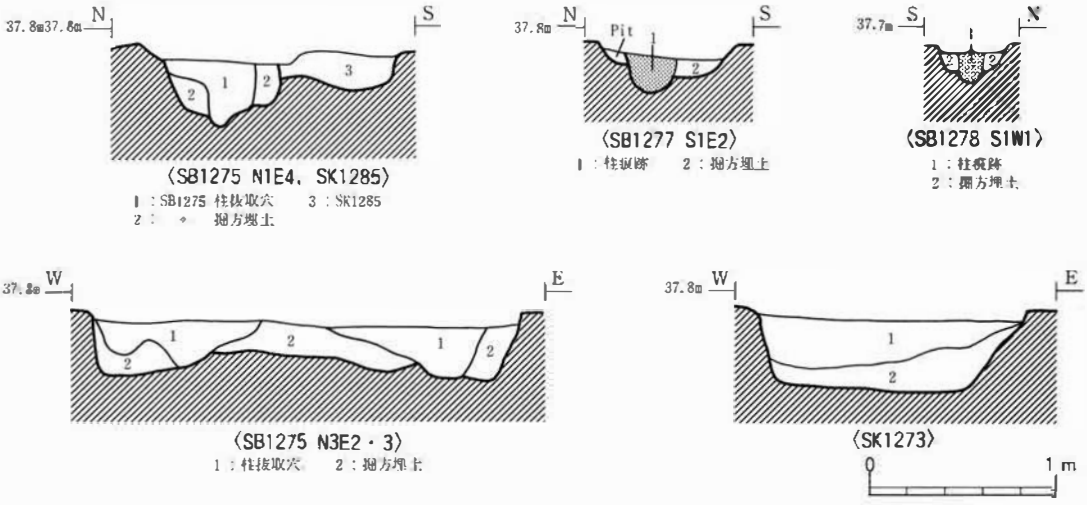
調査対象地域の東部のＷ－１区北側とＸ－１区およびそれらに挟まれた地域では掘立柱建物跡や井戸跡、土壙など古代の遺構が多数検出され密度が濃い。これに対してＷ－２区以西では、Ｗ－６区から遺跡の中心部に向かって長く東に延びるSD 692周辺のＹ区を除いて古代の遺構の密度は低く、溝



第４図　基本層序



第５図　Ｘ－１区



第５図　Ｘ－１区

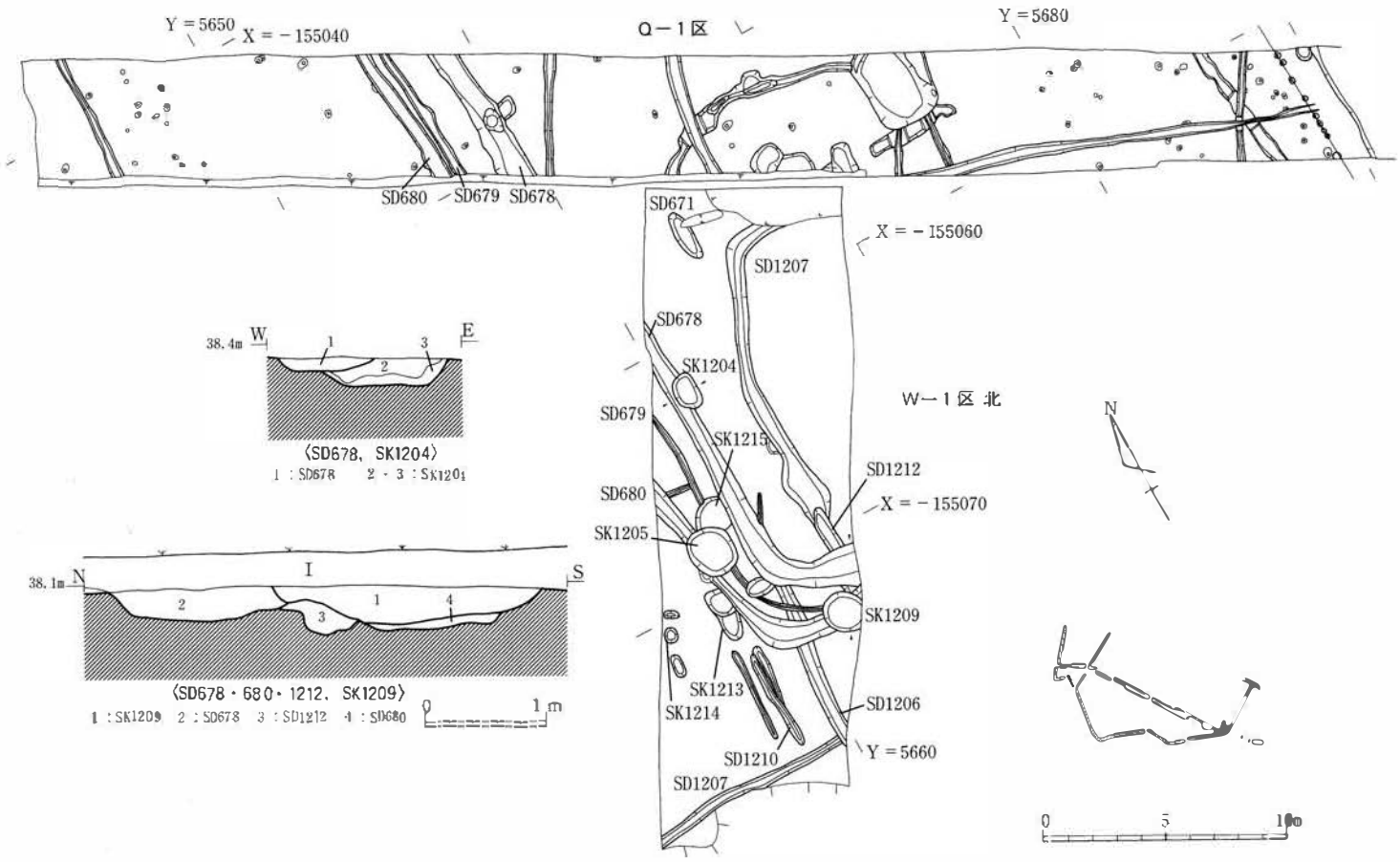
と土壙が散在する程度である。またＸ－３・４区では古代よりも新しい掘立柱建物跡の集中が認められる。この他、西側には陥し穴と思われる土壙も散在する。

以下、遺構ごとに記述するが、調査区の幅に制限があり遺構の全容が分かるものが少ないため主なものについてのみ記述する。すべての遺構の属性は第１表（42～44頁）に示した。

なお以下の記述でW区、Ｘ区、Ｙ区以外は昨年度以前に調査したものである。

１．塀跡（第10図）

Ｘ－４区で３条確認した。SA1345塀跡、SA1346塀跡は、それぞれ類似した特徴を持つSB1335掘立柱建物跡、SB1339掘立柱建物跡の西妻に平行する南北１間以上の一本柱列による塀跡である。いずれも規模は4.0m以上で、柱穴は長軸60cm 前後、短軸40cm 前後の楕円形を呈し、深さは深いもので36cm である。埋土は地山小ブロックを含む黒色あるいは黒褐色砂質シルトである。方向はSA1345塀跡



第6図　W－1区、Q－1区

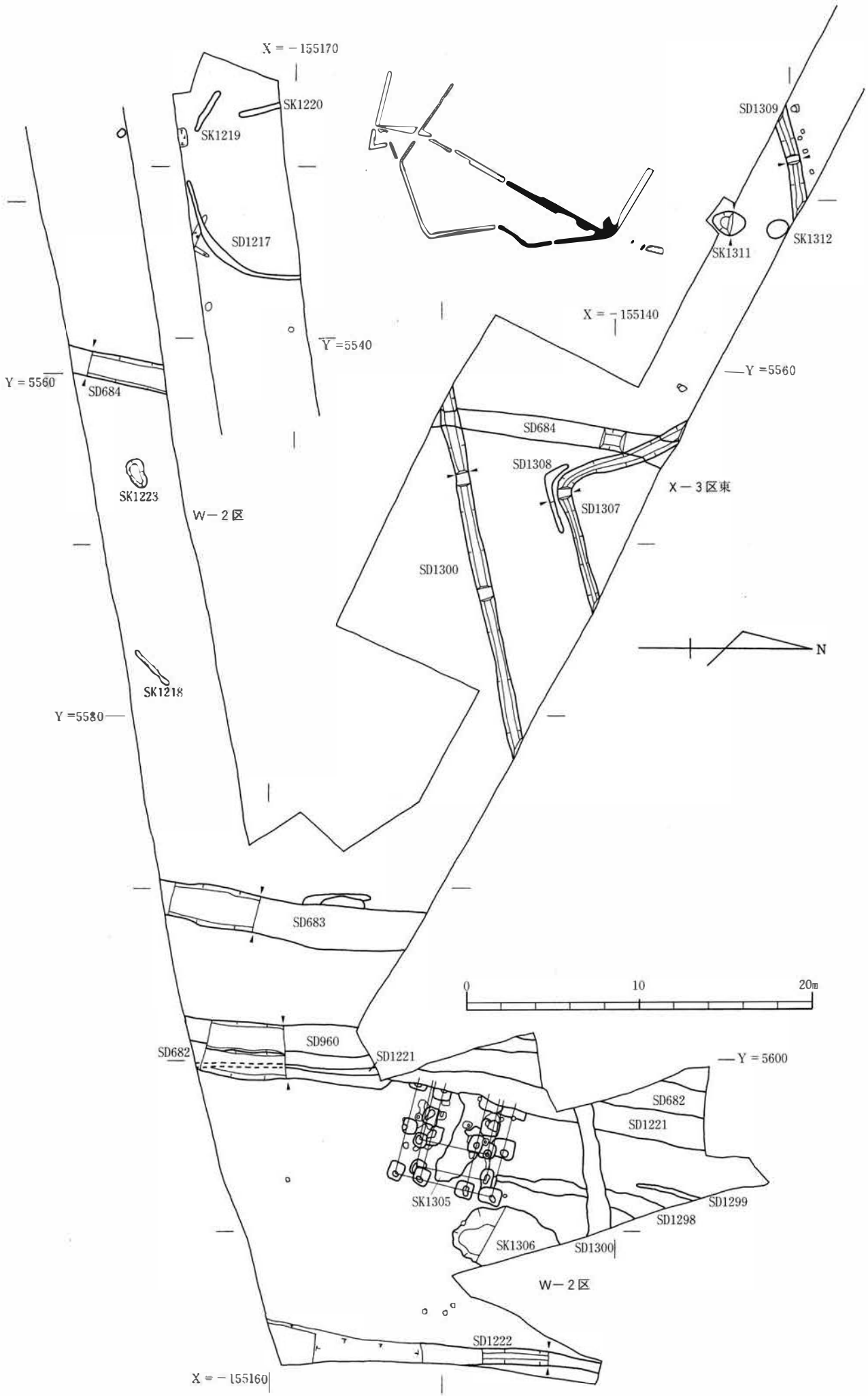
がN－12°－W、SA1346塀跡はN－31°－Wである。SA1345塀跡南の柱穴には抜取り穴が認められ、それ以外には径10～20cmの円形の柱痕跡が認められた。SA1345塀跡の北側柱痕跡堆積土から須恵器甕の体部破片が出土している。SA1344掘立柱建物跡は東西1間軒の一本柱による塀跡である。柱穴は2ヶ所で検出しており、東の柱穴で柱抜取穴、西の柱穴では径20cmの円形の柱痕跡を確認した。塀跡の規模は2.7mで、方向はE－16°－Nである。柱穴は隅丸長方形で、長軸110cm、短軸40～50cm、深さ60cmである。埋土は地山小ブロックを含む黒色砂質シルトである。遺物は出土していない。

2．掘立柱建物跡

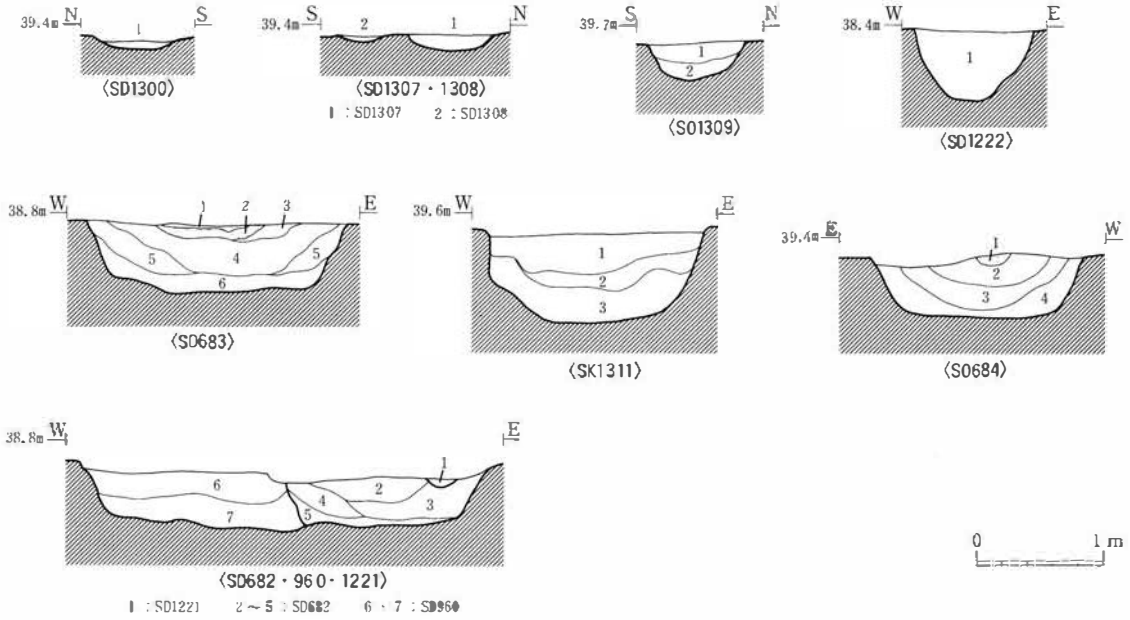
W－2区で4棟、X－1区で3棟、X－3区で1棟、X－4区で13棟、X－5区で1棟の合計22棟を確認した。SD682・960溝跡を境として東側と西側の建物は特徴が異なり、東側のW－2区とX－1区の建物は2間×1間～3間×2間程度で規模は小さいものの柱穴の掘方が隅丸長方形を呈し大きく、東西棟で方向が東に対して5°～15°南に振れる。これに対して西側のX－3区、X－4区の建物は3間以上×1間の規模の大きいものが多く、柱穴の掘方が細長い。方向は東西棟で東に対して7°～20°北に振れる。

(1)　W－2区（第7・9図）

SB1301建物跡からSB1304建物跡はW－2区北側を北西に拡張した部分でまとまって確認した。こ


X = −155170
SK1220
SK1219
SD1217
SD1309
SK1311
SK1312
X = −155140
Y =5540
Y =5560
SD684
SD1308
SD1307
X−3区東
SK1223
W−2区
SD1300
N
SK1218
Y =5580
SD683
0
10
20m
SD960
SD682
SD1221
Y =5600
SK1305
SD1299
SD1298
SK1306
SD1300
W−2区
SD1222
X = −155160

第7図　W−2、X−3平面図



第8図　W－2区、X－3区　溝跡・土壙断面図

れらは同じ場所での立て替えであり、同時に存在していない。当該区は事前調査の範囲外のため一部掘り下げなどの調査を行ったのみで詳細については把握できていない面もある。

【SB1301建物跡】

桁行1間以上、梁行1間の東西棟である。SB1302建物跡、SB1303建物跡、SB1304建物跡、SD960溝跡、SD682溝跡、SD1221溝跡のいずれよりも古い。柱穴は4ヶ所で検出しており、すべてで柱の抜取穴を確認した。平面規模は柱痕跡が残っていないため推測となるが、桁行が3.3m以上、梁行が4.0mである。方向はE－11°－Sである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸90～110cm、短軸70～85cm、深さは掘り下げたもので50cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取穴は不整な楕円形で長軸60cm前後、短軸25～60cm、深さ55cmで、地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋戻されている。遺物は柱穴埋土から須恵器の坏が1片出土している。

【SB1302建物跡】

桁行2間以上、梁行1間の東西棟である。SB1301建物跡よりも新しく、SB1303建物跡、SB1304建物跡、SD960溝跡、SD682溝跡、SD1221溝跡よりも古い。柱穴は6ヶ所で検出しており、そのうち2ヶ所で柱の切取穴を確認した。残りの4ヶ所は抜取穴もしくは切取穴であるが掘り下げていないため詳細は不明である。平面規模は桁行が5.5m以上、柱間寸法は北側、南側柱列共に2.7m、梁行が4.3mである。方向はE－15°－Sである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸100～140cm、短軸80～100cm、深さは掘り下げたもので53cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。切取穴は不整形で長軸50～70cm、短軸30～70cm、深さ30cmで、砂粒を多く含む黒褐色シルトで埋戻されている。遺物は出土していない。

【SB1303建物跡】

桁行２間以上、梁行１間の東西棟である。SB1301建物跡、SB1302建物跡、SB1304建物跡よりも新しく、SD960溝跡、SD682溝跡、SD1221溝跡よりも古い。柱穴は６ヶ所で検出しており、柱材と柱の切取穴、抜取穴をそれぞれ１ヶ所で確認した。残りの３ヶ所のうち２ヶ所は抜取穴もしくは切取穴であるが掘り下げていないため詳細は不明である。平面規模は桁行が5.5m以上、柱間寸法は北側、南側柱列共に2.7m、梁行が4.2mである。方向はＥ－15°－Ｓである。

柱材は径30cmの丸太で長さ30cmほどが残存していた。柱穴は隅丸長方形で、長軸90～110cm、短軸80～90cm、深さは掘り下げたもので56～60cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。切取穴は細長い不整形で長軸60cm、短軸35cm、抜取穴は径35cmほどの円形で深さは70cm、砂を多く含む黒褐色シルトで埋戻されている。遺物は柱掘方埋土から須恵器の坏が少量出土している。

【SB1304建物跡】

桁行１間以上、梁行１間の東西棟である。SB1301建物跡、SB1302建物跡よりも新しく、SB1303建物跡、SD960溝跡、SD682溝跡、SD1221溝跡よりも古い。柱穴は２ヶ所で検出しており、いずれにおいても柱の切取穴を確認した。平面規模は桁行が3.2m以上、梁行が3.9mである。方向はＥ－12°－Ｓである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸85～100cm、短軸80～90cm、深さは掘り下げたもので62cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒色もしくは黒褐色シルトである。抜取穴は不整形で長軸50cm前後、短軸40cm前後、深さ52～63cmで、地山ブロックや砂粒を多く含む黒褐色砂質シルトで埋戻されている。遺物は柱穴埋土から須恵器の坏が１片出土している。

(2)　Ｘ－１区（第５図）

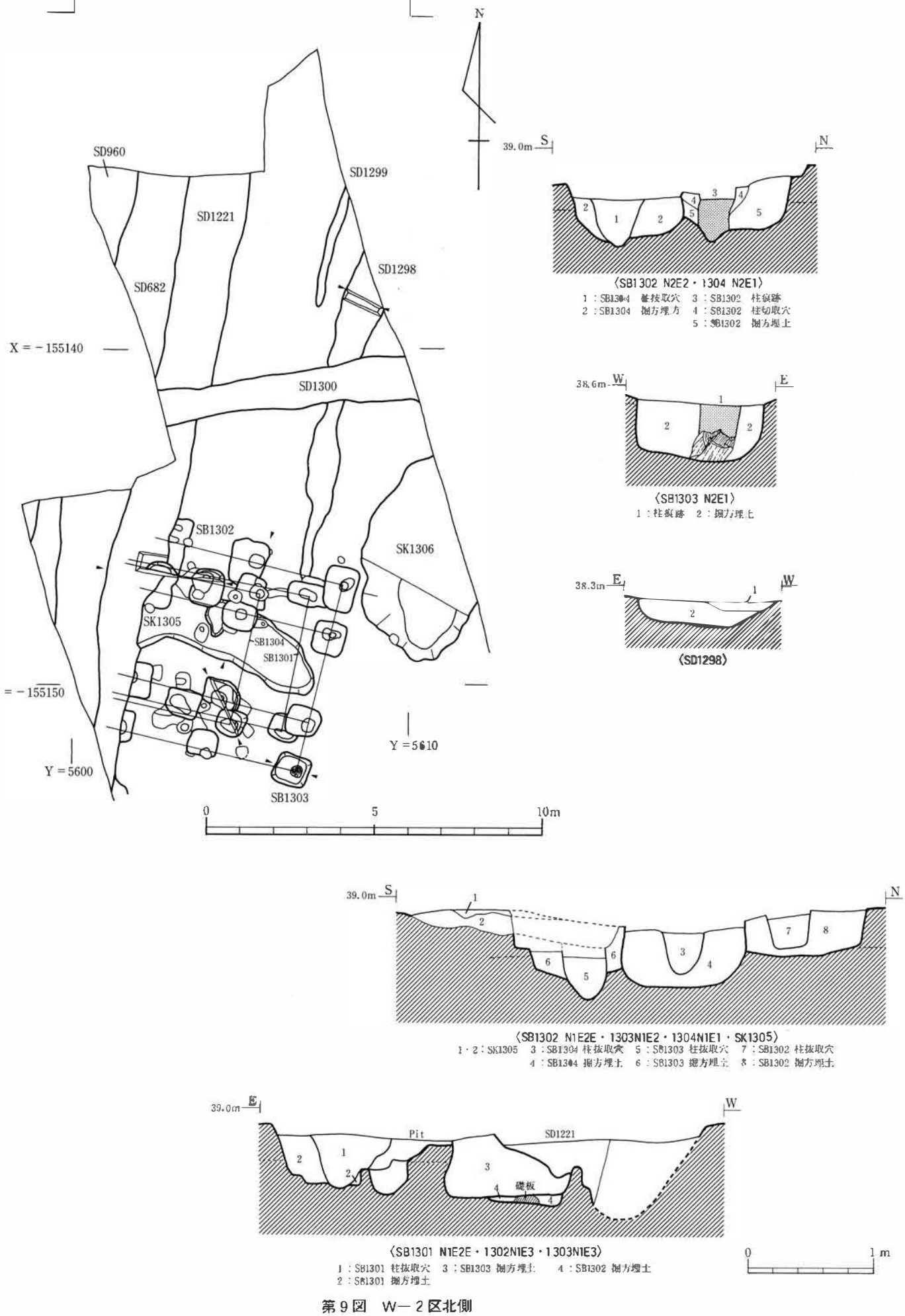
【SB1275建物跡】

桁行３間、梁行２間の東西棟である。SK1285土壙、SD1274溝、SD1276溝跡よりも新しい。柱穴は10ヶ所で検出しており、いずれにおいても柱の抜取穴を確認した。掘り下げていないものや柱痕跡が残っていないものがあるため推定となるが、平面規模は東西が北側柱列で総長5.9m、柱間寸法は東から2.5、1.5、2.0m、南側柱列では総長6.0m以上、柱間寸法は東から2.2、1.4、2.4m以上、南北が東西柱列でどちらも総長4.4m、柱間寸法は2.2m等間隔である。方向はＥ－5°－Ｓである。

柱穴は隅丸長方形で、南北の桁行中央４ヶ所の柱穴は布掘状に２ヶ所を同時に掘り下げており、長軸230～280cm、短軸45～50cm、それ以外は長軸65～100cm、短軸60～80cm、深さは掘り下げたもので27～40cmである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取穴は不整形や円形、楕円形など様々で長軸40～130cm、短軸30～70cm、深さ26～43cmで、地山ブロックを少量含む黒色シルトで埋戻されている。遺物は柱穴埋土から須恵器の坏や甕、土師器の坏や非ロクロ調整の甕の破片などが出土している。

【SB1277建物跡】

桁行２間以上、梁行１間以上の東西棟である。SK1283土壙よりも古い。柱穴は３ヶ所で検出しており、いずれにおいても径15～20cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長3.8m、柱間寸


N
SD960
SD1299
SD1221
SD1298
SD682
X = −155140
SD1300
SB1302
SK1306
SK1305
SB1304
SB1301
= −155150
Y = 5600
Y = 5610
SB1303
0
5
10m
39.0m S N
〈SB1302 N2E2・1304 N2E1〉
1：SB1304 掘方埋土 3：SB1302 柱痕跡
2：SB1304 掘方埋土 4：SB1302 柱抜取穴
5：SB1302 掘方埋土
38.6m W E
〈SB1303 N2E1〉
1：柱痕跡 2：掘方埋土
38.3m E W
〈SD1298〉
39.0m S N
〈SB1302 N1E2E・1303N1E2・1304N1E1・SK1305〉
1・2：SK1305 3：SB1304 柱抜取穴 5：SB1303 柱抜取穴 7：SB1302 柱抜取穴
4：SB1304 掘方埋土 6：SB1303 掘方埋土 8：SB1302 掘方埋土
39.0m E W
Pit
SD1221
礎板
〈SB1301 N1E2E・1302N1E3・1303N1E3〉
1：SB1301 柱抜取穴 3：SB1303 掘方埋土 4：SB1302 掘方埋土
2：SB1301 掘方埋土
0
1 m

第9図　W−2区北側

法は東から1.6、2.2m、南北が総長1.2m以上である。方向はE－10°－Sである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸65cm、短軸55cm、深さは掘り下げたもので16～30cmである。埋土は地山ブロックを含む黒色～黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SB1278建物跡】

桁行2間以上、梁行2間の南北棟である。SK1288土壙よりも古く、SD1274溝跡よりも新しい。柱穴は6ヶ所で検出しており、いずれにおいても径15cmの円形あるいは長軸18cm、短軸15cmの楕円形の柱痕跡を確認した。平面規模は南北が総長5.8m以上、柱間寸法は北から2.6、3.2m、東西が総長4.1m、柱間寸法が東から2.1、2.0mである。方向はN－10°－Eである。

柱穴は隅丸長方形や円形で、長軸35～45cm、短軸35cm、深さは掘り下げたもので21cmである。埋土は地山ブロックを含む褐灰色粘土質シルトあるいは黒褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

(3)　X－3区・X－4区（第10図）

【SB1314建物跡】

桁行3間、梁行1間以上の東西棟である。柱穴は5ヶ所で検出しており、そのうち3ヶ所において径10～15cmの円形の柱痕跡を、1ヶ所で柱の抜取穴を確認した。平面規模は東西が総長4.8m以上、柱間寸法は東から1.3、1.7、1.8m、南北が総長2.4m以上である。方向はE－10°－Nである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸25cm、短軸20cm、深さは掘り下げていないため不明である。遺物は出土していない。

【SB1331建物跡】

桁行3間以上、梁行1間以上の東西棟である。柱穴は5ヶ所で検出しており、そのうち3ヶ所において径10cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長6.6m、柱間寸法は2.2mの等間隔、南北が総長4.0m以上である。方向はE－11°－Nである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸35～70cm、短軸25～35cm、深さは掘り下げたもので10cm、埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取穴は径40cmの円形で、深さ14cm、地山ブロックを含む黒色砂質シルトで埋戻されている。遺物は出土していない。

【SB1335建物跡】

桁行6間以上、梁行1間の東西棟である。SB1340建物跡よりも古い。柱穴は12ヶ所で検出しており、そのうち7ヶ所で柱痕跡を、3ヶ所で柱の抜取穴を、2ヶ所で柱の切取穴を確認した。平面規模は東西が総長12.3m以上、柱間寸法は東から1.9、2.3、1.9、1.9、2.0、2.0m、南北が総長3.9mである。方向はE－16°－Nである。

柱穴は楕円形で、長軸65～120cm、短軸40～65cm、深さは掘り下げたもので36cm、埋土は地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルトである。抜取穴は長軸35cm、短軸30cmの楕円形で、深さ45cmで地山小ブロックを含む黒色砂質シルトで埋戻されている。切取穴は長軸55～70cm、短軸30cmの楕円形で地山小ブロックを少量含む黒色シルトで埋戻されている。遺物は出土していない。

【SB1336建物跡】

桁行5間以上、梁行1間の東西棟である。SB1334建物跡よりも新しい。柱穴は8ヶ所で検出しており、そのうち6ヶ所で径15cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長10.0m以上、柱間寸法は東から(1.8)、2.0mの等間隔、南北が総長3.8mである。方向はE－7°－Nである。

柱穴は楕円形で、長軸40～80cm、短軸30～40cm、深さは掘り下げたもので32～43cm、埋土は地山ブロックを含む黒色あるいは黒褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

【SB1338建物跡】

桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴は4ヶ所で検出しており、すべてで径20cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長7.7m以上、柱間寸法は東から3.9、3.7m、南北が総長4.3mである。方向はE－7°－Nである。

柱穴は隅丸長方形で、長軸65cm、短軸45～50cm、深さは掘り下げたもので17cm、埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルトである。遺物は柱穴埋土から須恵器の甕の破片が出土している。

【SB1339建物跡】

桁行3間、梁行1間の東西棟である。SB1342建物跡よりも古い。柱穴は7ヶ所で検出しており、そのうち5ヶ所で径18cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長5.9m、柱間寸法は東から1.9、2.0、2.0m、南北が総長4.0mである。方向はE－16°－Nである。

柱穴は不整楕円形で、長軸75～105cm、短軸40～50cm、深さは掘り下げたもので20～30cm、柱穴埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

【SB1340建物跡】

桁行4間以上、梁行1間以上の東西棟である。SB1335建物跡よりも新しい。柱穴は8ヶ所で検出しており、そのうち4ヶ所で径15cmの柱痕跡を、2ヶ所で柱の抜取穴を、1ヶ所で柱の切取穴を確認した。平面規模は東西が総長7.8m以上、柱間寸法は東から1.8、2.0、1.9、2.0m、南北が総長4.5m以上である。方向はE－12°－Nである。

柱穴は楕円形で、長軸55～110cm、短軸40～60cm、深さは掘り下げたもので21～32cm、埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色から暗褐色の砂質シルトである。抜取穴は長軸75cm、短軸60cmの楕円形、地山ブロックを含む黒色シルトで埋戻されている。切取穴は長軸50cm、短軸25cmの隅丸長方形で地山ブロックを少量含む黒色砂質シルトで埋戻されている。遺物は出土していない。

【SB1341建物跡】

桁行4間以上、梁行1間以上の東西棟である。SB1342建物跡よりも古い。柱穴は7ヶ所で検出しており、そのうち南側柱列の5ヶ所で径13cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長7.6m以上、柱間寸法は東から1.8、1.8、2.1、1.8m、南北が総長4.6m以上である。方向はE－17°－Nである。

柱穴は不整楕円形で、長軸85～145cm、短軸50～75cm、深さは掘り下げたもので52cm、埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色の砂質シルトである。遺物は出土していない。

【SB1342建物跡】

桁行1間以上、梁行2間の南北棟である。SB1341建物跡よりも新しい。柱穴は5ヶ所で検出してお

り、そのうち3ヶ所で径20cmの円形の柱痕跡を、1ヶ所で柱の抜取穴を確認した。平面規模は南北が総長2.1m以上、東西が総長4.0m以上、柱間寸法は北から1.9、2.1mである。方向はE－14°－Nである。

柱穴は楕円形で、長軸60cm、短軸50cm、深さは掘り下げたもので26cm、埋土は地山ブロックを含む暗褐色砂質シルトである。遺物は柱穴埋土から須恵器の甕の胴部破片が出土している。

(4) X－5区（第11図）

【SB1327建　物　跡】

桁行3間、梁行1間の東西棟である。柱穴は7ヶ所で検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認した。平面規模は東西が総長5.8m、柱間寸法は東から1.9、2.1、1.8m、南北が総長3.3mである。方向はE－16°－Nである。

柱穴は楕円形で、長軸20～70cm、短軸15～30cm、深さは掘り下げたもので15cm、埋土は地山小ブロックを含む黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

3．井戸跡

X－1区で3基、X－3区で2基の合計5基を確認した。いずれも掘立柱建物跡など遺構の密度の濃い範囲に分布する。

(1) X－1区（第5図）

平面で確認したのみのため詳細は不明である。

【SE1287井　戸　跡】

径1.4mの円形の井戸跡である。SE1288井戸跡、SK1290土壙よりも新しく、黒褐色砂質シルトが自然堆積している。堆積土の上部から北200mに位置する近世大崎焼窯跡の製品と見られる碗や鉢の破片などが出土している。

【SE1288井戸跡】

径1.8mの円形の井戸跡である。SE1287井戸跡よりも古く、SK1286土壙よりも新しい。地山ブロックを多く含む黒色粘土質シルトで埋戻されている。

【SE1289井戸跡】

径1.7mの円形の井戸跡である。SK1291土壙、SK1295土壙よりも新しい。地山ブロックを含む黒色粘土質シルトで埋戻されている。

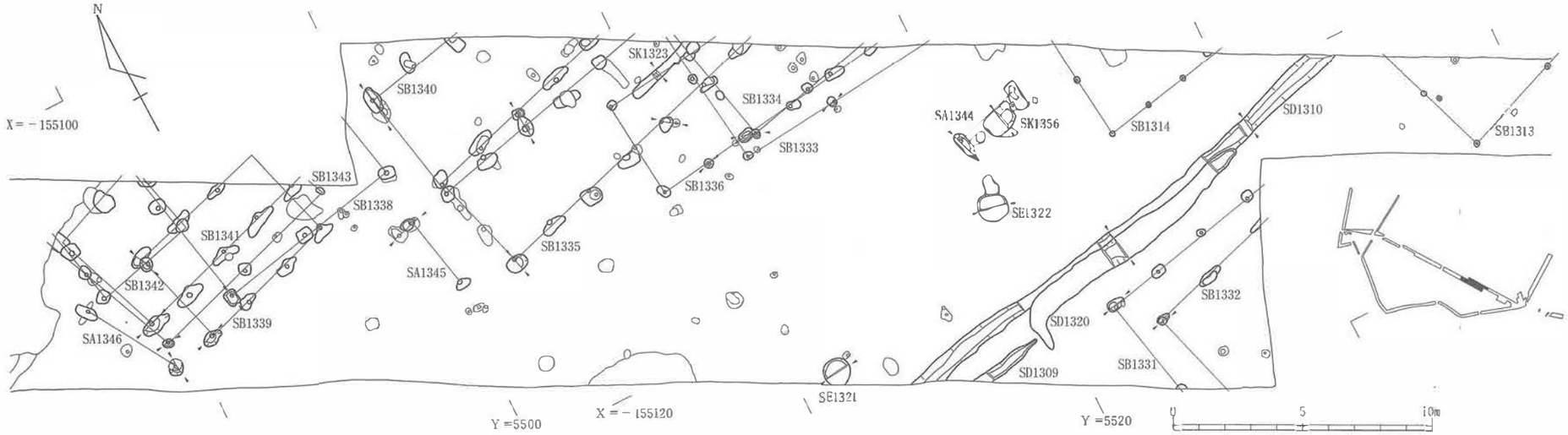
(2) X－3区（第10図）

【SE1321井戸跡】

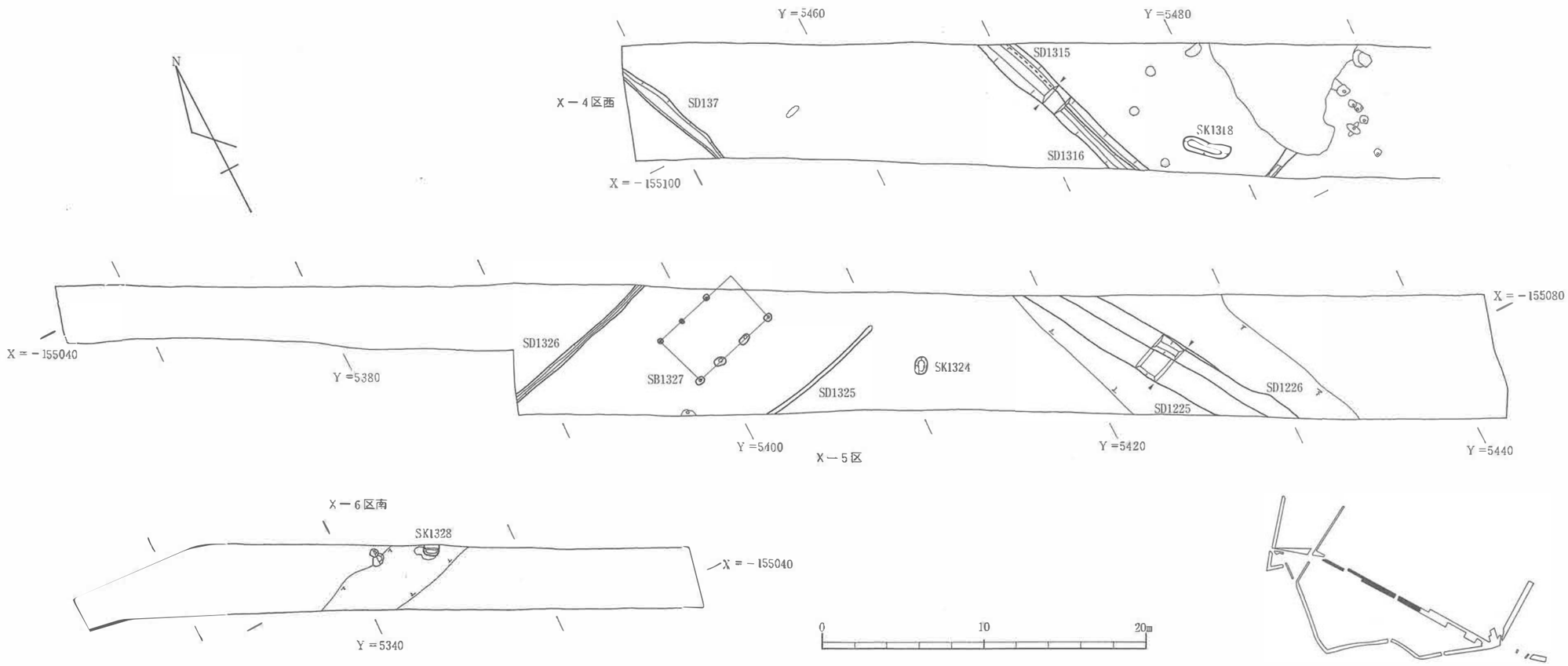
径1.1mの円形の井戸跡である。深さは65cm以上、断面形は逆台形である。地山ブロックや石を含む黒褐色砂質シルトで埋戻されている。堆積土中から須恵器の甕の胴部破片や、大崎焼窯跡の製品と見られる鉢の破片などが出土している。

【SE1322井戸跡】

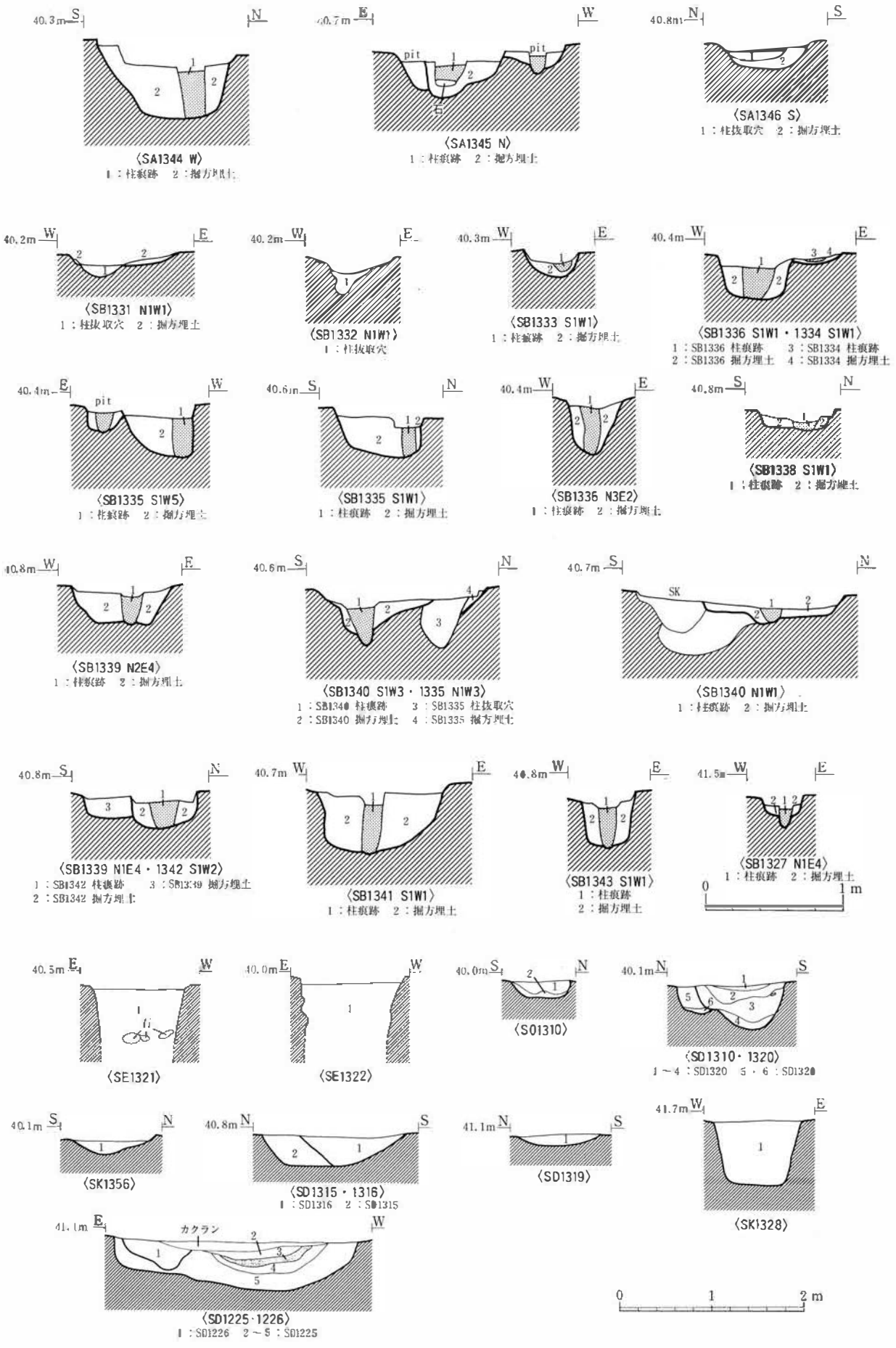
径1.1mの円形の井戸跡である。深さは67cm以上、断面形は不整の逆台形である。地山ブロックを少量含む黒色砂質シルトが自然堆積している。遺物は出土していない。



第10図　X－3・4 区平面図



第11図　X－4・5・6区 平面図



第12図　X－3・4・5・6区遺構断面図

4．溝跡

W－1区で9条、W－2区で10条（うちX－3区まで続くもの2条）、W－3区で3条（うちX－5区まで続くもの2条）、W－4区で5条、W－5区で4条、W－6区で1条（X－6区や田面確認トレンチまで続く）、W－7区で2条、X－1区で5条、X－3区で6条、X－4区で3条、X－5区で2条、Y区で6条の合計56条の溝を確認した。調査区のほぼ全面に分布するが、遺構密度の高い調査区東側に以下に述べるA・B類が集中する傾向が認められる。また、面的に調査を行っていないため不明な点が多いものの、直線的なものが多く、屈曲、湾曲するものは少ない。以下では方向と規模によって溝を分類し、分類ごとに記述する。

A類：北（東）に対して東（南）に5°～18°傾くもの
B類：ほぼ真北（真東）方向、あるいは僅かに西（北）に傾くもの
C類：北（東）に対して西（北）に6°～16°傾くもの
D類：北（東）に対して西（北）に20°～44°傾くもの
その他：湾曲するもの

①：上幅1.5mを越えるもの
②：上幅0.5～1.5mのもの
③：上幅0.5m未満のもの

(1) A類

①SD682～SD684・SD690、SD960・SD1221の6条、②SD1222・SD1260・SD1274・SD1298の4条、③SD1276・SD1299の2条、合計12条である。

W－2区、X－1区に集中し、南北方向で断面形が逆台形を呈する、上幅が1mを越す規模の大きいものが多い。

●A①類

いずれも南北溝でSD690を除いてW－2区で平行して検出された。SD960、SD682、SD1221は重複している（SD960→SD682→SD1221）。またこれらはSB1301～1304建物跡とも重複し、そのいずれよりも新しい。SD682～SD684·SD960は昨年度調査したV－4、Q－2、Q－3区でも確認されており長さは380～400m以上に及ぶものとみられる。Y区で検出されたSD690もQ－4区で確認されており長さは50m以上であるが、南のX－5区では検出されていない。SD682、SD683、SD684の芯ー芯での距離は8.0m、30.0mである。重複している中ではもっとも古いSD960は埋戻されているが、それ以外の堆積土は自然堆積で、SD683、SD684、SD690には堆積層の上部である1層もしくは2層に灰白色火山灰が堆積している。SD682にも昨年度調査したQ－2区、V－4区では灰白色火山灰が堆積しているのが確認されている。

遺物はSD960の堆積土から須恵器甕、平瓦などが極少量出土している。SD682の堆積土からは非ロ

クロ調整の土師器坏やロクロ調整の土師器甕、須恵器坏や甕、平瓦などの破片が僅かに出土している。またSD683の堆積土からはロクロ調整の土師器坏が極少量出土している。

●A②類

南北溝2条、東西溝2条である。東西溝SD1260はW－7区の北端で確認され、さら北側に位置する昨年度調査区S－1区東で確認されたSD694、SD696などとほぼ平行する。同じく東西溝SD1274はD③類のSD1297と重複し、それよりも古い。遺物はSD1222の堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕などが少量、SD1274の堆積土からは非ロクロ調整の土師器甕や須恵器坏が少量出土している。またSD1298の堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕が極少量出土している。

●A③類

SD1276はX－1調査区西から延びて南に直角に曲がる。C③類のSD1280、D③類のSD1279と重複し、いずれよりも古い。遺物は非ロクロ調整の土師器甕が少量出土している。

SD1274、SD1276は軸線が北に対して5°から10°東に傾くSB1275建物跡、SB1278建物跡と重複し、これらよりも古い。どちらからも遺物は出土していない。

(2) B類

②SD1027・SD680・SD678・SD1212・SD1206の5条、③SD1207・SD679・SD1210の3条、合計8条である。

W－1区のみで検出された。①類はなく部分的に上幅が1.4mに広がるSD1027が最も規模が大きい。断面形はU字形あるいは皿形を呈するものが多い。SD1027、SD680、SD678、SD679はQ－1区でも確認されている。

●B②類

いずれも南北溝であり、他の溝などと重複し詳細が不明なSD1206、SD1212を除くと、全て調査区（X－1区、Q－1区）内で東に屈曲している。SD1027はW－1区北側で東にほぼ直角に曲がり、南北方向は12m、東西方向は25mである。SD680もW－1区で東にほぼ直角に曲がり、南北方向は25m、東西方向は4mである。それと平行するSD678もW－1区で東にほぼ直角に曲がり、南北方向は23m、東西方向は3mである。いずれからも遺物は出土していない。

●B③類

SD679はW－1区で東に曲がる。南北方向は24m、東西方向は2mに及ぶ。南北方向ではSD678、SD680と平行しているが、屈曲が緩やかで東西方向では平行しない。遺物は出土していない。

(3) C類

②SD1245・SD1300・SD1234・SD1235・SD1243・SD1320・SD1246・SD1309・SD1310の9条、③SD1280・SD1247・SD1326・SD1319・SD1227・SD1325の6条、合計15条である。

W－4区、W－5区、X－3区、X－5区に比較的集中し、東西溝が多い。①類は認められない。

●C②類

X－3区で規模や方向などの諸特徴が類似するSD1310、SD1309、SD1300の芯ー芯での距離はそれぞれ11.6m、22.3mである。またSD1245とSD1246は平行して重複し、前者が古く、W－5区西端で北にほぼ直角に曲がるのに対して、SD1246は西に直線上に延びる。SD1300はX－3区、W－2区で重複するA①類のいずれの溝（SD960・SD682・SD684・SD1221・SD1298）よりも新しく、堆積土からロクロ調整の土師器坏や甕、須恵器坏・甕が少量出土している。X－4区で確認したSD1310はW－4区西側のSD1245・SD1246と方向や規模、堆積土などの諸特徴が類似しほぼ同一直線上に位置する。したがってこのいずれかの溝と同一のものの可能性がある。遺物は堆積土から須恵器坏・蓋が極少量出土している。この他、SD1320の堆積土から須恵器坏や大崎焼の擂り鉢が極少量出土している。

●C③類

X－5区の東西溝SD1325、SD1326は、東西棟であるSB1327建物跡の南北に平行している。ただし、SD1326は上幅0.2～0.5mであるのに対してSD1325は上幅0.2mと小さく、東側で途切れている。遺物の出土した溝はない。

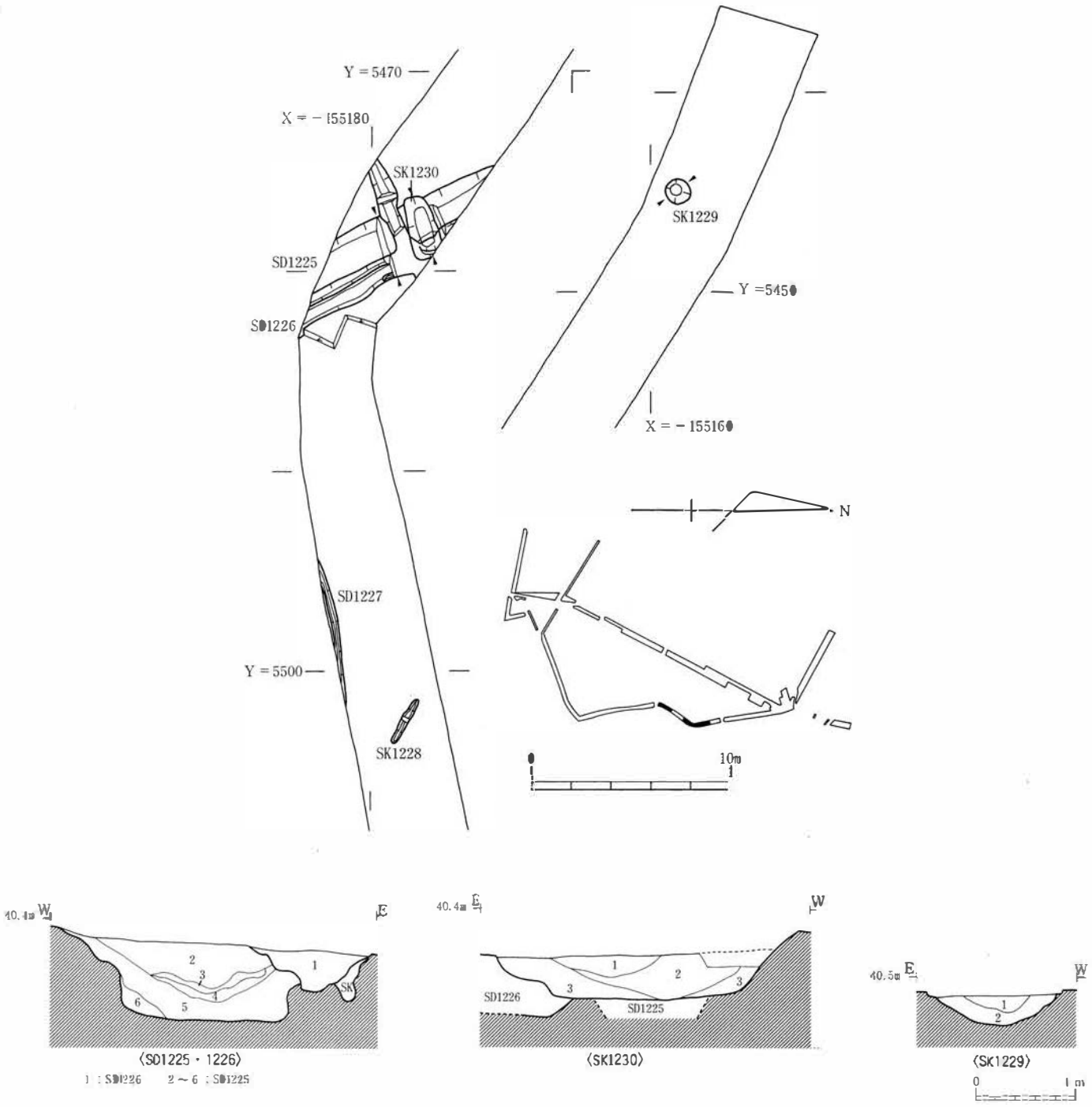
(4) D類

①SD692・SD1225・SD696・SD1236の4条、②SD1316・SD1248・SD1226・SD1307・SD1317・SD1358・SD1315・SD697・SD1244の9条、③SD1297・SD1259・SD1370・SD1371・SD1279・SD1308の6条、合計19条である。

W－1区を除いて、調査区のほぼ全面で検出された。

●D①類

上幅が2.0mを越え、複数の調査区にまたがる規模の大きいものが多い。特にW－6区、X－6区、Y区①・3～9トレンチ、Q－4区で確認したSD692は上幅が検出面で4.0～4.5m、下幅2.6～3.0m、深さ84cmと非常に規模が大きい。現在確認されているだけでも270mの長さがあり、昨年度調査した大崎窯跡の確認トレンチの北西端において検出された溝もSD692の可能性がある。北東の延長線上にあたるV－1区、V－2区では沢状になっており検出されていないが、ここまで延びていた可能性が高い。V区までで長さは550mあまりとなる。この溝と直交し南に延びるSD1225は同時に存在していた。同じく直交し北に延びるSD696はSD692がある程度埋まった段階で新たに直角に付け加えられた溝であり、同時に存在していた時期はあるが、構築年代はやや新しい。直交して南に延びるSD1316も同様の可能性が高い。また検出された全ての場所において、この溝の北側2.4～4.2mのところを平行して③類土壙がほぼ2.3m間隔で2列に並んで千鳥状に分布する。遺物は上層からロクロ調整と非ロクロ調整の土師器坏や須恵器甕・壷、丸瓦などが極少量出土している。またSD696はSD692に平行する③類土壙SK1350と重複し、これより新しい。長さは130m以上で、R－1区で方向を西向きに転じている。遺物は出土していない。SD1225は長さは220m分検出されているが直交するSD692の北には延びない。遺物は堆積土から須恵器甕の破片が少量出土している。この他、SD1236の堆積土から凹面に布目のついた平瓦もしくは丸瓦の破片が出土している。

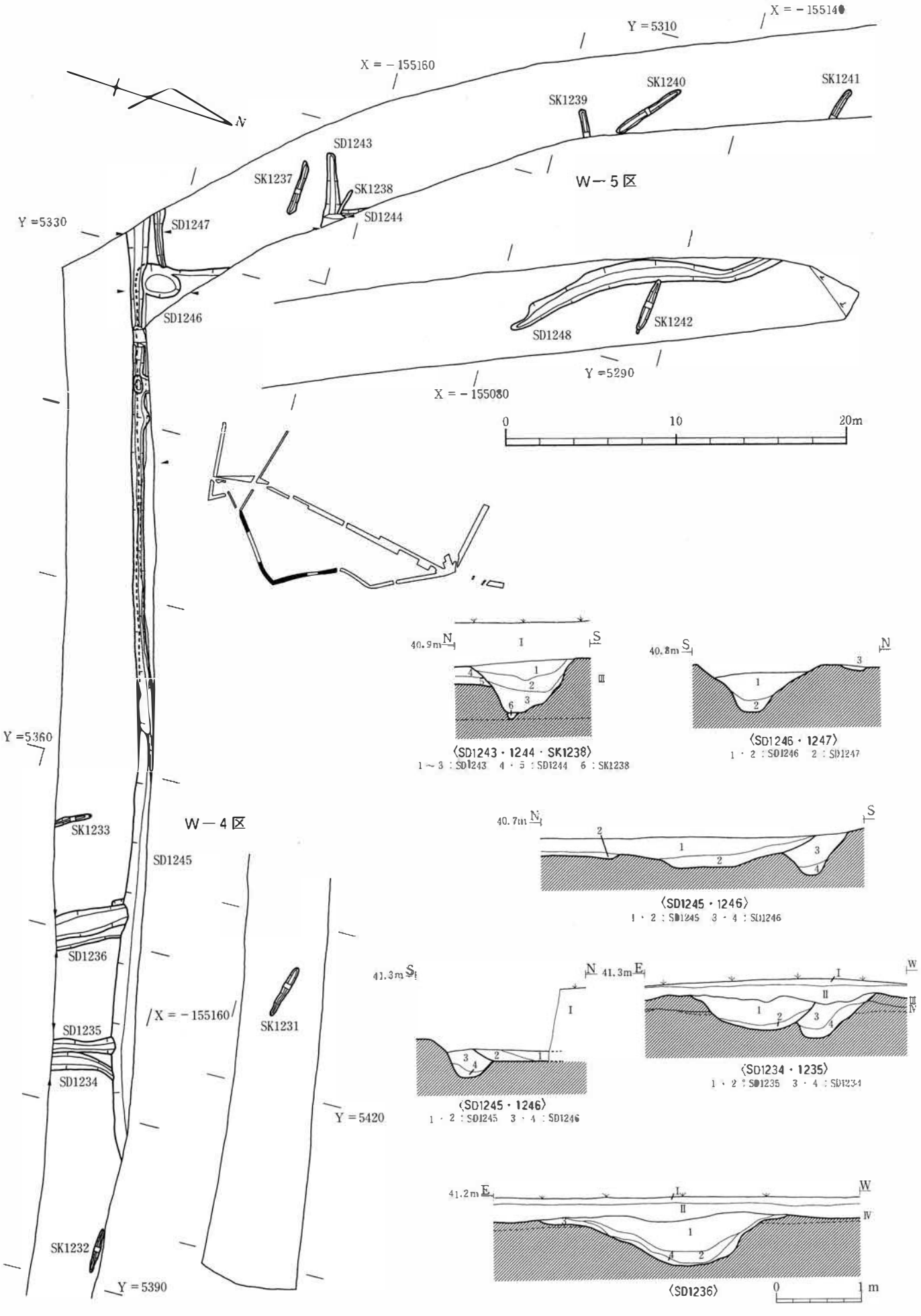


第13図　W－3区

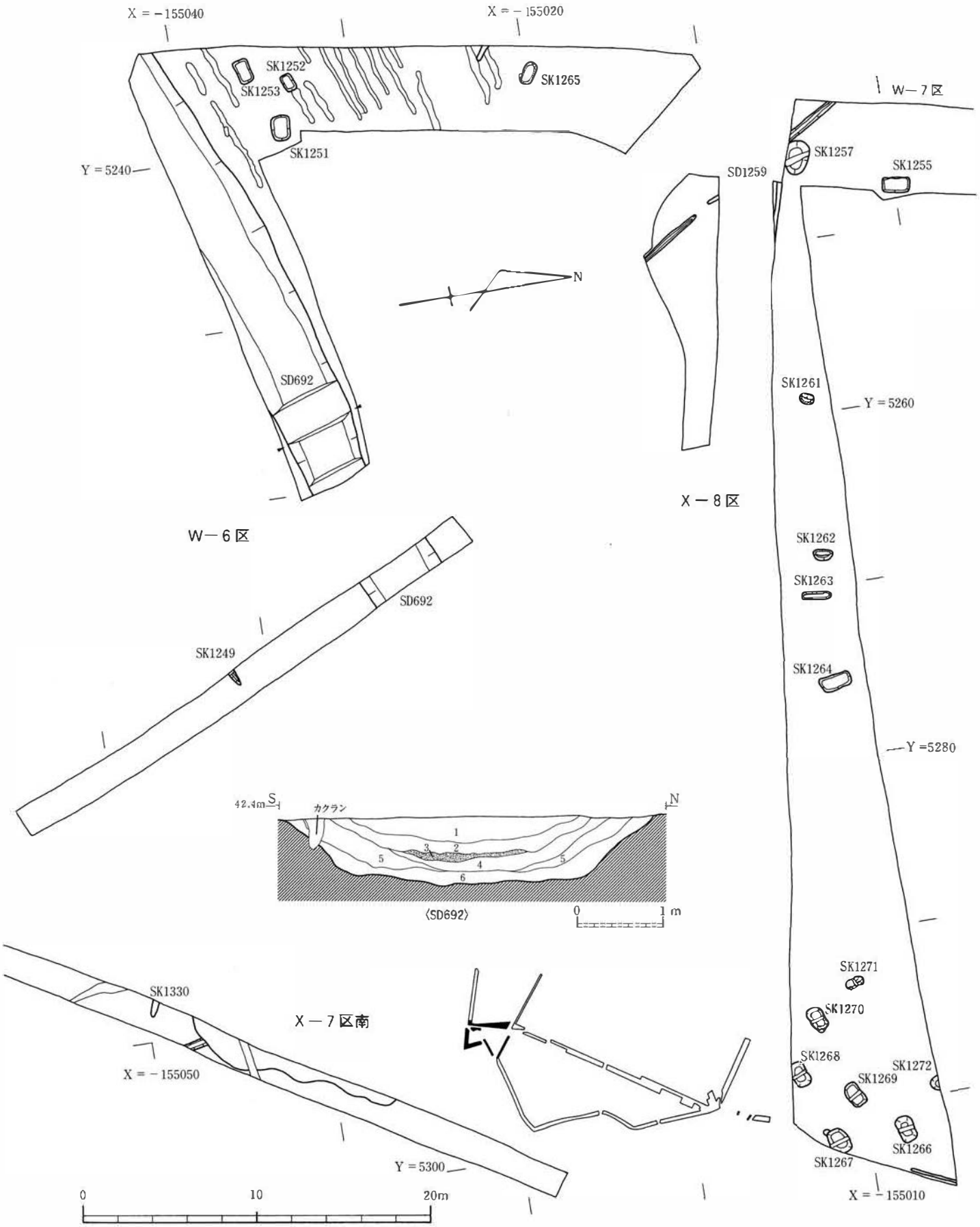
●D●類

SD1226とSD1307を除いて全て南北溝である。SD1226とSD1307も南北溝が分岐したり（SD1226）、直角に折れ曲がったり（SD1307）する。

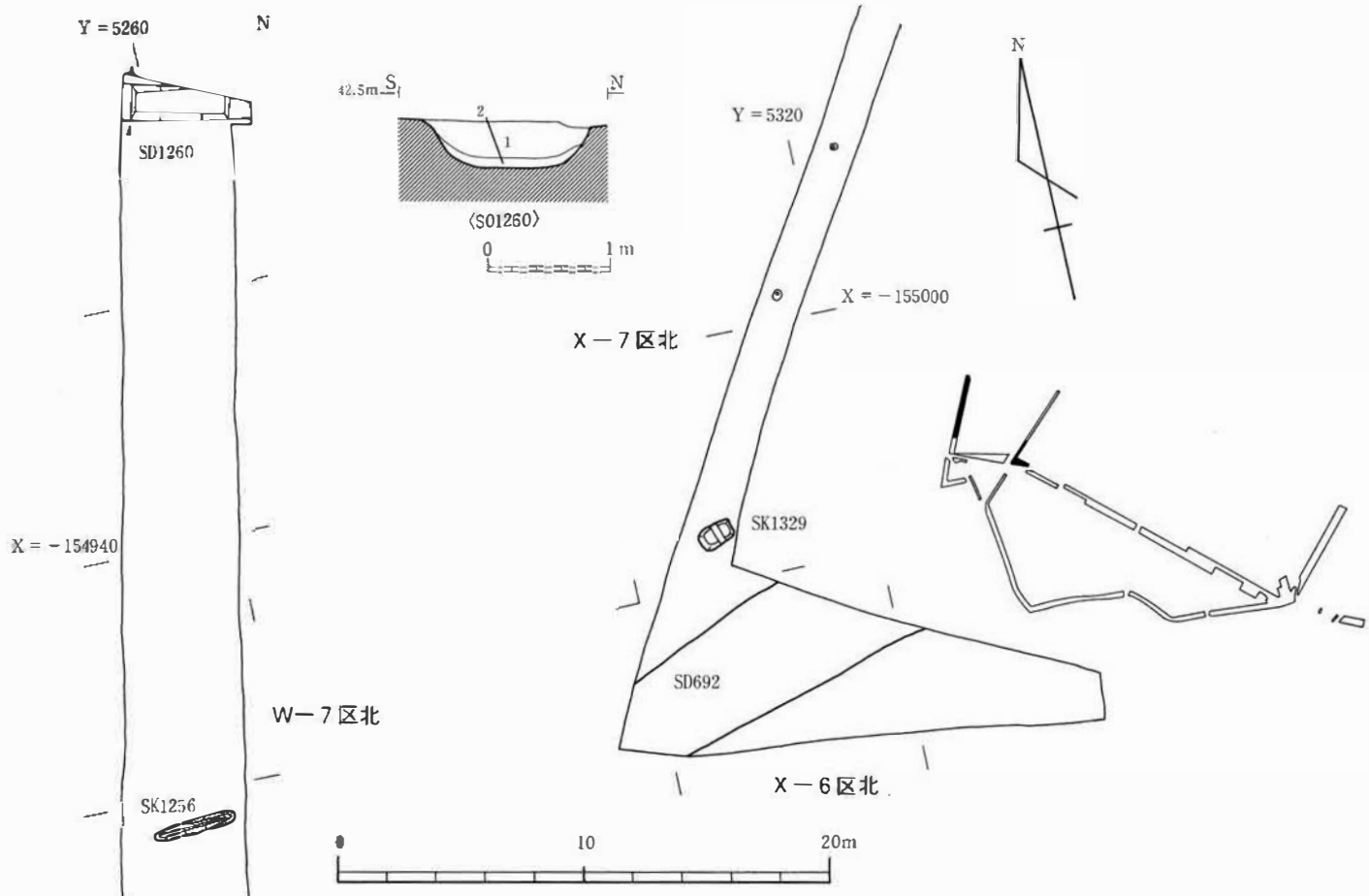
SD1316はSD692と直交しこれよりも北には延びない。明確な切り合いはつかめなかったが、SD696と同様にSD692がある程度埋まった段階に新たに直角に付け加えられた溝で、同時に存在していた時期はあるが、構築年代はやや新しいと思われる。SD1307はX－3区でほぼ直角に鉤状に折れ曲がっ


X = −155140
Y = 5310
X = −155160
SK1239
SK1240
SK1241
N
SD1243
SK1237
SK1238
SD1244
W−5区
Y = 5330
SD1247
SD1246
SD1248
SK1242
Y = 5290
X = −155080
0
10
20m
Y = 5360
SK1233
W−4区
SD1245
SD1236
SD1235
SD1234
X = −155160
SK1231
Y = 5420
SK1232
Y = 5390
40.9m N
S
〈SD1243・1244・SK1238〉
1～3：SD1243 4・5：SD1244 6：SK1238
40.8m S
N
〈SD1246・1247〉
1・2：SD1246 2：SD1247
40.7m N
S
〈SD1245・1246〉
1・2：SD1245 3・4：SD1246
41.3m S
N
41.3m E
W
〈SD1234・1235〉
1・2：SD1235 3・4：SD1234
〈SD1245・1246〉
1・2：SD1245 3・4：SD1246
41.2m E
W
〈SD1236〉
0
1m

第14図　W−4、5区



第15図　W−6区、X−6・7・8区断面図



第16図　W－7区、X－6・7区

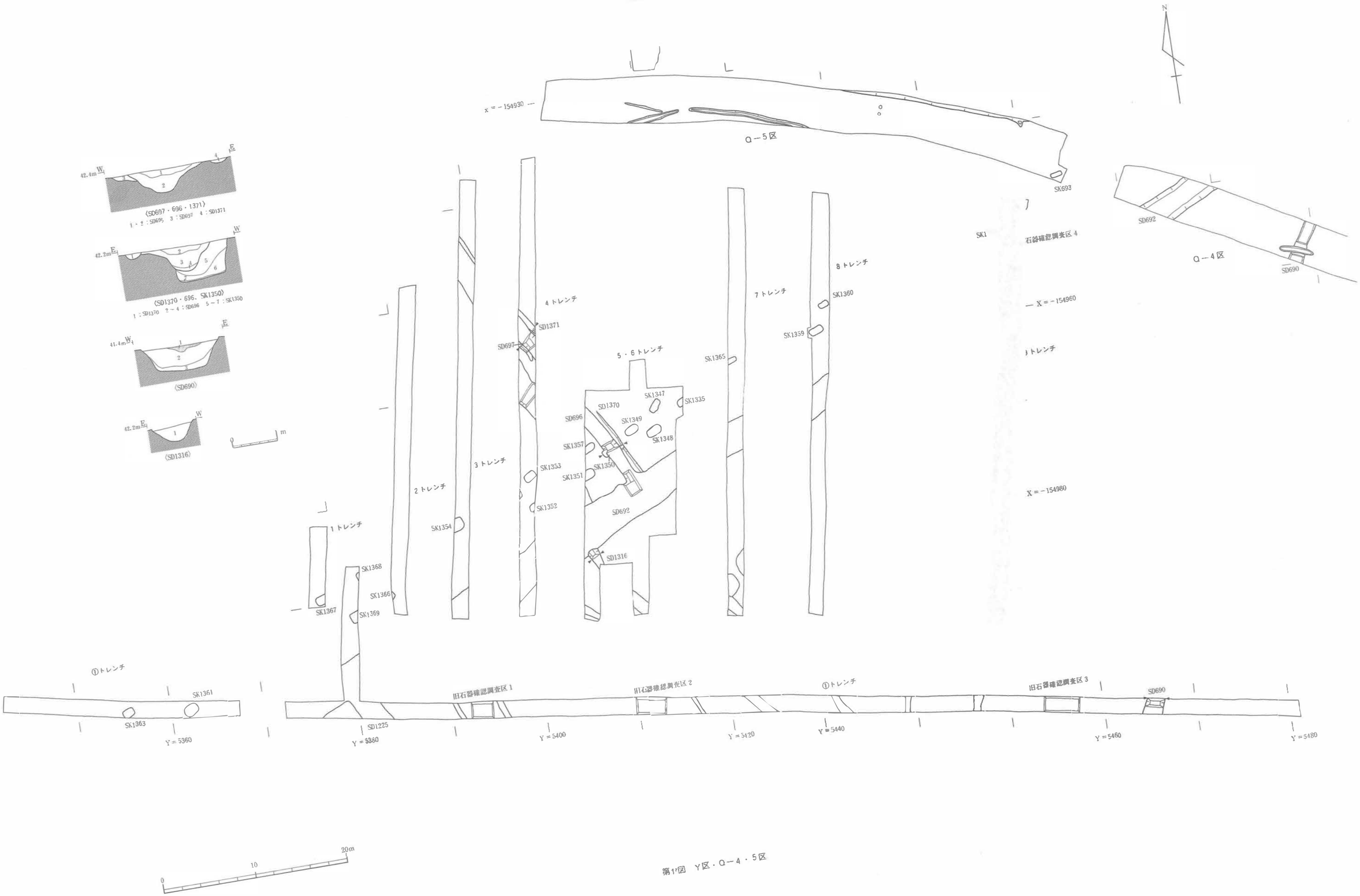
ている。SD697溝跡は長さは70m以上であるが、4トレンチで途切れており、北西の直線上にあるR－2区でも検出されていない。以上の溝からは遺物は出土していない。しかしSD1315の堆積土から須恵器甕・瓶、磁器の茶碗、大崎焼の製品（器種不明）などが少量出土している。

●D③類

南北溝が多い。SD696と平行して重複するSD1370、SD1371は、前者がSD696より新しく、後者が古い。SD1308の堆積土からは陶器の破片が極少量出土している。

5．土壙

W－1区で7基、W－2区で7基、W－3区で3基、W－4区で3基、W－5区で6基、W－6区で6基、W－7区で4基、X－1区で14基、X－3区で4基、X－4区・X－5区・X－6区で各1基、X－7区で2基、X－0区で11基、Y区で20基の合計90基の土壙を確認した。調査区のほぼ全面に分布するが、遺構密度の高い調査区東側のW－1区、W－



Q－5区
Q－4区
x＝－154930
X＝－154960
X＝－154980
SK693
SK1
石器確認調査区4
SD692
SD690
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5・6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
SD1371
SD697
SK1353
SK1352
SK1354
SK1368
SK1366
SK1367
SK1369
SD1370
SD696
SK1347
SK1335
SK1349
SK1348
SK1357
SK1350
SK1351
SD692
SD1316
SK1365
SK1360
SK1359
SK1361
SK1363
SD1225
旧石器確認調査区1
旧石器確認調査区2
旧石器確認調査区3
Y＝5360
Y＝5380
Y＝5400
Y＝5420
Y＝5440
Y＝5460
Y＝5480
(SD697・696・1371)
1・2：SD696　3：SD697　4：SD1371
(SD1370・696、SK1350)
1：SD1370　2～4：SD696　5～7：SK1350
(SD690)
(SD1316)
42.4m
42.2m
41.4m
42.2m
0
10
20m

第1図　Y区・Q－4・5区

2区、X－1区とY区に集中する傾向が認められる。以下では形態と規模によって土壙を分類し、分類ごとに記述する。なお、①・③・④類は昨年度調査の報文と一致する。

①類：平面形が溝状で、横断面形がU字状や逆三角形のもの
②類：平面形が楕円形あるいは長楕円形で、断面形が皿状や逆台形のもの。
③類：平面形が隅丸長方形で、断面形が箱形や逆台形を主体とするもの
④類：平面形が隅丸長方形や方形を基調とし、横断面形は一方の壁がオーバーハングするもの
⑤類：その他

(1) ①類（第18図）

18基確認した（SK1218～1220・1228・1231～1233・1237～1242・1249・1254・1256・1323・1330）。W区に多く分布し、特に他の遺構がほとんど認められないW－5区に6基も分布している。W－5区のSK1238はC②類溝のSD1243、D②類溝のSD1244と重複し、いずれよりも古い。W－5区のSK1242もD②類溝のSD1248よりも古い。

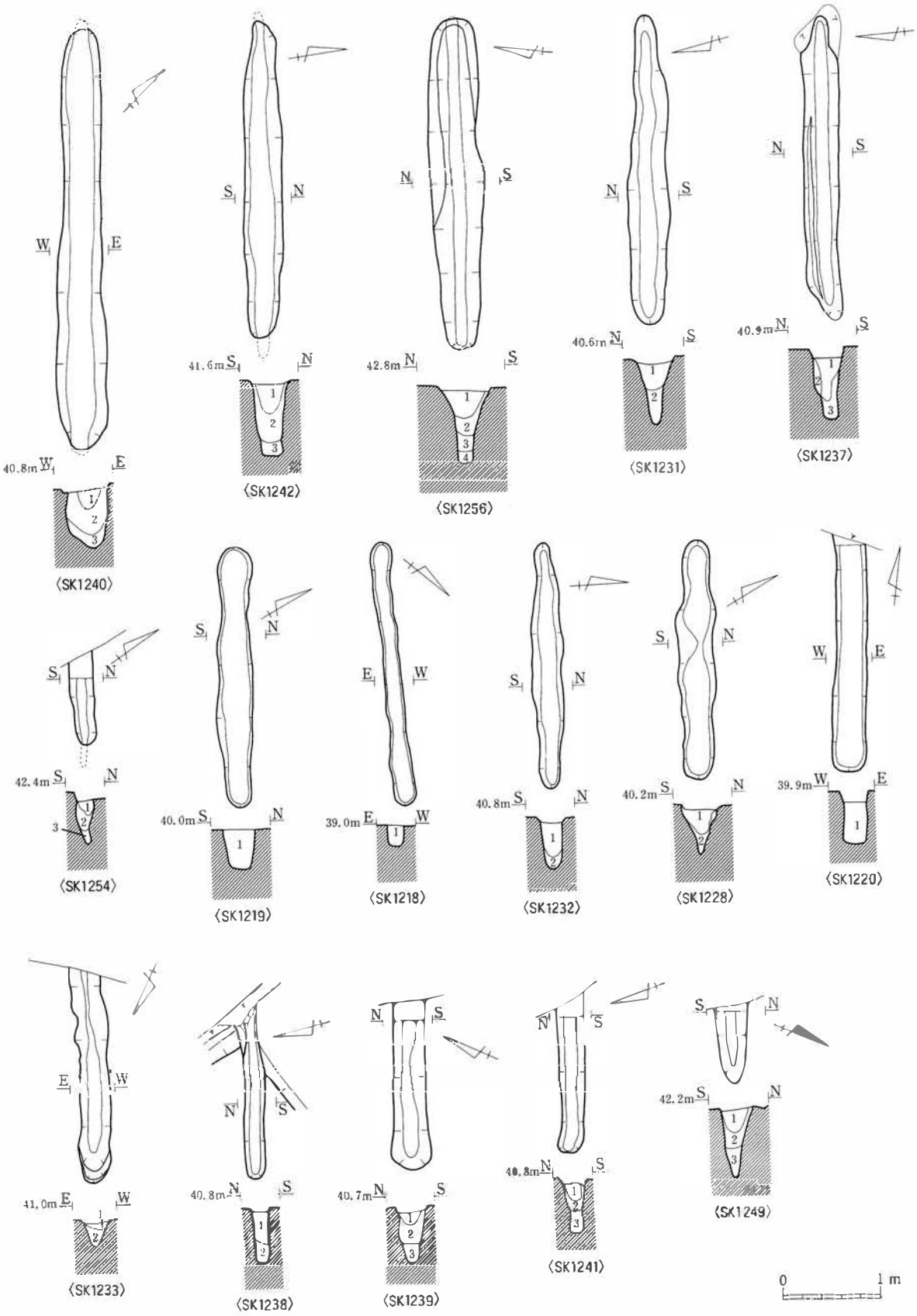
規模は長さ2.5～4.3m、幅0.2～0.5m、深さ21～80cmである。深さは50cmを越す深いものが多い。W－5区のSK1240、SK1242は両端が、W－7区のSK1256は東端がオーバーハングしている。長軸方向は30°までの範囲で北か南に振れる東西方向のものが多く、東に対して南に3°～30°振れるものが10基ある。堆積土は締まりのない黒色や黒褐色・暗褐色のシルトで、地山の土の混ざり方で2～3層に分けられる。すべて自然堆積である。またW－5区のSK1237、SK1239～SK1242、W－6区のSK1254、W－7区のSK1256は3層に分層され、黒色～暗褐色シルトを主体とする1・3層に挟まれて2層に地山の土を多く含む黄褐色～褐色のシルトが堆積している。2層も締まりがなく壁の崩落土と考えられる。断面形はU字形を呈するものが主体であるが、三角形を呈するもの（SK1228・1231・1233・1249・1254）や薬研状のもの（SK1256）もある。遺物の出土しているものはない。

(2) ②類

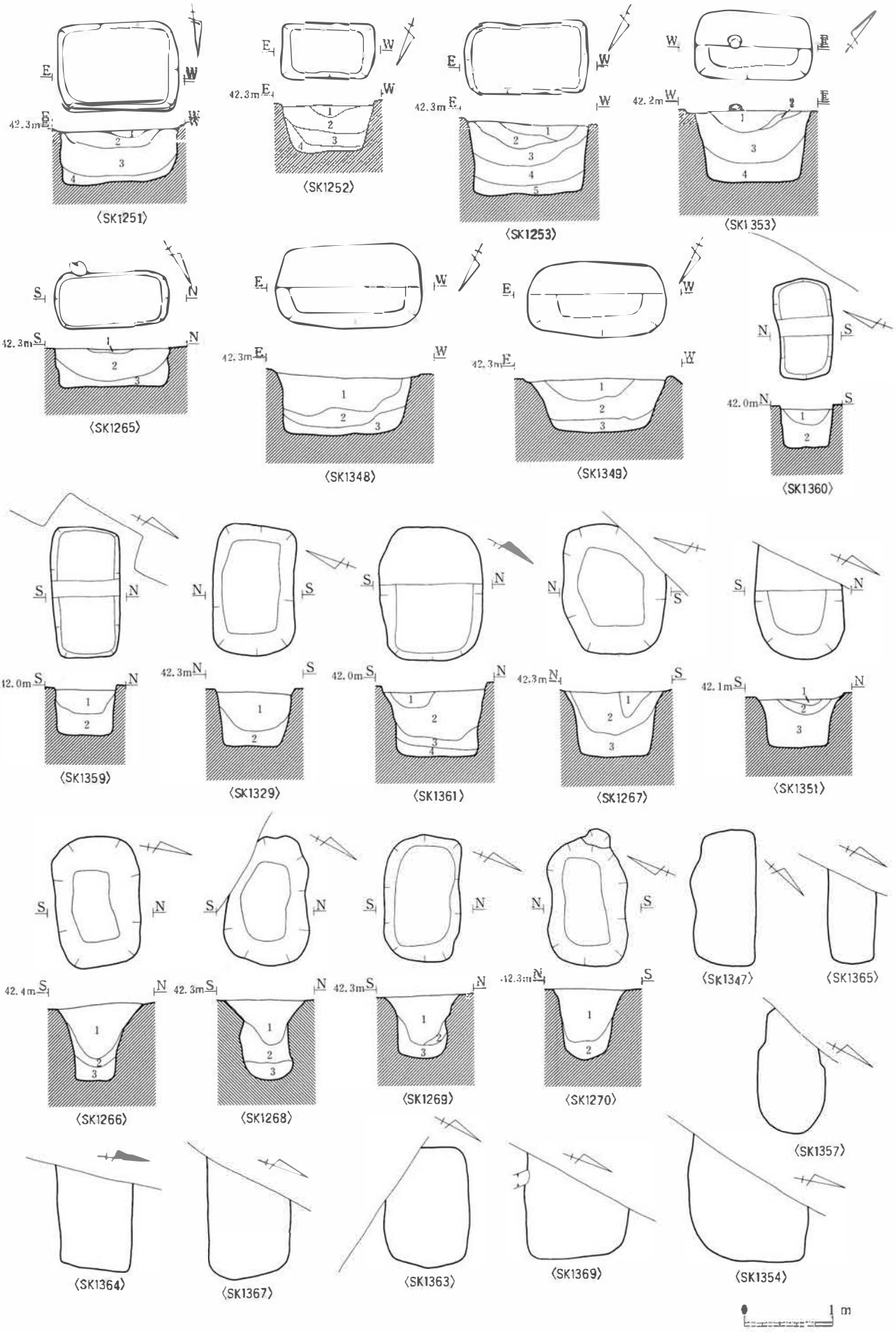
15基確認した（SK1204・1205・1209・1215・1257・1258・1282～1286・1290・1311・1312・1324）。遺構の集中するW－1区、X－1区に多く分布する。特にX－1区には6基分布する。W－1区のSK1204はB②類溝のSD678より、SK1209はB②類溝のSD680より、SK1215はSD678・SD680・B③類溝のSD679よりも古い。X－1区のSK1286はSE1287・SE1288より、SK1290はSE1287より、SK1285はSB1275よりも古い。また、W－1区のSK1205はSD679・SD680・SK1215より、X－1区のSK1282はC③類溝のSD1280より、SK1283はSB1277よりも新しい。

規模は長軸1.0～2.3m、短軸0.7～1.9m、深さ13～77cmである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色～灰黄褐色のシルトで人為的に埋戻されているものが多い。

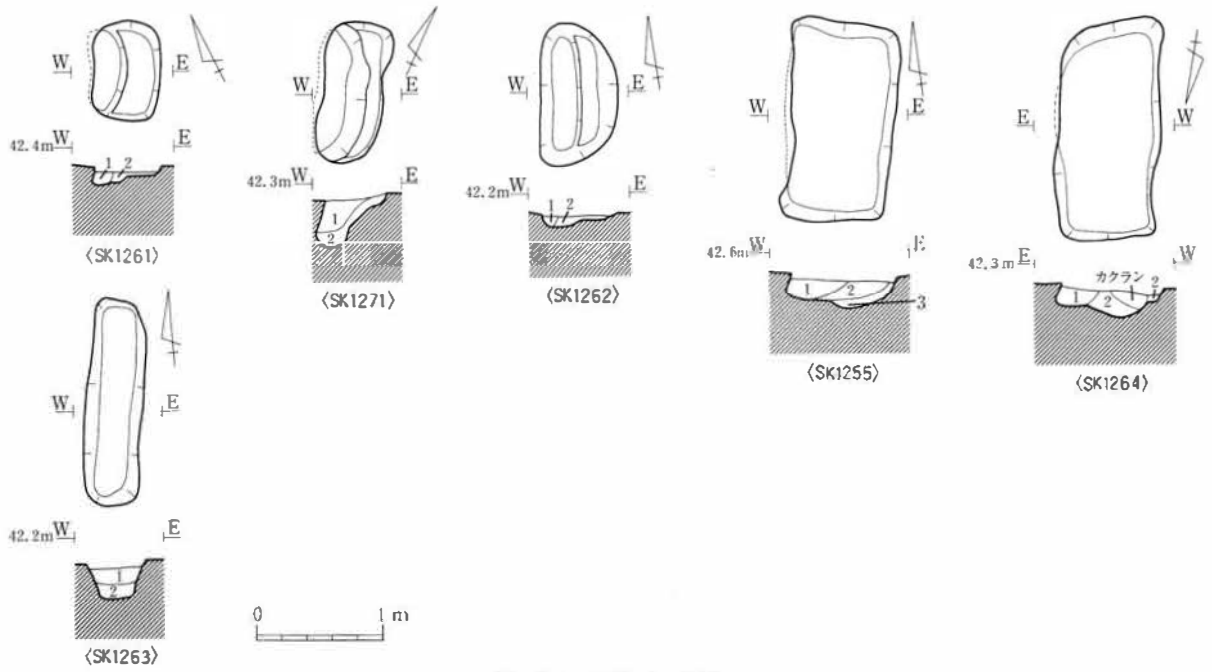
遺物はX－1区のSK1282から須恵器坏が、W－7区のSK1257から大崎焼の製品（器種不明）がそれぞれ極少量出土している。


〈SK1240〉
〈SK1242〉
〈SK1256〉
〈SK1231〉
〈SK1237〉
〈SK1254〉
〈SK1219〉
〈SK1218〉
〈SK1232〉
〈SK1228〉
〈SK1220〉
〈SK1233〉
〈SK1238〉
〈SK1239〉
〈SK1241〉
〈SK1249〉
0 1 m

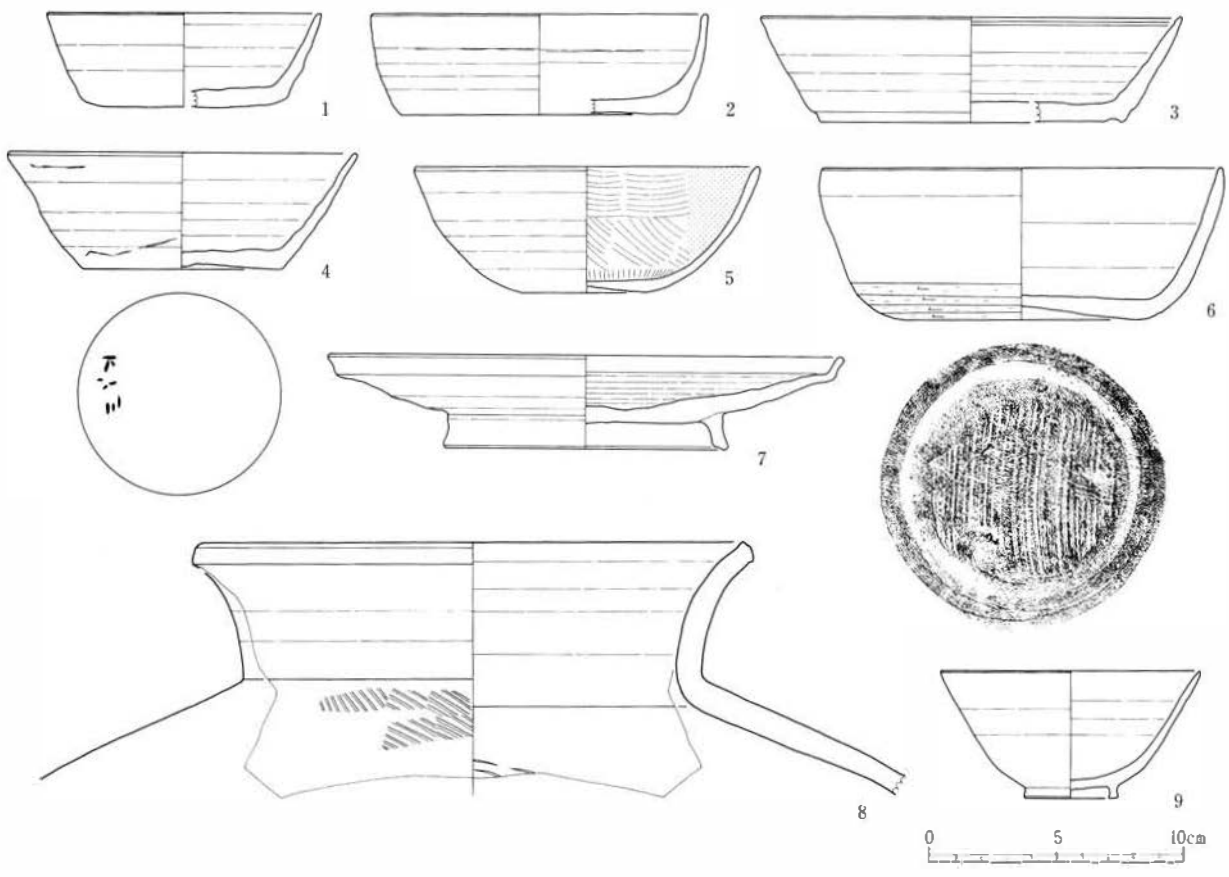
第18図　土壙①類


〈SK1251〉
〈SK1252〉
〈SK1253〉
〈SK1353〉
〈SK1265〉
〈SK1348〉
〈SK1349〉
〈SK1360〉
〈SK1359〉
〈SK1329〉
〈SK1361〉
〈SK1267〉
〈SK1351〉
〈SK1347〉
〈SK1365〉
〈SK1266〉
〈SK1268〉
〈SK1269〉
〈SK1270〉
〈SK1357〉
〈SK1364〉
〈SK1367〉
〈SK1363〉
〈SK1369〉
〈SK1354〉
1 m

第19図　土壙●類



第20図　土壙④、⑤類



No.	器種	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	Y14SD1316	外面：切離し不明→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	10.8	8.0	3.7	1/5	8-2
2	須恵器・坏	Y区 確認面	外面：切離し不明→手持ちヘラケズリ→ロクロナデ	13.3	10.8	3.9	1/3	8-3
3	須恵器・坏	X-11区 SK1282	外面：切離し不明→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	16.5	11.8	4.1	1/6	
4	須恵器・坏	W-2区 SB1303	外面：回転ヘラキリ→ロクロナデ　底部に墨書「下口」	13.8	7.9	4.6	1/2	8-5
5	土師器・坏	W-6IZSD692	外面：回転糸切り→ロクロナデ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.6	4.8	4.9	1/3	8-1
6	須恵器・坏	Y区 SK1353	外面：静止糸切り→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	15.9	9.4	6.0	完形	8-4
7	須恵器・高台皿	X-2区 表採	外面：切離し不明→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	20.3	11.2	3.7	1/2	8-7
8	須恵器・甕	X-5区 SD1225	外面：ロクロナデ→平行タタキ、内面：ロクロナデ→同心円文	22.0		(10.0)	1/10	8-8
9	陶器・鉢	X-5区 SD1236	内外面：鉄釉　口折り出し高台	10.2	3.7	5.0	完形	8-6

第21図　出土遺物

(3) ③類（第19図）

33基確認した（SK1251～1253・1265～1270・1273・1292・1328・1329・1347～1355・1357・1359～1361・1363～1369）。ほとんどがY区やW－6区、X－6区・X－8区のD①類溝であるSD692の北辺に沿って千鳥状に分布する。Y区5・6トレンチのSK1350はD①類溝のSD696より、X－1区のSK1292は⑤類土壙のSK1295より古い。

規模は長さ1.2～1.7m、幅0.6～1.4m、深さ45～92cmである。深さは多くが60cm以上で、各類型の中では最も深い。SD692溝に平行するもの以外では、X－1区のSK1273は長軸がE－35°－Sで、同じくSK1292はN－8°－Wである。X－6区のSK1328はN－25°－Eでいずれも規則性は認められない。断面形は箱形や逆台形を呈し、底面は平坦である。しかしX－8区のSK1268～1270は壁の上部が崩れたようなロート状の断面形で、底面も皿状に窪んでいる。SK1266も断面はロート状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色・暗褐色のシルト・砂質シルトで人為的に埋戻されたものである。Y区3トレンチのSK1354は掘り下げてはいないが、上層に灰白色火山灰のブロックが少量自然堆積している。またW－6区のSK1251～SK1253・SK1265は最上層の1層に黒色の砂質シルトが自然堆積し、それ以下の層は人為的に埋戻されている。

遺物はY区4トレンチのSK1353の上層から須恵器坏が出土している（第21図－6）。この他、Y区①トレンチのSK1361から須恵器坏、Y区2トレンチのSK1366から須恵器甕、X－1区のSK1273から非ロクロ調整の土師器甕が極少量、埋土から出土している。

(4) ④類（第20図）

5基確認した（SK1255・1261・1262・1264・1271）。調査区の西端のみに分布し、X－8区に4基集中する。他の遺構との重複はない。規模や平面形態から長軸が1.5m以上のa類と1.5m未満のb類がある。

a類は2基で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.6～1.8m、幅0.8m、深さ27、28cmである。横断面形は一方の壁がオーバーハングする不整の袋状で、中心付近がやや深くなり底面に段が認められる。長軸は南北方向にほぼ平行し、W－7区のSK1255は西壁が、X－8区のSK1264は東壁がオーバーハングする。

b類はX－8区で検出された3基で、平面形は楕円形や隅丸長方形を呈する。規模は長さ0.8～1.1m、幅0.5～0.6m、深さ10～43cmである。横断面形はa類と同じであるが、オーバーハングする壁際の底面が深くなり反対側が段状になる。b類も長軸がほぼ南北方向に平行し、西壁がオーバーハングするか深くなっている。

a・b類とも堆積土は、2・3層は地山ブロックを多く含む黄灰色や褐色、暗褐色の砂質シルトで人為的な埋土である。1層は地山の粒を少し含む黒色や黒褐色のシルトである。これも人為的な埋土の可能性が高いが、2・3層とはある程度の時間的間隙があると推定される。

遺物はSK1261の堆積土から縄文の施された土器が1片出土している。

(5) ⑤類（第20図）

19基確認した（SK1213・1214・1216・1223・1224・1229・1230・1263・1272・1281・1291・1293～

1296・1305・1306・1318・1356)。形態的にまとまらないものを●類とした。遺構の密度の濃いW－1～W－3区、X－1区に多く分布する。

円形、楕円形、不整形など形態は様々で、大きさも0.5m以下から4mを越えるものまである。

【SK1305】

W－2区で確認した。A①類のSD1221溝より古く、SB1301・1303建物跡よりも新しい。平面形は細長い不整形で長軸5.0m以上、短軸2.2m以上、深さ18cmである。断面形は皿状で、堆積土は2層が黒褐色砂質シルト、1層に灰白色火山灰が自然堆積している。遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏、須恵器坏が少量出土している。

【SK1306】

W－2区で確認した。北東部が調査区外のため詳細は不明であるが、平面形は不整楕円形で長軸6.0m以上、短軸4.0m以上、深さ20cmである。断面形は皿状で、黒褐色シルトが自然堆積している。遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が少量出土している。

この他、X－1区のSK1295の堆積土から須恵器甕が極少量出土している。

6．SK291土壙（A－1区北）（第2・22図）

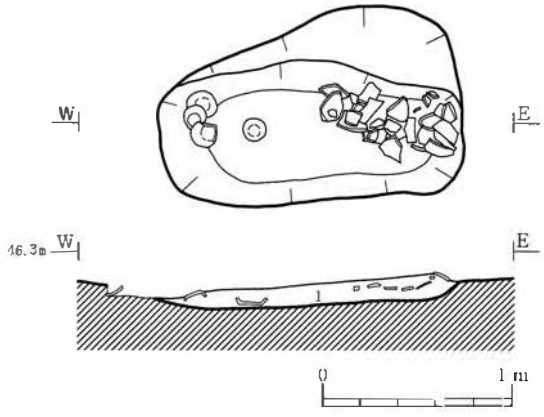
平成12年4月に、今回のほ場整備事業の対象地域外を田面工事をしている際に藤原二郎氏により発見、通報されたものである。土師器甕1点と須恵器坏2点（第23図1・4・7）は地表面に散乱していたものを藤原二郎氏により採集されたものであり、残りの須恵器坏4点と甕1点は発掘により出土したものである。(第23図2・3・5・6・8)

土壙は平成11年度に調査を行ったA－1区の北側10mほどの地点に位置する。上部が削平されており詳細は不明であるが、平面形は不整の隅丸長方形で長軸1.6m、短軸1.0m、深さ15cmである。断面形は皿状で黒褐色のシルトが自然堆積している。

遺物は一部露出していたが、本来は堆積土の下部にあったものであり、底面に乗る形で出土したものもある。須恵器坏は遺構内の西側、須恵器甕は東側から出土した。坏は3点が内面を上にして、1点が上向きの坏に挟まれるように伏せた形で出土した。須恵器坏はいずれも手持ちヘラケズリで、切離しが分かるものは静止糸切りである。須恵器甕は外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が認められ、後にナデ調整が施されている。この須恵器坏は日の出山窯産で第Ⅲ群土器に位置づけられ、8世紀前半と思われる。この他、堆積土中から天王山式土器の甕？の破片も出土している（第24図1)。

7．SK34土壙墓（A－1区）（図版9）

平成10年度の調査で検出された。長軸144cm、短軸58cmの長方形を呈し、断面形は箱形と推定される。深さは24cmである。底面から刀子2本と共に鉄剣が出土した（第25図)。鉄剣は茎の先端が僅かに欠損しているがほぼ完形である。刀身は平棟平造りの直刀である。区は、棟区は錆のため明確ではないが両区と推定される。茎尻近くに鉄製の目釘が1本打ち込まれている。茎、刀身の両面に木質が残



第22図　A－1区北 SK291土壙

存し、木製鞘および柄の材と推定される。片面は錆が進行して木質が浮き上がっている。目釘は錆の進行により二分され、頭部は錆により膨れあがった木質とともにある。鍔は鉄製で平面形が倒卵形あるいは小判形を呈する板鍔であるが、鏁と共に詳細は錆のため不明である。刀子についてはすでに報告済みである。

8．F区（第3図）

昨年度の調査で近現代の遺構を検出した。F区の北東には沢が認められ、中世名生城の堀の跡とも推定されてきた。沢は現況でも最大1mほど周囲よりも低く、湿地となり南東に続いている。沢の一部も調査の範囲に含まれたためトレンチによる調査を行った。その結果、沢の表面下50cmほどのところに厚さ約10cmの灰白色火山灰の一次堆積層が認められた(第26図)。沢の底面は確認できなかったが、堆積土はいずれも自然堆積の砂質シルトやシルト質砂であり、遺物や明確な壁の立ち上がりは検出できなかった。したがってこの沢は自然地形であり、古代以前は深い沢であったのが徐々に埋まって、中世にはすでに湿地となっていたことが明らかとなった。

Ⅲ．考察

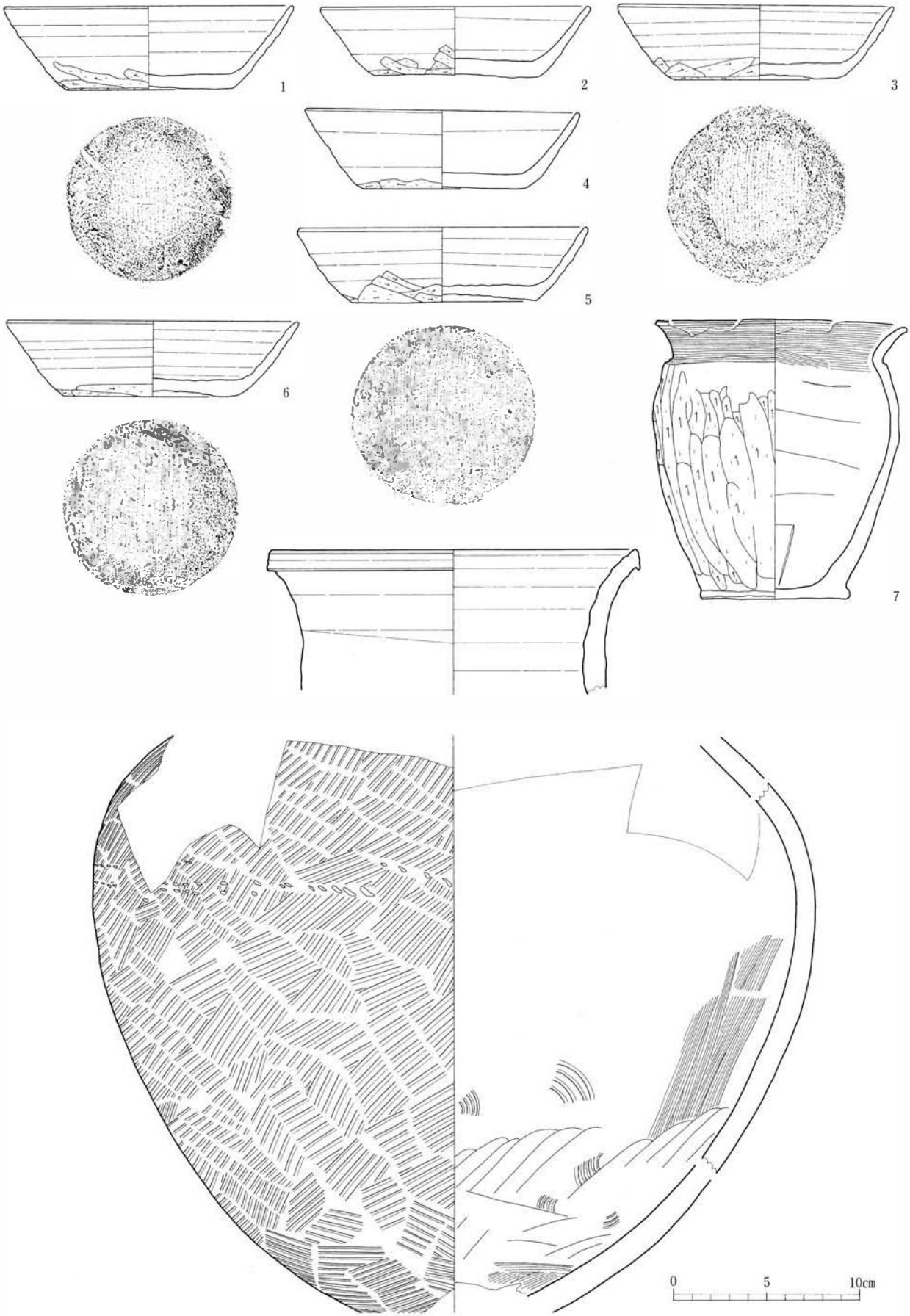
1．遺物について

出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、鉄製品などがある。その多くは今回の調査区の東側にあたるW－1～W－3区・X－1区から出土しており、遺構の密度に比例している。しかし調査面積に比べて遺物は質・量共に非常に乏しい。以下では比較的出土量の多い土師器と須恵器について述べる。

土師器は坏、甕、須恵器は坏、蓋、盤、甕、壺、鉢、瓶などがある。破片資料がほとんどで、量的には坏と甕が多い。以下では特徴を捉えやすい坏を中心に年代的な様相をみてみることにする。

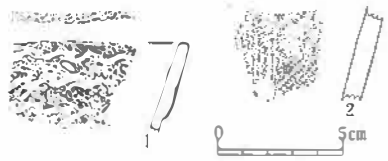
土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。非ロクロ調整の坏は破片が多く全体像が分かるものが少ないが、有段と無段のものがあり、有段のものの口縁は内湾している。一方、ロクロ調整の坏は底部切離し後に回転ヘラケズリが施されるものが僅かにあるが、ほとんどが無調整である。以上のような特徴の土師器坏は、東北地方南部や県内の土師器編年（氏家1957、加藤1989）からみて、8世紀から10世紀前葉のものといえる。

須恵器坏には底部切離しが静止糸切りのものとヘラ切りのものがある。前者の器形には皿形のものと器高の少し高い椀形に近いものがあり、切離しののち手持ち・回転ヘラケズリが施される。後者の器形はほとんどが皿形で、ナデ調整の施されるものと、無調整のものがみられる。以上のような特徴を持つ須恵器坏は8世紀から9世紀初頭のものと位置づけられる。



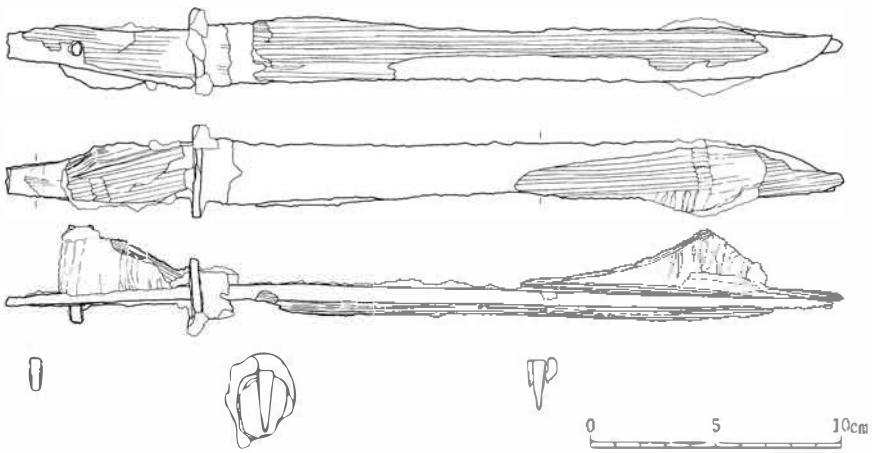
No	器種	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	表採	外面：静止糸切り→手持ちケズリ→ロクロナデ	(15.6)	(8.8)	4.5	2/3	8-9
2	須恵器・坏	SK291・堆	外面：切離し不明→手持ちケズリ→ロクロナデ	14.6	8.8	3.7	ほぼ完形	8-11
3	須恵器・坏	SK291・堆	外面：静止糸切り→手持ちケズリ→ロクロナデ、自然釉	15.0	8.7	4.0	3/4	8-12
4	須恵器・坏	表採	外面：切離し不明→手持ちケズリ→ロクロナデ、自然釉	14.8	8.9	4.3	2/3	8-10
5	須恵器・坏	SK291・底面	外面：静止糸切り→手持ちケズリ→ロクロナデ	15.8	10.0	4.0	完形	8-13
6	須恵器・坏	SK291・底面	外面：静止糸切り→手持ちケズリ→ロクロナデ	15.9	9.4	4.1	完形	8-14
7	土師器・甕	表採	外面：ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ、内面：ヘラナデ、ヨコナデ	13.6	8.0	15.1	4/5	8-15
8	須恵器・大甕	SK291・堆	外面：平行タタキ、内面：同心円文→ナデ　最大径38.8	19.6		(41.5)	3/5	8-16

第23図　SK291土壙出土土器



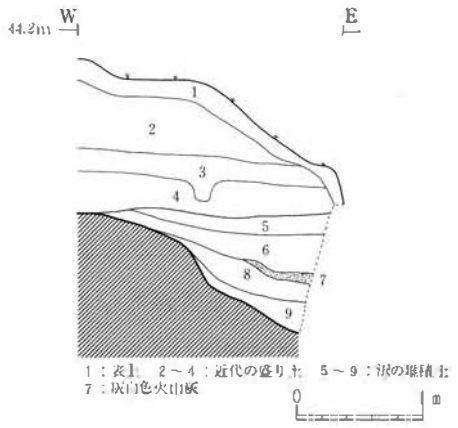
No	器種	出土遺構・層位	特徴	写真図版
1	弥生土器・壺？	SK291・堆	平縁・複合口縁・口縁上端・縄文(LR)	9-1
2	縄縄文土器・深鉢？	A-4区北・表採	RL 縄縄文・横北C2・D式	9-2

第24図　A－1区北 出土土器



No	器種	出土遺構	刃身長	元幅	重ね	茎長	茎幅	区	切先	目釘穴	鐔	備考	写真図版
1	鉄剣	SK34	24.8	2.4	0.8	(8.1)	1.5	両区？	フクラ	1	板	両面に木質残存	9-3

第25図　A－1区 SK34土壙出土鉄剣



第26図　F区 沢断面図

2．遺構について

今回の調査の対象地域である第Ⅲ工区南で発見した遺構は塀跡３、掘立柱建物跡22、井戸跡５、溝跡56、土壙90などである。以下では、主な遺構について検討を加える。

① 塀・掘立柱建物跡

塀跡はＸ－４区で3条、掘立柱建物跡はＷ－２区で４棟、Ｘ－１区で３棟、Ｘ－３区で１棟、Ｘ－４区で13棟、Ｘ－５区で１棟の合計22棟を確認した。これらは、規模や方向、平面形、柱穴の諸特徴（平面形・深さ・埋土など）から二つに分けられる。SD682・960溝跡を境として、東側のＷ－２区とＸ－１区の建物は２間×１間～３間×２間程度で規模は小さいものの柱穴の掘方が隅丸長方形を呈し大きく、東西棟で方向が東に対して5°～15°南に振れる。これに対して西側のＸ－４区の塀跡やＸ－３区、Ｘ－４区、Ｘ－５区の建物は３間以上×１間の規模の大きいものが多く、柱穴の掘方が細長い。方向は東西棟で東に対して7°～20°北に振れる。前者は、後述する古代の溝、Ａ①類のSD960・682に近接し、方向が揃うこと、SB1303建物跡からは碗形に近く、ヘラ切り後ナデ調整された須恵器坏（第21図４）が出土していることから８世紀末～９世紀初頭以前のものと考えられる。後者は、遺物は出土していないものの、柱穴の掘方が楕円形を基調とし、埋土も古代のものに比べて締まりがないことから古代以降のものと考えられる。

古代の建物跡は、全容がほぼ分かるものはＸ－１区のSB1278を除いて桁行２～３間、梁行１～２間、床面積が30㎡以下の小規模なもので、構造も側柱建物だけである。しかし、柱穴は平面形が隅丸長方形を基調とし、長辺が65cm以上、短辺が60cm以上、深さ40cm以上の掘方で規模が大きい。特にSB1301～1304建物跡は長辺85～140cm、短辺70～100cm、深さ50cm以上で、本遺跡の政庁内部の建物にも匹敵するほど大型である。これらは掘り下げていないため詳細は不明であるが、桁行１～２間以上、梁行１間で同様な構造を持ち、集落域を画する溝（SD682・960）に近接し、軸の方向も同じくしている。また同様の規模を持つ建物として昨年度調査区のＶ－４区で検出したSB980建物跡がある。３間×１間の東西建物で西妻がSD960・682溝と平行するが、溝とは8mほど離れている。これらと類似した遺構は、名生館官衙遺跡の第Ⅳ期政庁の区画施設と推定される溝とそれに伴う櫓状建物跡（佐藤：2002）、加美郡家（東山遺跡）の南西に隣接する壇の腰遺跡の区画施設と推定される築地塀・材木塀に伴う櫓跡などがある（斉藤・村田：2001）。名生館官衙遺跡では櫓状建物跡は２ヶ所で４基確認され、約73mの間隔がある。建物の柱穴は74～117cmの方形や長方形で、柱痕跡は径22～36cmの円形を呈する。平面形は１間×１間で柱間寸法が4m弱の正方形である。２回立て替えられており、切り合いがないため時期は不明であるが、建物の北側柱列と溝が接している時期も認められる。年代は８世紀後半から９世紀前半頃である。壇の腰遺跡では櫓跡は３ヶ所で７基確認され、約100m間隔で配置されている。建物の柱穴は約70～100cmの方形や長方形で、平面形は１間×１間もしくは１間×２間で一辺が3～4m弱の正方形を基調としている。建物の一辺の柱列と塀が接している時期も認められる。年代は８世紀後葉から10世紀中頃に存続していたと推定されている。このように溝や塀などの区画施設に近接し周囲に他の遺構が少ない点、１間×１間あるいは１間×２間で柱掘方・柱痕跡が大型の建物であるという点は当遺跡の建物跡と類似している。したがってSB1301～1304建物跡も、築地

や土塁などの痕跡は認められないものの、櫓などの郡家に付属する公的施設の建物と推定される。

② 溝跡

多数検出したが、年代・性格の分かるものは僅かである。A①類のSD683・684・690、D①類のSD692・1225には灰白色火山灰の一次堆積が認められ、10世紀前葉以前である。出土遺物と重複関係から時期の分かるものは、ヘラ切り無調整の須恵器坏と回転糸切り無調整で底径の小さい土師器坏が出土し9世紀後半以降と考えられるC②類のSD1300、大崎焼の陶器が出土し幕末・近代以降のSD1315・1320とSD1315よりも新しいSD1316がある。この他、A①類のSD960は昨年度の調査により7世紀後葉から8世紀前半と考えられている。類型や位置、規模などから推定すると、ほとんどがX－1区とW－2区に分布するA類は古代のものと考えられる。B類はW－1区に集中し、昨年度調査区でも8世紀代と位置づけられている。C・D類は、SD692・1225・1300のように古代と思われるものもあるが、それ以外については時期は不明であり、堆積土や皿状を呈する断面形態などから推定すると古代以降のものが多いと思われる。SD692には自然堆積土の中央部付近やや下寄りに灰白色火山灰の一次堆積が認められる。また後述するように、8世紀中葉以降と考えられる③類土壙が平行している。したがってSD692も上限は8世紀代にさかのぼり、長期間にわたり機能していたと推定される。

類型と分布の関係でみると、X－1区、W－1・2区にはA・B類が集中し、それ以外の区ではC・D類が分布するという排他的な関係が認められる。これは昨年度の報分の考察においても検討が加えられたように、SD960・682南北溝を境に大きく東西に当該地域が分けられ、東側は集落域、西側は耕作域と推定されたことと符合する。

③ 土壙

①類は陥し穴である。遺物は出土していないが、付近から僅かに縄文土器が出土していることや多くの類例から推定すると縄文時代の可能性が高い。

②・⑤類は出土遺物も少なく、年代や性格などについて詳細は不明である。古代の溝の集中するW－1区、X－1区に多く分布することから、古代のものと推定するにとどめておく。

今回検出された③類はほとんどがY区やW－6区、X－6区・X－8区のD①類溝であるSD692の北辺に沿って千鳥状に分布し、人為的に埋め戻されている。またW－6区の4基には上層に黒色シルト層が薄くレンズ状に自然堆積している。これは土壙が埋め戻された後に、ある一定時間経過後、埋土が沈んだことを示している。時代を特定できる遺物はほとんど出土していない。僅かにSK1353から日の出山窯跡群の第Ⅲ群に類例の見られる、静止糸切り後回転ヘラケズリ調整の椀形に近い須恵器坏が出土しており、8世紀中葉以降のものと考えられる。堆積土の特徴や年代は昨年度の③類と一致する。昨年度の③類は堆積土の特徴や古川市新谷地北遺跡などの類例などから墓壙と推定されており、今回の調査結果もそれとは矛盾していない。

④類は、昨年度の調査区であるS－1・2区で多数検出されている。今回検出した5基は、S－1・2区に近いX－8区に4基集中する。しかしS－1・2区に近接するW－7区からは1基しか検出されず、それもS－1・2区と離れたW－7区の南端に位置する（第28図）。面的な調査を行っていないため不明な点も多いが、W－7区北側に空白域があることから、④類は一定の範囲にまとまって分布

する遺構である可能性を指摘しておく。しかし、土壙の機能、性格などを推定できる結果は今回も得られなかった。

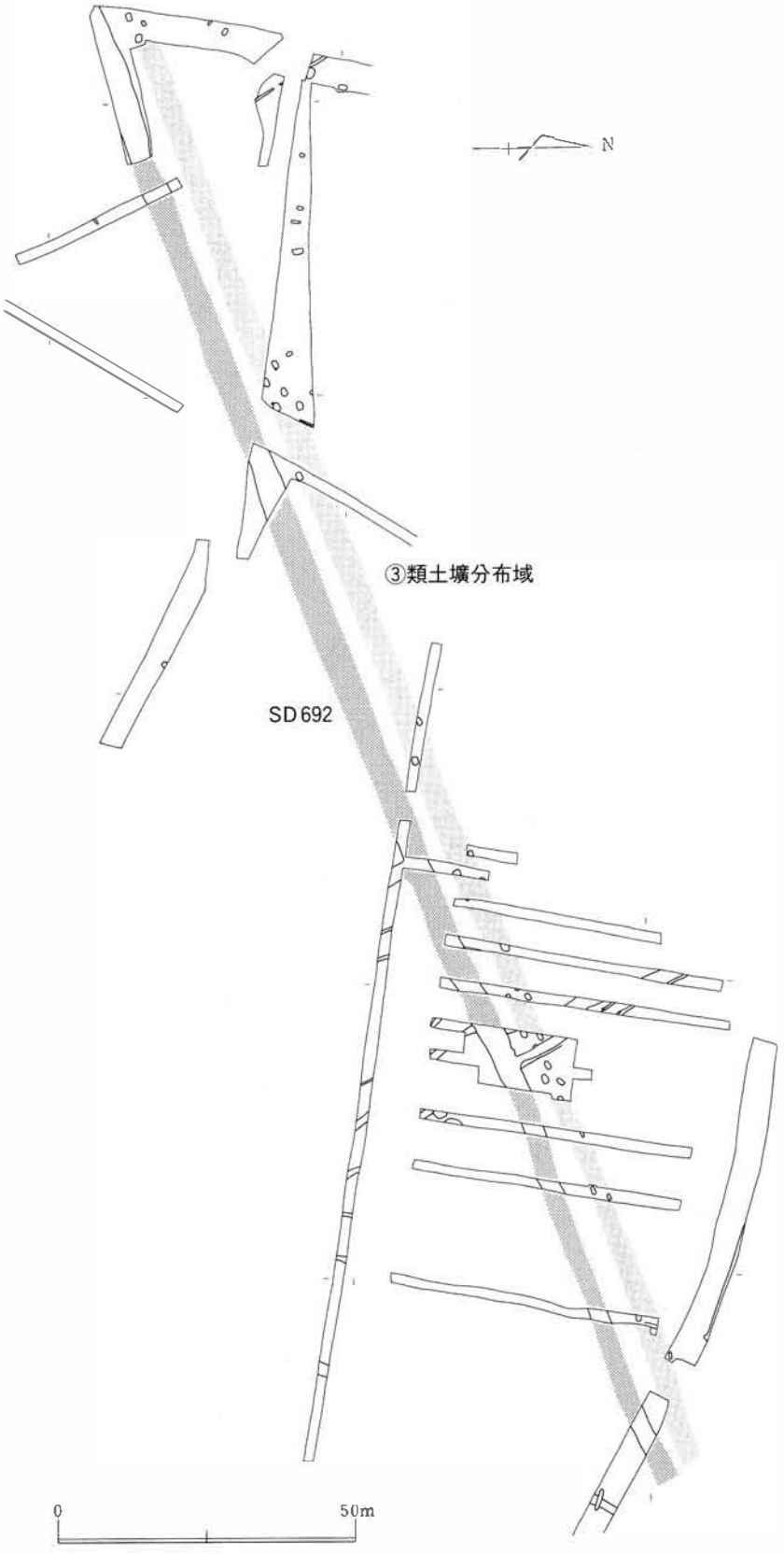
3．③類土壙とSD692溝（第27図）

SD692溝跡は規模や長さの点で、今回は場整備事業の対象となった官衙の南西外側でも最大級である。W－6区から東北東に延びており、V区の北にある沢を挟むものの、名生館官衙遺跡の南端にあたる小館地区に向かって550m以上の長さと推定される。この溝の北辺に沿って③類土壙31基が2列に並んで千鳥状に分布しているのが、W－6区からQ－4・5区まで確認された。しかし、これより東の状況については面的な調査を行っていないため不明である。土壙は北列が1.6～3.4m、南列が2.4～2.9mの間隔でほぼ直線的に並び、列の間隔は0.5～2.4m、南列の南辺とSD692の北辺との間隔は2.4～4.2mである。確認されている東端のQ－5区SK693と西端のSK1253の間、約250mに③類土壙は南北列合わせて130基あまり分布すると推定される。約2mに1基の割合である。これと同じように千鳥状に2列並んで分布する③類土壙は、昨年度調査区のV－2区に認められる。この③類土壙は長軸1.1～1.4m、短軸0.6mとやや規模は小さく、南北方向に並ぶこと、平行する大きな溝が認められないこと、付近に多くの遺構が分布することなど異なる点もある。また昨年度調査では、③類土壙はQ－9・R・S・T区など、近接した時期の他の遺構がほとんど認められない西側の調査区でも多く検出された。調査区の南側に多く分布する傾向は認められるものの、集中することはなく、長軸が35°の範囲で東か西に振れた南北方向であることはV－2区と共通する。以上のように③類土壙は、分布場所、分布状況など様々な様相を呈しており、今後の類例の増加を待って検討したい。

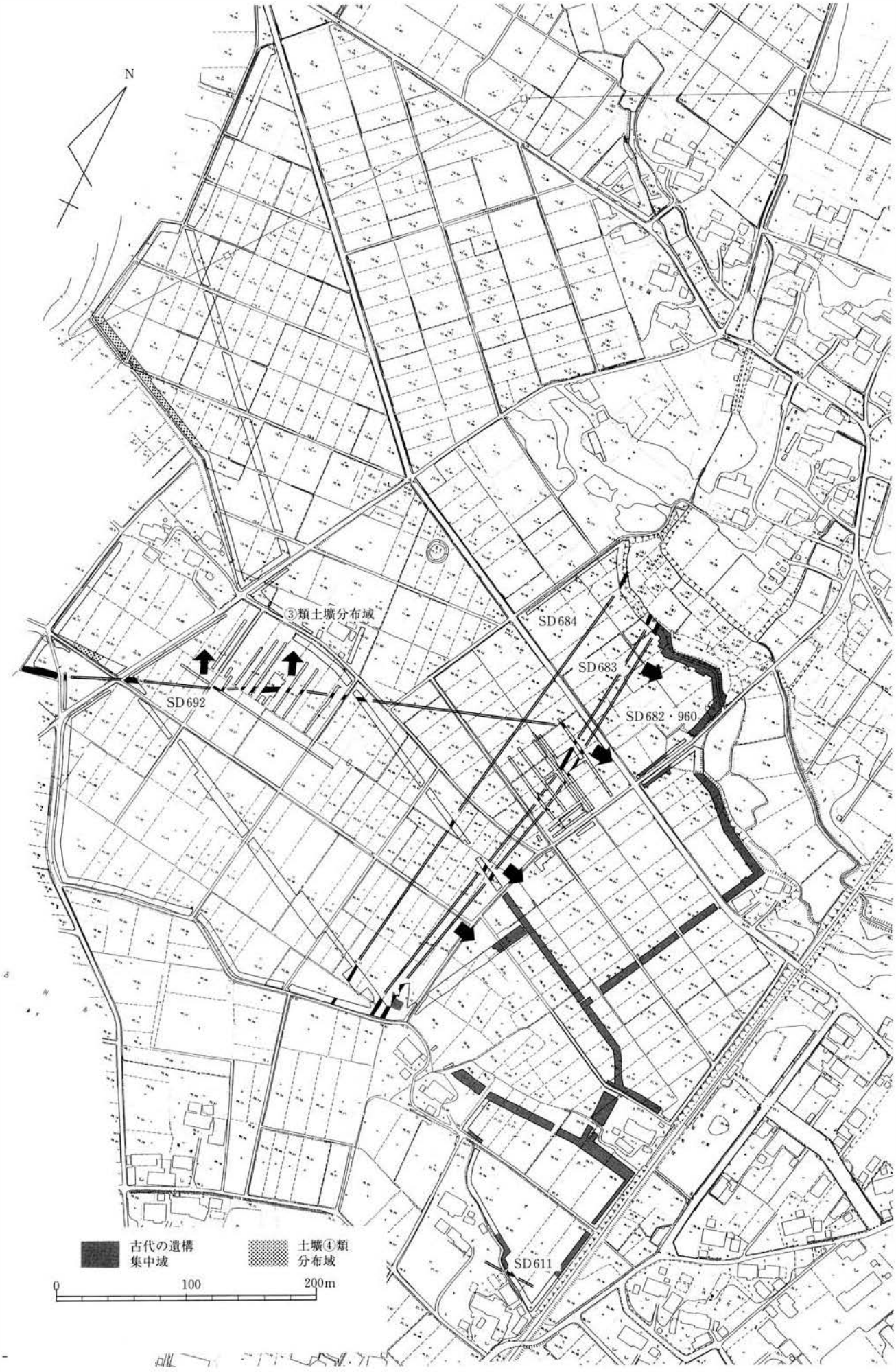
4．奈良・平安時代の官衙外側（南部・西部）の様子（第28図）

昨年度の調査の結果、遺構・遺物のあり方からSD960・682南北溝を境に大きく、遺構の密集する東の集落域と遺構がほとんど無い西の耕作域に分けられた。今年度のW－2・3区、X－1・3区の調査により、遺跡の南端付近においてもそれと同様の様相であることが確認された。つまり官衙南外側の集落は500m以上にわたって西側をSD960・682南北溝により画されていた。またW－2区では溝に近接して、築地や土塁などの痕跡は認められないものの、櫓などの郡家に付属する公的施設と推定される建物も検出され、SD960・682南北溝の区画施設としての性格も一層明確となってきた。昨年以前の調査では官衙南外側における郡家役人層の居住域が明らかとなった。今回は調査範囲が狭く明確にはできなかったが、従来想定されていた範囲よりもさらに南にまで郡家に関係する人々の集落域が延びると推定される。溝がさらに南に続くことも確認された。

また、耕作域と推定されていた西側においても、東西に延びるSD692溝とその北に平行する③類土壙が分布し、その他の③類土壙もR・S・T区などに分布することが明らかとなった。したがって西側には墓域として利用されていた部分もあると推定される。



第27図　SD692溝と③類土壙



第28図　遺跡南側の様子

Ⅳ．ま　と　め

１．今回の調査区は古代玉造郡家とみられる名生館官衙遺跡の南西外側で、名生館遺跡の南西端に位置する。検出遺構は塀跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙で、遺物は８世紀～９世紀を中心とした時期の土師器・須恵器などが少量出土した。

２．昨年度の調査で明らかとなった、古代における南北溝SD960･682を境とした場の機能の違いが本年度調査区においても明確になった。SD960･682の東側には掘立柱建物跡や土壙などの古代の遺構が多く分布するのに対して、西側ではその分布が希薄である。

３．調査区南端のＷ－２区では櫓と推定される建物が存在したことが明らかとなり、SD960・682に沿ってかなり広い範囲にわたって櫓などの郡家付属の公的施設も存在した可能性も考えられる。

４．今回調査区の西側において、８世紀後半から10世紀初頭の大規模なSD692溝とその北辺に２列に平行して千鳥状に分布する墓壙と推定される③類土壙が多数検出された。水路が分布し耕作域と推定されたSD960・682の西側においても、SD692の北側からＲ・Ｓ・Ｔ区にかけては墓域としても利用されていたと推定される。

５．今回の調査区の中心付近にあたるＸ－３・４区では、古代以降と推定される掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが検出された。

６．遺跡の南辺から西辺にかけて縄文時代の陥し穴が検出された。

引用・参考文献

天野順陽(1999)：「名生館遺跡」『名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第181集

加藤道男(1989)：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』

菊地逸夫・早川英紀(1992)：「新谷地北遺跡」『下草古城ほか』宮城県文化財調査報告書第146集

斎藤篤・村田晃一(2001)：『壇の腰遺跡　－平成12年度発掘調査概報－』宮崎町教育委員会

佐藤則之・菊地芳朗(1990)：『大年寺山横穴群』宮城県文化財調査報告書第136集

佐藤優(2002)：「名生館官衙遺跡」『第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

古川一明(1993)：『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第１集

古川市教育委員会(1987～1996)：『名生館官衙遺跡Ⅶ～ⅩⅥ』古川市文化財調査報告書第６～13・19・21集

古川市教育委員会(2000)：「名生館官衙遺跡、杉の下八幡先、南小林地区確認調査」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

宮城県多賀城跡調査研究所(1981～1986)：『名生館遺跡Ⅰ～Ⅵ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第６～11冊

村田晃一ほか(2000)：「名生館遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第183集

吉野武ほか(2001)：「名生館遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第187集

第１表　遺構属性表

塀・掘建柱建物跡属性表

遺構名	区	構造	規模(間)	総長(m)	柱間寸法(m)		柱穴平面形と規模(長軸・短軸・深さcm)				柱痕跡(cm)	方向	重複関係
SA1344	X-4	1本柱列	1間	2.7	2.7		隅丸長方形	110	40~50	60	径20	E-16°-N	
SA1345	X-4	1本柱列	1間以上	4.0以上	4.0		楕円形	50~60	30~40	36	径23	N-12°-W	
SA1346	X-4	1本柱列	1間以上	4.0以上	4.0		楕円形	60~90	40	22	径10・抜取り	N-31°-W	
SB1275	X-1	東西棟	3間×2間	6.2	"東から2.1,1.4,2.6"	2.2等間隔	長方形	65~130	60~80	43	径20・抜取り	E-5°-S	SK1286,SD1274,SD1276→SB1275
SB1277	X-1	東西棟	2間以上×1間以上	3.8以上	"東から1.6,2.3"	1.3以上	長方形	60	50	26	径26	E-10°-S	SB1277→SK1283
SB1278	X-1	南北棟	2間以上×2間	5.7以上	"北から2.5,3.2"	"東から2.1,2.0"	楕円形	40~50	30~40	22	径15	E-10°-S	SD1274→SB1278→SK1288
SB1301	W-2	東西棟	1間以上×1間	3.3以上	3.3	4.0	長方形	90~110	70~85	50	抜取り	E-11°-S	SB1301→SB1302→SB1304→SB1303
SB1302	W-2	東西棟	2間以上×1間	5.5以上	"東から2.6,2.7"	4.3	長方形	100~140	80~100	53	径25・抜取り	E-15°-S	SB1301→SB1302→SB1304→SB1303
SB1303	W-2	東西棟	2間以上×1間	5.5以上	2.7等間隔	4.2	長方形	90~110	80~90	56	径32	E-15°-S	SB1301→SB1302→SB1304→SB1303
SB1304	W-2	東西棟	1間以上×1間	3.2以上	3.2以上	3.9	長方形	85~100	80~90	62	抜取り	E-12°-S	SB1301→SB1302→SB1304→SB1303
SB1313	X-3	東西棟	2間以上×1間以上	4.0以上	"西から1.9,2.1"	2.8	楕円形	20~30	15~20		径10	E-12°-N	
SB1314	X-4	東西棟	3間以上×1間以上	4.8以上	"西から1.8,1.7,1.3"	2.4	正方形	20	20		径10	E-10°-N	
SB1327	X-5	東西棟	3間×1間	5.8	"東から1.9,2.1,1.8"	3.3	楕円形	20~70	15~30	15	径10	E-16°-N	
SB1331	X-4	東西棟	3間×1間以上	6.6	2.2等間隔	4.0	隅丸長方形	35~70	25~35	10	径10・抜取り	E-11°-N	
SB1332	X-4	東西棟	2間以上×1間以上	5.6以上	2.5等間隔	3.3以上	楕円形	50~100	30~40	8	抜取り	E-16°-N	
SB1333	X-4	東西棟	1間以上×1間以上	4.0以上	東4.0	3.7	楕円形	40	30	8	径15	E-7°-N	
SB1334	X-4	東西棟	2間以上×1間以上	2.7以上	2.7	"北から1.9,2.0"	楕円形	40	30	8	径15	E-15°-N	SB1334→SB1336
SB1335	X-4	東西棟	6間以上×1間	12.3以上	"東から1.9,2.3,[illegible]9,1.9,2.0,2.0"	3.9	楕円形	65~120	40~65	36	径15・抜取り	E-16°-N	SB1335→SB1340
SB1336	X-4	東西棟	5間以上×1間	10.0以上	"東から1.8,2.0等間隔"	3.8	楕円形	40~80	30~40	33	径15	E-7°-N	SB1334→SB1336
SB1338	X-4	東西棟	2間×1間以上	7.7	"東から3.9,3.7"	4.3	隅丸長方形	65	45~50	17	径18	E-7°-N	
SB1339	X-4	東西棟	3間×1間以上	5.9	"東から1.9,2.0,2.0"	4.0	楕円形	75~105	40~50	30	径18	E-16°-N	SB1339→SB1342
SB1340	X-4	東西棟	4間以上×1間以上	7.8以上	"東から1.8,2.0,1.9,2.0"	4.5	楕円形	55~110	40~60	21	径15	E-12°-N	SB1335→SB1340
SB1341	X-4	東西棟	4間以上×1間以上	7.6以上	"東から1.8,1.8,2.1,1.8"	4.6	楕円形	85~145	50~75	52	径13	E-17°-N	SB1341→SB1342
SB1342	X-4	南北棟?	1間以上×2間以上	2.1以上	2.1	"北から1.9,2.1"	楕円形	60	50	26	径20	N-14°-W	SB1341→SB1342
SB1343	X-4	東西棟	2間×1間以上	8.3以上	"東から4.2,4.1"	4.0	楕円形	35~50	25~45	42	径13	N-20°-W	

井戸跡属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模(短軸×長軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SE1287	X-1	円形		径1.4		SK1290・SE1288→SE1287	黒褐色砂質シルト(自然)
SE1288	X-1	円形		径1.8		SK1286→SE1288→SE1287	地山ブロック多く含む黒色粘土質シルト(人為)
SE1289	X-1	円形		径1.7		SK1291・SK1295→SE1289	地山ブロック含む黒色粘土質シルト(人為)
SE1321	X-3	円形	逆台形	径1.1	65以上		地山ブロック・石を含む砂質シルト(人為)
SE1322	X-3	円形	逆台形	径1.1	67以上		黒色砂質シルト(自然)

溝跡属性表

遺構名	区	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	類型	方向	重複関係	堆積土などその他の特徴
SD671	W-1・Q-4	0.7	0.4	20		その他	N-3°-W		旧SD1201
SD1027	W-1・Q-4	0.5~1.4	0.2~0.9	18		B②	真北~N-20°-E	SD1027→SD1212	旧SD1202
SD678	W-1・Q-4	0.8	0.5	20~30	皿状	B②	真北	SD1212,SD1206→SD678	黒褐色シルト(人為) 旧SD1203
SD1206	W-1	0.6	0.3	5~15		B②	真北	SD1207→SD1206→SD678,SD680,SD679	
SD1207	W-1	0.4	0.2	20		B③	真東	SD1207→SD1206	
SD680	W-1・Q-1	0.4~1.2	0.2~0.6	10	皿状	B②	N-10°-W	SD680→SK1205,SK1209	黒色シルト(自然) 旧SD1208
SD1210	W-1	0.2	0.1	6		B③	真北		
SD679	W-1・Q-1	0.2	0.1	5		B③	真北~E-30°-S	SK1215→SD679→SK1205,SK1209	旧SD1211
SD1212	W-1	0.7	0.4	20~41	不整形	B②	真北	SD1027→SD1212→SD678,SK1209	黒褐色シルト(人為)
SD1217	W-2	0.3~0.5		4~9		その他	真北~W-30°-S		
SD1221	W-2	1.5~2.0		50	U字状	A①	N-10°-E	SB1301~SB1304,SD960→SD682→SD1221	黒色シルト(自然)
SD1222	W-2	0.6~1.0	0.3	53	U字状	A②	N-5°-E		黒褐色シルト(人為)
SD682	W-2・Q2・V-4・[illegible]	2.0	1.2	40	逆台形	A①	N-10°-E	SB1301~SB1304,SD960→SD682→SD1221	1層-黒色シルト,2層-黒褐色シルト,3層-暗褐色シルト質砂,4層-黒褐色シルト(自然)
SD683	W-2・Q2・V-4・[illegible]	2.0~2.5	1.6	55	逆台形	A①	N-8°-E		1層-黒色シルト,2層-灰白色火山灰,3層-黒褐色シルト,4層-暗灰黄色シルト質砂,5・6層-黒褐色シルト(自然)
SD960	W-2・Q-2・V-4	1.8	1.3	45	逆台形	A①	N-10°-E	SB1301~SB1304,SD960→SD682→SD1221	黒色シルト(人為)
SD684	W-2・X-3・Q-3・V-4	1.2~1.7	0.6~1.2	50	逆台形	A①	N-10°-E	SD684→SD1300,SD1307	1層-灰白色火山灰、2層以下-黒色・黒褐色シルト(自然)
SD1225	W-3・X-5・①トレンチ	2.4	1.6	93	逆台形	D①	N-25°-W	SD1225→SD1226→SK1230	1層-黒色砂質シルト,2層-灰白色火山灰,3層-黒褐色砂質シルト,4層-暗褐色砂質シルト(自然)
SD1226	W-3・X-5	1.1~1.3	0.5	43	皿状	D②	N-25°-W	SD1225→SD1226→SK1230	黒褐色砂質シルト(人為)
SD1227	W-3	0.3	0.1	13		C③	E-8°-N		黒色シルト(自然)
SD1234	W-4	0.6~1.0	0.2~0.4	42	皿状	C②	N-16°-W	SD1234→SD1235→SD1245	1層-暗褐色シルト,2層-黒褐色シルト(自然)
SD1235	W-4	0.5~1.0	0.3~0.5	52	逆台形	C②	N-16°W~N-12°E	SD1234→SD1235→SD1245	黒褐色シルト主体、上層-自然、下層-人為
SD1236	W-4	2.0	0.8	58	皿状	D①	N-26°-W	SD1236→SD1245	黒色シルトと暗褐色シルトの互層(自然)
SD1243	W-5	0.5~1.0	0.3~0.4	19~52	逆台形	C②	E-16°-N	SK1238→SD1244→SD1243	1層-黒色シルト(自然)、2層-黒褐色シルト、3層-黒色シルト(人為)
SD1244	W-5	>0.5	>0.2	20		D②	N-21°-W	SK1238→SD1244→SD1243	1層-黒褐色シルト、2層-黒色シルト(人為)
SD1245	W-4・5	0.8~1.4	0.3~0.5	37	皿状	C②	E-14°-N	SD1234→SD1235→SD1245→SD1246	1層-黒褐色シルト,2層-褐灰色シルト(自然)
SD1246	W-4・5	0.6~0.9	0.4	55	逆台形	C②	E-14°-N	SD1245→SD1246	1層-黒色シルト,2層-黒褐色砂質シルト(自然)
SD1247	W-5	0.3~0.5	0.1~0.2	5	皿状	C③	E-16°-N		黒色シルト(自然)
SD1248	W-5	0.8~1.4	0.3~0.6	6		D②	N-29°-W	SK1242→SD1248	
SD692	W-6・X-6・[illegible]	4.0~4.5	2.6~3.0	84	逆台形	D①	E-20°-N	SD692→SD696	[illegible]
SD1259	W-7	0.4	0.2	18		D③	N32°-W		
SD1260	W-7	1.5	0.7	40	逆台形	A②	E-11°-S		1層-黒色シルト,2層-黒色砂質シルト(自然)
SD1274	X-1	0.8	0.6	9	逆台形	A②	E-18°-S	SK1296→SD1274→SD1297,SB1275,SB1278	
SD1276	X-1	0.3~0.4	0.2	18	逆台形	A③	[illegible]	SD1276→SD1279,SD1280,SB1275	
SD1279	X-1	0.2~0.4	0.1~0.2	8~13		D③	N-32°-W	SD1276→SD1279	
SD1280	X-1	0.4~0.5	0.3	11		C③	N-6°-W	SD1276→SD1280→SK1282	

遺構名	区	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	断面形	類型	方向	重複関係	埋積土などその他の特徴
SD1297	X-1	0.4	0.3	7		D③	E-44°-N	SK1204→SD1211→SD1297,SB1275,SB1278	
SD1298	W-2拡張区	0.3～1.3	0.9	24	逆台形	A②	N-10°-E	SD1298→SD1300	1層：黒褐色シルト,2層：暗褐色シルト(人為)
SD1299	W-2拡張区	0.3				A③	N-10°-E		
SD1300	W-2・X-3	0.8～1.4	0.4	11	皿状	C②	E-11°-N	SD684,SD1298→SD1300	黒色シルト(自然)
SD1307	X-3	0.5～1.0	0.2～0.5	4	皿状	D②	N-24°-W	SD684→SD1307	黒色シルト(自然)
SD1308	X-3	0.3	0.1	15	皿状	D③	N-21°-W		黒褐色シルト(自然)
SD1309	X-3	0.8	0.3	31	U字形	C②	E-10°-N		1層：黒褐色砂質シルト,2層：黒色シルト(自然)
SD1310	X-3	0.5～0.7	0.3	30	逆台形	C②	E-13°-N	SD1310→SD1320	黒色シルト主体(自然)
SD1315	X-4	>0.8	>0.5	33	逆台形	D②	N-20°-W	SD1315→SD1316	暗褐色シルト(人為)
SD1316	X-4・①・5・6トレンチ	0.9～1.4	0.4～0.6	33	U字状	D②	N-20°-W	SD1315→SD1316	暗褐色砂質シルト(自然)
SD1317	X-4	0.4～1.0	0.2～0.6	12	皿状	D②	N-20°-W		黒褐色シルト(人為)
SD1319	X-3	0.2～0.5	0.1～0.3	13		C②	E-13°-N		
SD1320	X-3	0.6～0.9	0.4	48	U字形	C②	E-13°-N		1層：黒褐色シルト,2層：暗褐色砂質シルト,3層：黒褐色砂質シルト,4層：にぶい黄褐色粘質シルト(人為)
SD1325	X-5	0.2	0.1	18	凹形	C③	E-12°-N		
SD1326	X-5	0.2～0.5	0.1～0.3	2～36		C③	E-15°-N		
SD1358	①・5・6トレンチ	0.4～0.9				D②	N-20°-W		
SD6990	①トレンチ・Q-4	1.8	1.0	61	逆台形	A①	N-25°-E		1層：灰白色火山灰,2層：黒色シルト,3層：暗灰黄色砂質シルト(自然)
SD696	3～6トレンチ・Q8・Q9・R1	1.4～2.4	0.4	56	長楕円形	D①	N-30°W	SD697→SD696・SK1350→SD696	1層：極暗褐色砂質シルト,2～3層：灰褐色砂質シルト(自然)
SD697	3～6トレンチ・Q8・Q9・R1	0.6	0.4	20	皿状	D②	N-30°W	SD697→SD696	黒褐色砂質シルト(自然)
SD1370	5・6トレンチ	0.4	0.2	12	逆台形	D③	N-30°W	SD696→SD1370	黒褐色砂質シルト(自然)
SD1371	4トレンチ	0.4	0.3	9	逆台形	D③	N-30°W	SD1371→SD696	黒褐色砂質シルト(自然)

土壙属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模(短軸×長軸m)	深さ(cm)	類型	重複関係	埋積土などその他の特徴
SK1204	W-1	隅丸長方形	皿状	1.5×1.0	25	②類	SK1204→SD1203	1層：黒色シルト,2層：灰黄褐色砂質シルト(人為)
SK1205	W-1	楕円形	皿状	2.3×1.9	38	②類	SD1208・SD1211・SK1215→SK1205	
SK1209	W-1	楕円形	皿状?	(1.8)×1.7	34	②類	SK1209→SD1208	黒色シルト
SK1213	W-1	不整形	段付皿状	2.3×1.3	55	⑤類	SK1213→SD1208	黒褐色シルト
SK1214	W-1	楕円形	皿状	0.7×0.6	14	⑤類		黒褐色シルト
SK1215	W-1	楕円形?	皿状	(1.7)×1.4	18	②類	SK1215→SD1303・SD1208・SD1211	
SK1216	W-1	楕円形	皿状	(1.1)×0.8	20	⑤類	SK1216→SD1303・SD1211	黒褐色シルト
SK1218	W-2	溝状	U字形	2.7×0.2	21	①類		黒色シルト
SK1219	W-2	溝状	U字形	2.7×0.4	41	①類		黒褐色シルト
SK1220	W-2	溝状	U字形	(2.5)×0.3	55	①類		暗褐色シルト
SK1223	W-2	不整形	皿状	1.6×1.0	19	⑤類		
SK1224	W-2	隅丸長方形	皿状	0.5×0.4	24	⑤類		黒色シルト
SK1228	W-3	溝状	逆三角形	2.5×0.4	52	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1229	W-3	不整円形	皿状	1.2×1.2	42	⑤類		黒色シルト主体(自然)
SK1230	W-3	隅丸長方形	逆台形	3.0×1.6	44	⑤類	SD1225→SD1226→SK1230	黒色シルト主体(自然)
SK1231	W-4	溝状	逆三角形	3.2×0.4	67	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1232	W-4	溝状	逆三角形	2.5×0.3	51	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1233	W-4	溝状	逆三角形	(2.3)×0.3	28	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1237	W-5	溝状	U字形	3.1×0.4	72	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1238	W-5	溝状	U字形	(1.8)×0.2	57	①類	SK1238→SD1243・SD1244	黒色シルト主体(自然)
SK1239	W-5	溝状	逆三角形	(1.7)×0.3	58	①類		黒褐色シルト主体(自然)
SK1240	W-5	溝状	U字形	4.3×0.5	66	①類		黒褐色シルト主体(自然)
SK1241	W-5	溝状	U字形	(1.4)×0.3	56	①類		黒褐色シルト主体(自然)
SK1242	W-5	溝状	U字形	3.2×0.4	78	①類	SK1242→SD1248	黒褐色シルト主体(自然)
SK1249	W-6	溝状	逆三角形	(0.8)×0.3	70	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1251	W-6	長方形	箱形	1.4×1.0	66	③類		暗褐色シルト主体 上層(自然、下層人為)
SK1252	W-6	長方形	逆台形	1.0×0.6	58	③類		黒褐色シルト主体 上層(自然、下層人為)
SK1253	W-6	長方形	逆台形	1.1×0.8	89	③類		黒褐色シルト主体 上層(自然、下層人為)
SK1254	W-6	溝状	逆三角形	(1.0)×0.3	54	①類		黒褐色シルト主体(自然)
SK1255	W-7	長方形	袋状	1.6×0.8	28	④類		上層:地山粒含む黒色シルト、下層:地山ブロックを含む褐色砂質シルト(人為)
SK1256	W-7	溝状	薬研状	3.4×0.5	80	①類		黒色シルト主体(自然)
SK1257	W-7	楕円形	皿状	2.0×(1.4)	35	②類		
SK1258	W-7	楕円形	皿状	1.5×1.0	31	②類		
SK1261	X-0	隅丸長方形	袋状	0.8×0.5	16	④類		上層:地山粒含む黒色シルト、下層:地山ブロックを含む黄灰色砂質シルト(人為)
SK1262	X-0	楕円形	皿状	1.1×0.6	10	④類		上層:地山粒含む黒色シルト、下層:地山ブロックを含む黄灰色砂質シルト(人為)
SK1263	X-0	溝状	逆台形	1.7×0.5	31	⑤類		上層:黒色シルト、下層:地山ブロックを含む黄灰色砂質シルト(自然)
SK1264	X-0	長方形	袋状	1.8×0.8	27	④類		上層:地山粒含む黒色シルト、下層:地山ブロックを含む黄灰色砂質シルト(人為)
SK1265	W-6	長方形	箱形	1.3×0.6	46	③類		暗褐色シルト主体 上層(自然、下層人為)
SK1266	X-0	隅丸長方形	ロート状	1.5×1.0	88	③類		地山ブロック多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1267	X-0	隅丸長方形	逆台形	1.5×1.2	77	③類		地山ブロック多く含む暗褐色砂質シルト主体(人為)
SK1268	X-0	隅丸長方形	ロート状	1.5×0.9	92	③類		地山ブロック多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1269	X-0	隅丸長方形	ロート状	1.5×0.9	69	③類		地山ブロック多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1270	X-0	楕円形	U字形	1.6×0.9	81	③類		地山ブロックを含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1271	X-0	楕円形	袋状	1.1×0.5	43	④類		上層:黒褐色砂質シルト、下層:地山ブロックを含む暗褐色砂質シルト(人為)
SK1272	X-0	楕円形?	皿状	(0.5)×(0.8)	26	⑤類		
SK1273	X-1	不整長方形	逆台形	1.4×1.1	45	③類		地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK1281	X-1	円形?		(0.7)×(0.4)		⑤類		黒色シルト(自然)
SK1282	X-1	楕円形	皿状	1.2×1.0	13	②類	SD1280→SK1282	地山ブロックを含む褐灰色粘土質シルト(人為)
SK1283	X-1	楕円形?	逆台形	(0.9)×(0.7)	14	②類	SB1277→SK1283	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK1284	X-1	楕円形	逆台形	(0.8)×(0.6)	14	②類		黒色シルト(人為)
SK1285	X-1	不整楕円形	皿状	1.0×0.7	23	②類	SK1285→SB1275	地山ブロックを多く含む灰黄褐色砂質シルト(人為)
SK1286	X-1	円形?		(0.7)×(0.5)		②類	SK1286→SE1287・SE1288	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK1290	X-1	楕円形?		(0.8)×(0.7)		②類	SK1290→SE1267	黒色シルト
SK1291	X-1	不整形		1.4×1.1		⑤類	SK1291→SE1289	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)

遺構名	区	平面形	断面形	規模[短軸×長軸m]	深さ(cm)	類種	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK1292	X-1	方形?		(0.8)×(0.7)		●類	SK1292→SK1295	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK1293	X-1	不整形	皿状	1.1×0.7	27	③類	SK1295→SK1293	
SK1294	X-1	不整形		(1.4)×(0.6)		⑤類		地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK1295	X-1	不整形		4.4×2.3		⑤類	SK1295→SE1288・SE1293・SK1292・SK1293	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK1296	X-1	不整形	皿状	2.0×1.2	26	⑤類	SK1296→SD1274・SB1278・SD1297	
SK1305	W-2	不整形	皿状	5.0×2.2	18	⑤類	SB1301・SB1303→SK1305→SD1221	1層:灰白色火山灰、2層:黒褐色砂質シルト(自然)
SK1306	W-2	不整形	皿状	(6.0)×(4.0)	20	●類		黒褐色シルト主体(自然)
SK1311	X-3	楕円形	逆台形	1.9×1.5	77	②類		上層:黒色シルト(自然)、下層:地山ブロック含む黒褐色シルト(人為)
SK1312	X-3	楕円形		1.3×1.1		②類		
SK1318	X-4	不整形	皿状	3.0×0.8	50	⑤類		地山ブロック含む暗褐色シルト(人為)
SK1323	X-3	溝状	逆台形	(3.1)×0.5	51	①類		黒色砂質シルト主体(自然)
SK1324	X-5	楕円形	皿状	1.1×0.8	43	②類		
SK1328	X-6	長方形	逆台形	(0.7)×(1.0)	72	③類		黒色シルト(自然)
SK1329	X-7	長方形	逆台形	1.5×0.9	66	③類		地山ブロック含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1330	X-7	溝状	U字形	(0.8)×(0.4)	63	①類		黒色シルト(自然)
SK1347	5・6トレンチ	長方形		1.6×0.8		③類		
SK1348	5・6トレンチ	隅丸長方形	逆台形	1.7×1.0	74	③類		地山ブロック多く含む暗褐色砂質シルト主体(人為)
SK1349	5・6トレンチ	隅丸長方形	逆台形	1.6×0.8	63	●類		地山ブロック多く含む黒色砂質シルト主体(人為)
SK1350	5・6トレンチ	長方形	逆台形	(1.3)×0.8	80	⑤類	SK1350→SD696	地山ブロック含む黒褐色シルト主体(人為)
SK1351	5・6トレンチ	隅丸長方形	逆台形	(1.3)×1.0	60	③類		地山ブロック多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1352	4トレンチ	長方形	逆台形			●類		
SK1353	4トレンチ	長方形	逆台形	1.3×0.8	85	③類		地山ブロック含む黒褐色シルト主体(人為)
SK1354	3トレンチ	長方形		11.5)×1.1		③類		灰白色火山灰含む黒褐色土
SK1355	5・6トレンチ	長方形		10.9)×0.8		③類		
SK1356	X-3	不整長方形		1.4×0.9	21	⑤類		黒色砂質シルト(人為)
SK1357	5・6トレンチ	楕円形		(1.5)×0.8		③類		
SK1359	8トレンチ	長方形	箱形	1.5×0.8	57	③類		地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1360	8トレンチ	長方形	箱形	1.2×0.7	50	③類		地山ブロック多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1361	⑪トレンチ	長方形	逆台形	1.5×1.2	84	③類		地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルト主体(人為)
SK1363	⑪トレンチ	長方形		1.4×0.9		③類		
SK1364	9トレンチ	長方形		(1.1)×0.9		③類		
SK1365	7トレンチ	長方形		(1.1)×0.6		③類		
SK1366	2トレンチ			(0.8)×(0.6)		③類		
SK1367	1トレンチ	長方形		(1.4)×0.9		③類		
SK1368	1トレンチ北			(0.8)×(0.6)		③類		
SK1369	1トレンチ北	長方形		(1.3)×(1.1)		③類		

写　真　図　版

X－1区全景（南西から）

W－1区全景（北から）

W－2区　SB1301～1304建物跡（北から）

W－2区　SB1301～1304建物跡（西から）

W－2区　SB1303建物跡南東隅柱穴

W－2区　SD682・960・1221溝跡（南から）

W－2区　SD683溝跡（南から）

W－2区　SD684溝跡（北から）

W－3区東側全景（西から）

W－3区　SD1225・1226溝跡（東から）

図版 1

W－3区　SD1225・1226溝跡（南から）

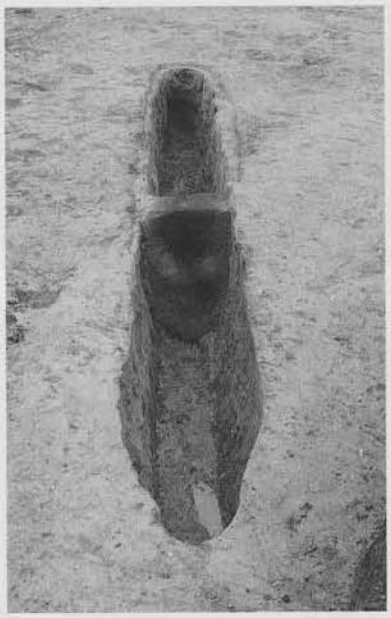
W－3区　SD1225・1226溝跡、SK1230土壙（西から）

W－4区　SD1234～1236・1245溝跡（東から）

W－5区全景（南東から）

W－4・5区　SD1245～1247溝跡（東から）

W－5区南　SK1239～1241土壙（北西から）



W－5区　SK1240土壙

W－5区　SK1241土壙

W－5区　SK1242土壙

図版2

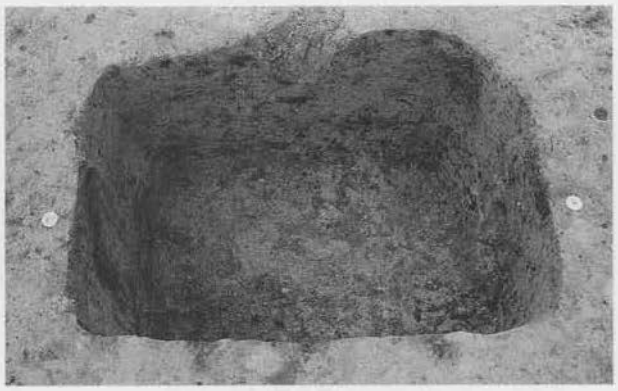
W－5区全景（北西から）

W－6区　SD692溝跡（北東から）

W－6区　SD692溝跡（南西から）

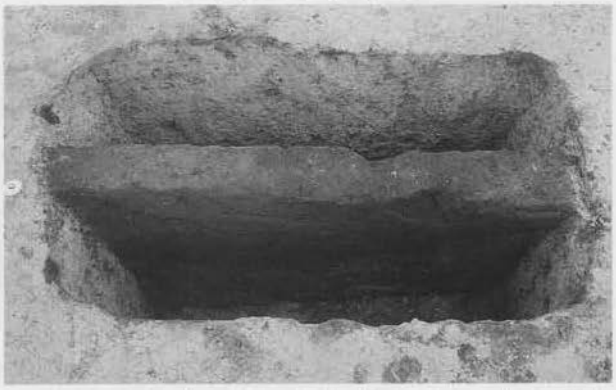
W－6区北全景（南から）

W－6区　SK1251土壙

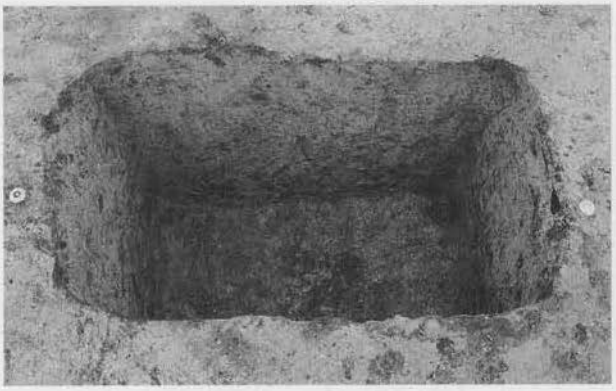


W－6区　SK1251土壙

W－6区　SK1252土壙



W－6区　SK1253土壙



W－6区　SK1253土壙

W－7区全景（南から）

図版3

W－7区　SK1255土壙

W－7区　SK1255土壙

X－3区　SD1300溝跡（北東から）

X－3区　SD684・1300・1307溝跡（北から）

X－3・4区全景（東から）

X－3・4区　SB1335・1340建物跡

X－3・4区　SA1346塀跡、SB1339・1341～1343建物跡（西から）

X－3区　SB1335建物跡南西隅柱穴

X－4区全景（西から）

X－5区　SD1225・1226溝跡（北から）

図版4

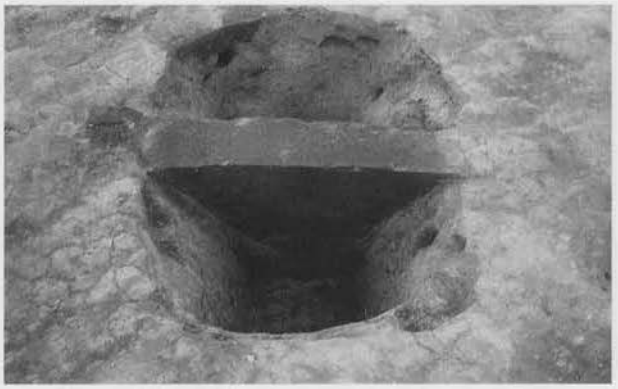
X－6区　SD692溝跡、SK1329土壙（南西から）

X－8区全景（東から）

X－8区　SK1261土壙

X－8区　SK1271土壙

X－8区　SK1271土壙



X－8区　SK1266土壙

X－8区　SK1267土壙

X－8区　SK1268土壙

X－8区　SK1269土壙

X－8区　SK1269土壙

図版5

X－8区　SK1270土壙

X－8区　SK1270土壙

Y区　①トレンチ　SK1361・1363土壙（東から）

Y区　①トレンチ　SK1361土壙

Y区　①トレンチ　SD692・1225溝跡（南西から）

Y区　①トレンチ　SD690溝跡（南から）

Y区　4トレンチ（南から）

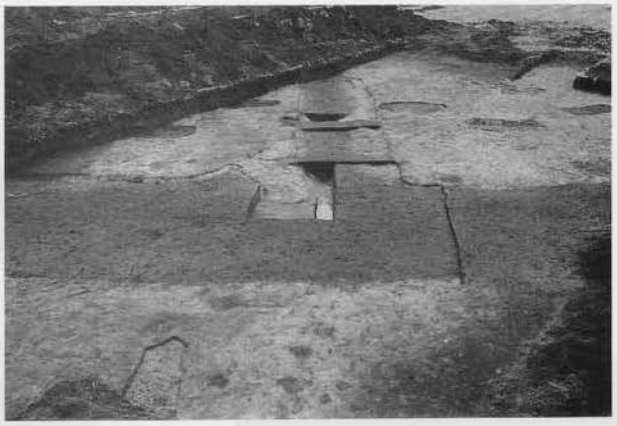
Y区　4トレンチ　SK1353土壙

Y区　4トレンチ　SK1353土壙

Y区　4トレンチ　SD696・697・1371溝跡（北西から）

図版6

Y区　5・6トレンチ（北東から）



Y区　5・6トレンチ　SD692・696溝跡（南東から）

Y区　5・6トレンチ　SK1349土壙

Y区　5・6トレンチ　SK1348土壙

Y区　5・6トレンチ　SD696溝跡、SK1350土壙

Y区　8トレンチ　SD692溝跡（南から）

Y区　8トレンチ　SK1359・1360土壙（南西から）

Y区　9トレンチ全景（北から）

A－1区北　SK291土壙（西から）

A－1区北　SK291土壙近接

図版7

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

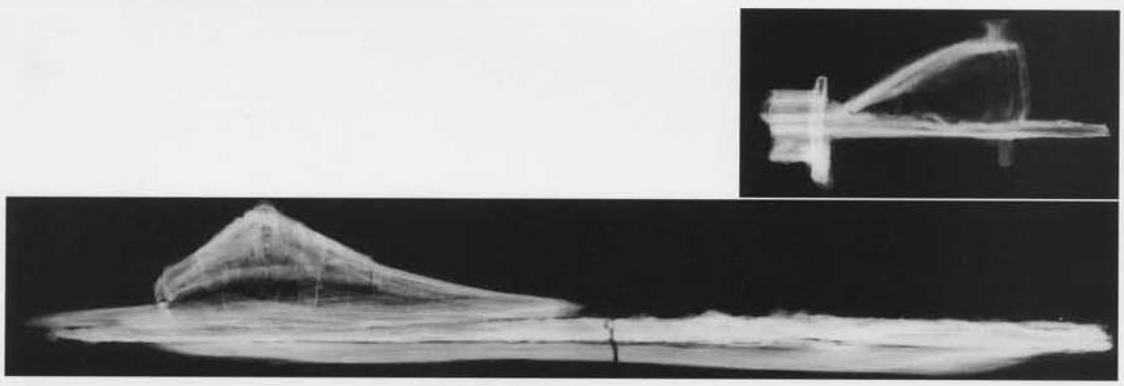
16

1：21－5（挿図番号－挿図内番号）　2：21－1　3：21－2　4：21－6　5：21－4　6：21－9　7：21－7　8：21－8
9：23－1　10：23－4　11：23－2　12：23－3　13：23－5　14：23－6　15：23－7　16：23－8（縮尺1～15：1/3、16：1/5）

図版8

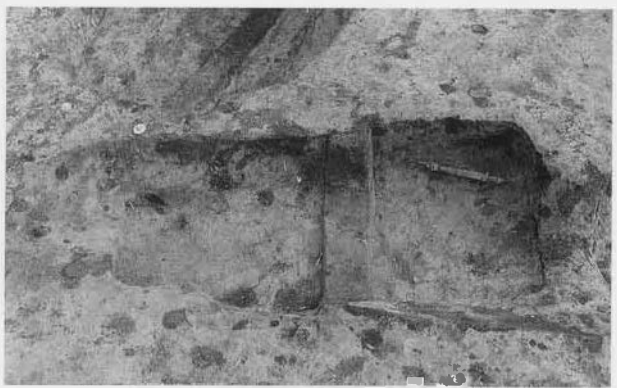
1　2

3



鉄剣X線写真

1：24－1（小区番号－挿図内番号）　2：24－2　3：25－1（縮尺1～3：1/3）



A－1区　SK34土壙　鉄剣出土状況（西から）

館の内遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の概要……59
Ⅱ　発掘調査の成果……59
　1　調査に至る経過と調査方法
　2　発見された遺構と遺物
Ⅲ　考察……73
Ⅳ　まとめ……74
引用・参考文献……75
写真図版……77

調　査　要　項

遺 跡 名：館の内遺跡（たてのうちいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：14009、遺跡記号：TU
所 在 地：宮城県亘理郡山元町大平字館の内
調査原因：農村整備事業（畑地造成）
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課　須田良平、吉野武、引地弘行
　　山元町教育委員会　中鉢琢也
調査期間：2001年（平成13年）6月11日～27日
調査対象面積：3,150㎡
調査面積：1,080㎡
調査協力：山元町教育委員会、東北農政局山元農地整備事業所

Ⅰ　遺跡の概要

亘理郡山元町は宮城県の南東端に位置し、東側は太平洋、西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈によって画されている。阿武隈山地は宮城県に入ると二つに枝分かれし、東側の支脈は海岸線に沿って北上し、北端が阿武隈川と接する。この支脈は標高200～300mの丘陵で、その縁辺には小河川によって開折された小丘陵や海岸段丘が分布している。海岸線と小丘陵の間には沖積地が広がっており、現在は水田として利用されている。

館の内遺跡は、亘理郡山元町大平字館の内に所在する。本遺跡は山元町役場から北西に約3km 離れた大平地区にある。阿武隈山地の縁辺に発達した西から東へと延びる小丘陵の緩やかな南東斜面に立地する。標高は28～35mである。本遺跡の周辺は一部宅地になっているが、大部分は水田・畑地として利用されている。

本遺跡周辺における遺跡の分布状況をみると（第１図）、沖積平野に比べ小丘陵上に多くみられる。古墳時代の遺跡として、本遺跡の南東約5.5km の合戦原遺跡、南東約8.0km の狐塚遺跡では、大規模な集落跡が発見されている。また、味噌野横穴墓群や山崎横穴墓群などの横穴墓群がある。古代になると合戦原遺跡では窯跡と狐塚遺跡では集落跡が営まれている（岩見：1991、窪田：1995)。特に合戦原遺跡の立地する丘陵上に多くの遺跡が営まれるようになり、戸花山窯跡や北名生東窯跡、館下窯跡は、合戦原遺跡内に存在する窯跡群とともに、古代においてここが須恵器の一大生産地であったことを物語っている。また、本遺跡の北方約9.0km の地点には亘理郡衙に比定される三十三間堂遺跡がある（佐藤：1988、後藤：2000)。

Ⅱ　発掘調査の成果

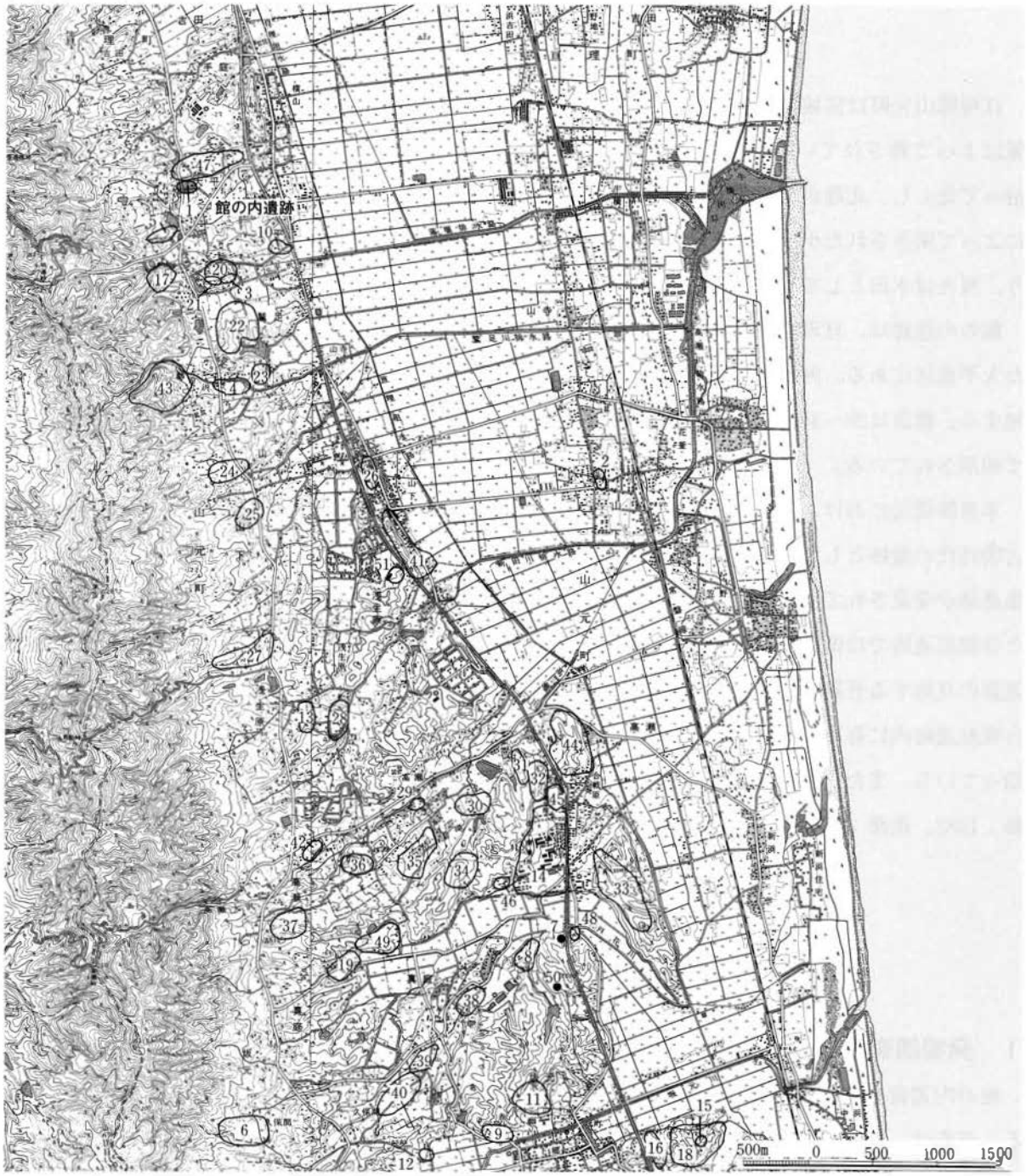
1　発掘調査の経過と方法

館の内遺跡の発掘調査は、東北農政局山元農地整備事業所が主体の農村整備事業に係るものである。事業は、現在の畑地を盛土工法で再造成するものである。調査対象部分は、遺跡南辺の南東斜面である。調査は遺構の分布状況を確認するため、平成13年3月の試掘調査を経て６月に確認調査を行った。調査方法は対象地に７本のトレンチを設定し遺構の状況をみて適宜拡張し、調査区を西からＡ～Ｇ区とした（第２図)。

検出した遺構の測量にあたっては国家座標軸を基準線とし、1/20または1/100平面図を作成した。また、1/20断面図を適宜作成した。写真記録は35㎜モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて作成した。

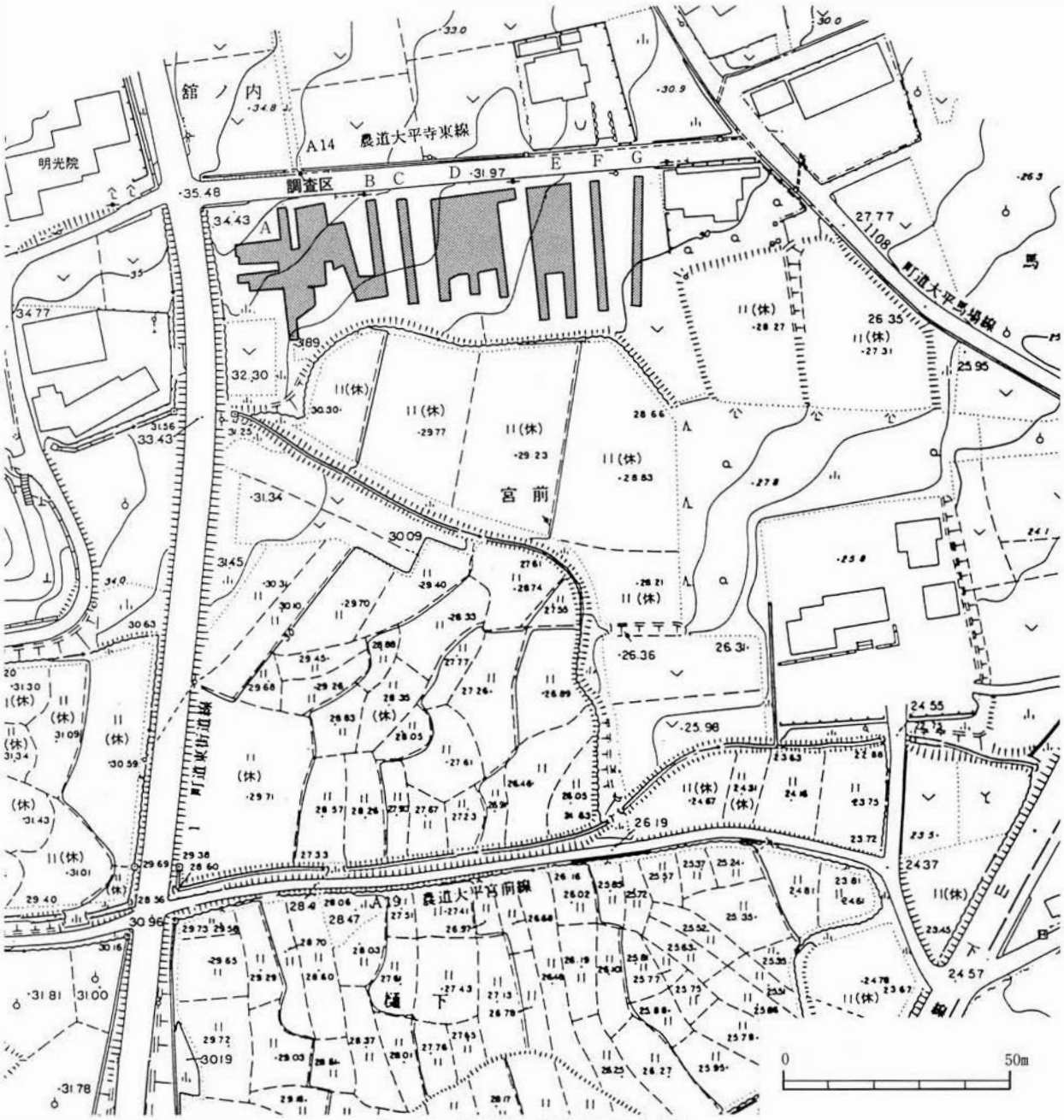
2　発見された遺構と遺物

遺構の検出は表土直下の黄褐色シルト面で行われた。開墾時の削平のため全体的に残存状況はよく



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	館の内遺跡	散布地	古代	18	狐塚遺跡	集落・散布地	弥生・古墳・平安	35	室原遺跡	散布地	古代
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代	19	北鹿野遺跡	散布地	古墳	36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
3	館の内横穴墓群	横穴墓	古墳後	20	小平館跡	城館	中世	37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩	21	館横穴墓群	横穴墓	古墳後	38	原遺跡	散布地	古墳
5	味噌野横穴墓群	横穴墓	古墳後	22	山崎横穴墓群	横穴墓・散布地	古墳後	39	浅生遺跡	散布地	古代
6	影倉遺跡	散布地・貝塚	縄文後・晩	23	中道遺跡	散布地	古墳後	40	旧権現遺跡	散布地	縄文早・前・古墳
7	卯月崎塚	塚	中・近世	24	石堂遺跡	散布地	古代	41	山下館跡	城館	中世
8	土台遺跡	散布地	弥生	25	山寺館跡	城館	中世	42	石山原遺跡	散布地	縄文
9	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後	26	作田山館跡	城館	中世	43	鷲足館跡	城館	中世
10	北経塚遺跡	散布地・経塚	縄文前・弥生～室町?	27	人山遺跡	散布地	縄文後・古代	44	合戦原B遺跡	製鉄	不明
11	愛宕山館跡	城館	室町	28	下大沢遺跡	散布地	縄文前	45	合戦原C遺跡	散布地	古代
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後	29	宮後遺跡	散布地	古代	46	北名生東B窯跡	窯跡	古代
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後	30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	47	大平館跡	城館	中世
14	合戦原遺跡	集落・円墳・窯跡	古墳中・後・奈良・平安	31	館下窯跡	窯跡	古代	48	月吹城跡	城館	中世
15	孤塚古墳群	円墳	古墳後	32	中島館跡	城館	中世	49	真庵館跡	城館	中世
16	向山遺跡	散布地	古墳～平安	33	戸花山窯跡	窯跡	平安	50	北越塚	塚	近世?
17	清水遺跡	散布地	弥生	34	北名生東窯跡	窯跡	古代	51	日向窯跡	窯跡	古代

第1図　館の内遺跡と周辺の遺跡



第２図　調査区の位置と周辺の地形

ないが、掘立柱建物跡８棟、竪穴住居跡５軒、竪穴遺構１基、溝跡６条、土壙７基などが発見された。（第３図）。遺物は土師器を中心に須恵器、製塩土器、縄文･弥生土器が出土している。それらは整理用コンテナ箱で４箱ある。

(1)　掘立柱建物跡

８棟確認した。Ｄ区に５棟が集中する。

【建物跡１】（第４・５図）

南北２間、東西２間以上の建物跡をＤ区東側で確認した。建物跡２・３より古い。柱穴は５箇所で検出しており、すべてで径13～17cm の円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は、東西が北側柱列で総長2.4m以上、南北が西側柱列で総長4.9m、柱間寸法は北から2.4m、2.5mである。建物の方向は西側柱列でN－23°－Wである。柱穴は長辺45～52cmの隅丸方形を呈し、深さは北西隅柱で26cmある。埋土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

【建物跡２】（第４・５図）

桁行３間、梁行２間の東西棟建物跡をD区北側で確認した。建物跡１より新しい。西から１間目の棟通りに間仕切りの柱穴がある。柱穴は11箇所で検出しており、10箇所で径12～17cmの円形の柱痕跡、９箇所で柱切取穴を確認している。

平面規模は桁行が南側柱列で総長7.7m、柱間寸法は西から2.7m、2.6m、2.4m、梁行が東妻で総長4.5m、柱間寸法は北から2.2m、2.3mである。建物の方向は南側柱列でE－10°－Nである。柱穴は長辺60～88cm、短辺53～75cmの隅丸方形を呈し、深さは南東隅柱で42cmある。埋土は地山ブロックを含むしまりのある暗褐色シルトを主体としている。柱切取穴は長軸30～66cmの楕円形を基調とし、深さは南東隅柱で30cmあり地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は柱穴埋土からロクロ使用の土師器坏・甕、須恵器甕の破片が極少量出土している。土師器坏には底部に手持ちヘラケズリが施されているものがある。

【建物跡３】（第４・５図）

桁行３間、梁行２間の東西棟建物跡をD区北側で確認した。建物跡１より新しい。柱穴は10箇所で検出しており、すべてで径15～18cmの円形の柱痕跡、１箇所で柱切取穴を確認している。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長5.0m、柱間寸法は西から1.8m、1.5m、1.7m、梁行が東妻で総長4.6m、柱間寸法は北から2.4m、2.2mである。建物の方向は南側柱列でE－12°－Nである。柱穴は長辺55～72cm、短辺50～66cmの隅丸方形を呈する。深さは南東隅柱で24cmある。埋土は地山小ブロックを含むしまりのある暗褐色シルトである。柱切取穴は長軸36cmの円形で地山ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている

遺物は柱穴埋土からロクロ使用の土師器坏・甕が極少量出土している。土師器坏には体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施されているものがある（第10図３）。

【建物跡４】（第４図）

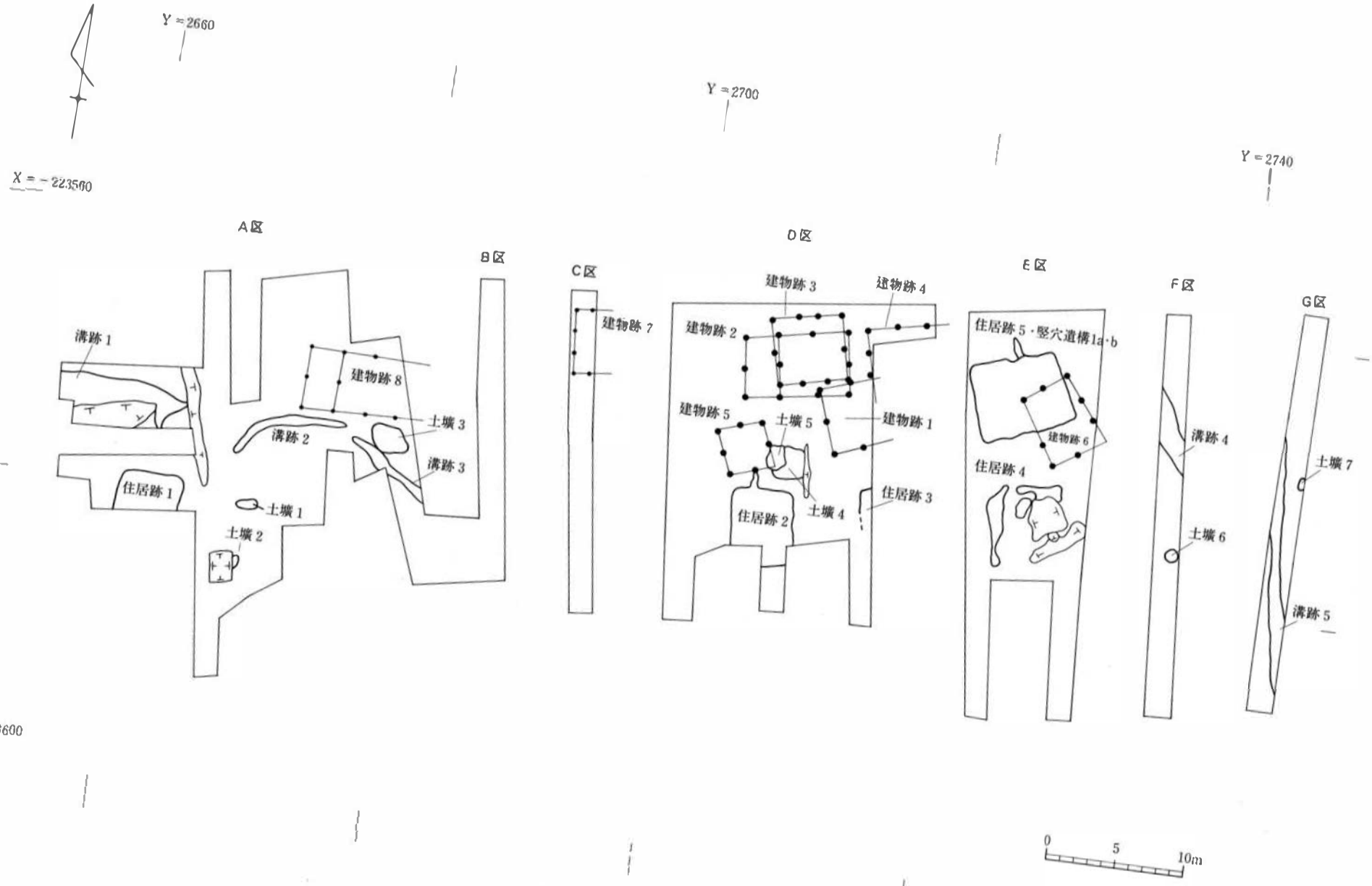
東西に２または３間、南北２間以上の建物跡をD区東側で確認した。柱穴は５箇所検出しており、４箇所で径15cm前後の円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は、桁行が北側柱列で総長4.5m以上、柱間寸法は西から2.2m、2.3m、梁行が西側柱列で総長3.2m以上、柱間寸法は北から1.6m、1.6mである。建物の方向は北側柱列でE－13°－Nである。柱穴は長辺46～60cm、短辺43～48cmの隅丸方形を呈する。埋土は、地山小ブロックを含むしまりのある暗褐色シルトである。

遺物は柱穴埋土からロクロ使用の土師器甕が極少量出土している。

【建物跡５】（第４図）

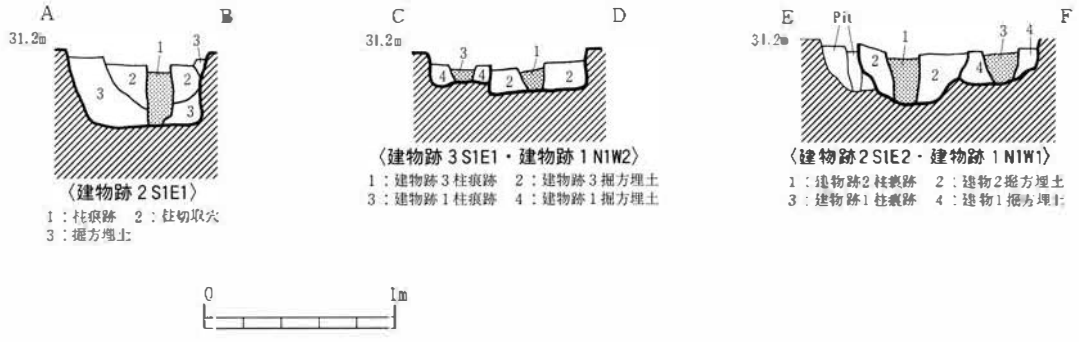
南北２間、東西２間の建物跡をD区中央で確認した。住居跡２より新しく、土壙５より古い。柱穴



第 3 図　調査区遺構配置図

Y =2700
Y =2710
建物跡 3
建物跡 4
建物跡 2
建物跡 1
建物跡 5
土壙 5
土壙 4
住居跡 3
住居跡 2
A
B
X =
−233570
X =
−233580
0
5 m

第 4 図　D 区建物跡 1 ～ 5



第5図　D区建物跡断面図

は7箇所検出しており、すべてで径13～17cmの円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は、南北が総長3.5m、柱間寸法は北から1.9m、1.6m、東西が北側柱列で総長3.4m、柱間寸法は西から1.7m等間隔である。建物の方向は西側柱列でN― 25°―Wである。柱穴は長軸38～44cmの楕円形を呈している。埋土は、地山小ブロックを含む暗褐色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

【建物跡6】（第3図）

南北3間、東西2間の南北棟建物跡をE区北側で確認した。住居跡5より古い。柱穴は8箇所検出しており、3箇所で径11～17cmの円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は、桁行が東側柱列で総長5.3m、柱間寸法は2.0m、1.8m、(1.5m)、梁行が北妻で総長3.8m、柱間寸法は西から1.8m、2.0mである。建物の方向は東側柱列でN― 30°―Wである。柱穴は長軸32～62cmの方形または楕円形を呈している。埋土は、地山小ブロックを含む暗褐色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

【建物跡7】（第3図）

南北3間、東西2間以上の建物跡をC区北側で確認した。柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径10cmほどの円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は南北が西側柱列で総長4.5m、柱間寸法は北から1.6m、1.3m、1.6m、東西が北側柱列で総長1.7m以上である。建物の方向は東側柱列でN―5°―Wである。柱穴は長辺30～40cmの方形を呈している。埋土は、地山小ブロックを含む黒色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

【建物跡8】（第3図）

東西3間以上、南北2間の東西棟建物跡A区中央で確認した。西から1間目の棟通りに間仕切りの柱穴がある。柱穴は9箇所で検出しており、すべてで径10cmほどの円形の柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が南側柱列で総長6.8m、柱間寸法は西から2.3m、2.4m、2.1m、梁行が西妻で総長4.6m、柱間寸法は北から2.2m、2.4mである。建物の方向は南側柱列でE―2°―Nである。柱穴は長軸30cmほどの円形または楕円形を呈している。埋土は、地山小ブロックを含む暗褐色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

(2) 竪穴住居跡

5軒確認した。住居跡1がA区で確認された以外は、D・Eに集中する。掘り下げを行ったものは住居跡5のみで、それ以外は平面確認に留めている。

【住居跡1～4】(第3・10図)

平面形は方形または長方形で、規模が判明しているものは長軸5.5～6.5mである。方向は住居跡1が北に対し東に偏し、それ以外は北に対し西に偏する。いずれも検出面における堆積土は炭・焼土・地山小ブロックを含む黒色や暗褐色シルトを主体としている。住居跡1・2ではカマドが北辺に付設されている。そのうち前者は北辺に焼土が分布し、住居跡北辺から約1m北の調査区壁で煙道の痕跡が確認されている。後者は、煙道の先端が建物跡5の柱穴に壊されている。

遺物は、遺構確認時に土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。土師器坏・甕はロクロ使用のものが主体である。土師器坏には回転糸切り無調整のもの(第10図4)や手持ちヘラケズリの再調整が施されているものがある。なお、住居跡1・2の土師器甕にはロクロを使用しないものが含まれる(第10図5)。

【住居跡5】(第6図)

E区北側で確認した。建物跡6より新しい。

[平面形・規模] 東西5.0m、南北5.3mで方形を呈する。

[堆積土] 残存しない。

[壁]地山を壁としており、住居外側へやや開き気味に立ち上がる。高さは東壁で床面から10cmである。

[床面] 壁際は地山ブロックを多く含む固くしまりのある灰黄褐色シルト質粘土の掘方埋土を、中央部は地山を床面としている。ほぼ平坦である。

[主柱穴] 床面で4個確認した(P1～4)。掘方の平面形は長軸30～60cmの楕円形を呈する。

[周溝] 検出されなかった。

[カマド] 北辺ほぼ中央に付設されている。カマド右側壁の一部が残存しているのみである。カマド底面は奥壁寄りが若干窪み、中央やや焚き口寄りのところが赤色に硬化している。煙道は長さ1.8m、幅25～60cm、深さ7～18cmの溝状で、横断面形は「U」字状を呈する。先端にかけやや下向きに傾斜し、先端部は段を持ち浅くなっている。

[その他のピット] 主柱P4の側で確認した(K1)。平面形は径55cmで円形を呈し、深さは17cmである。堆積土は炭・焼土・地山小ブロックを含む黒色シルトである。

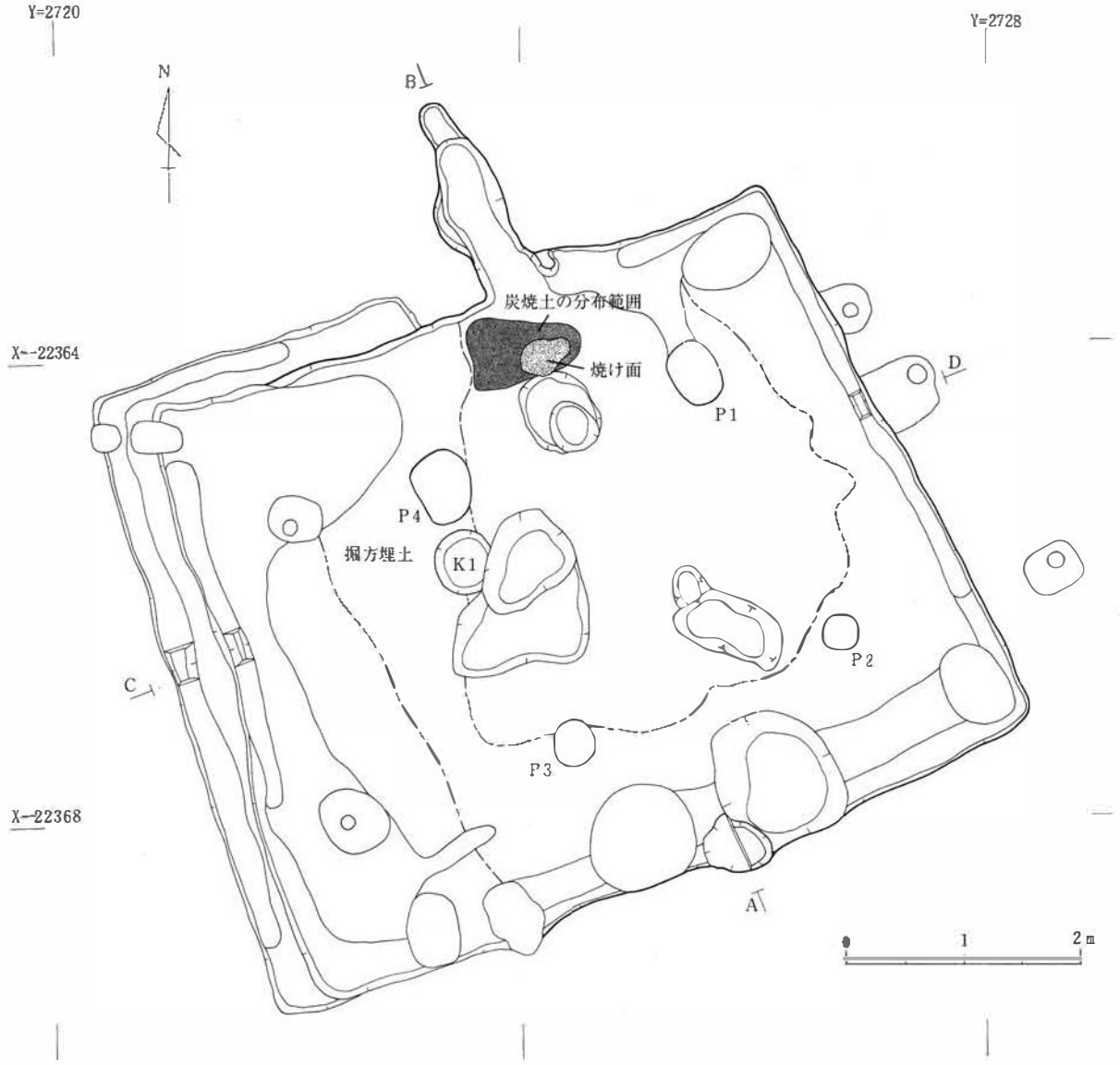
[方向] 東辺でN－30°―Wである。

[出土遺物] 主柱P4より、ロクロ使用の土師器甕の破片が1点出土したのみである。

(3) 竪穴遺構

【竪穴遺構1a】(第7・9図)

E区北側で確認した。住居跡5の西辺を広げて構築している。また、構築時には住居跡5のカマドが壊され、煙道が埋め戻されている。



第6図　E区 住居跡5

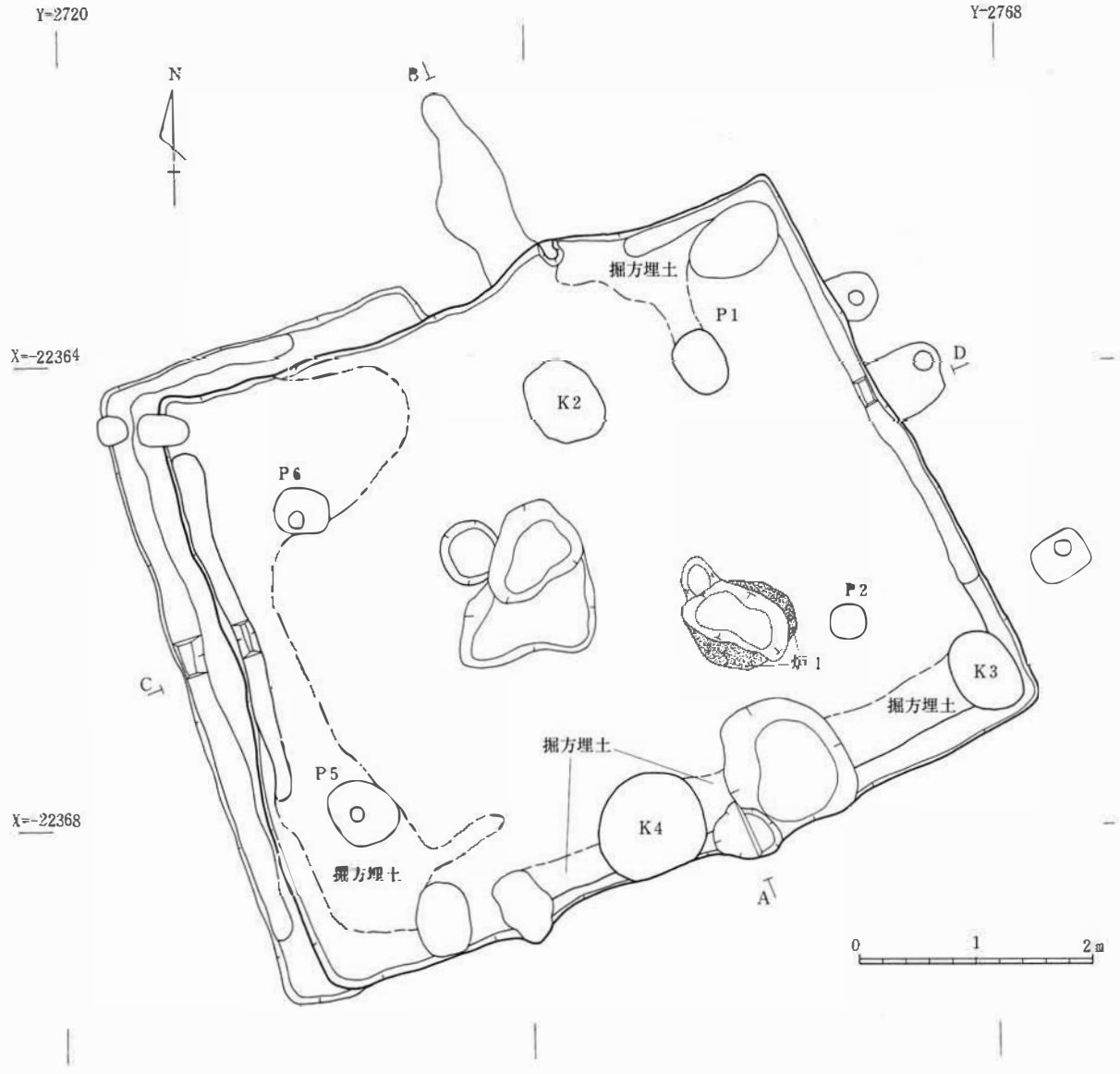
［平面形・規模］住居跡5の西壁を約1m拡張しており、東西6.1m、南北5.3mで長方形を呈する。

［壁］東・南・北辺は住居跡5の壁を通用している。西辺を含めていずれも地山を壁としている。壁は住居外側へやや開き気味に立ち上がる。高さは東壁で床面から10cmである。

［床面］西・南側の壁際と北辺東側は炭粒・地山小ブロックを含むしまりのある黒褐色シルトの掘方埋土を、それ以外は住居跡5の床を通用している。床面は拡張部分にかけしだいに高くなり、西側の壁際では中央部より10cmほど高くなっている。

［主柱穴］床面で4個確認した（P1・2・5・6）。東側は住居跡5の主柱を通用している。掘方の平面形は長軸40~58cmの楕円形を呈する。P5・6では径15cm前後の円形の柱痕跡を確認している。これらはb期においても主柱として使われたとみられる。

［周溝］北辺を除く各辺の一部で確認した。東辺はb期の周溝により壊されている。西辺では上幅17



第7図　E区 竪穴遺構1a

～23cm、下幅10cm、深さ10cmである。断面形は「U」字状を呈する。堆積土は炭粒・焼土粒を含む黒色シルトで人為的に埋め戻されている。

［炉］住居中央で1箇所確認した（炉1）。平面形は長さ85cm、幅70cmの楕円形を呈し、この範囲が赤色に硬化している。中央部分が撹乱で壊されているため詳細は不明である。

［その他の遺構］床面で土壙を1基確認した（K4）。南辺中央に位置し、規模は径88cmの円形を呈する。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトである。なお、南東隅に位置するK3は機能時期を特定できなかった。

［方向］東辺でN－30°—Wである。

［出土遺物］掘方埋土からロクロ使用の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には回転糸切り無調整のものがある（第9図8）。

【竪穴遺構１b】（第8・9図）

Ｅ区北側で確認した。竪穴遺構１ａの北辺と西辺を広げて構築している。

［平面形・規模］ａ期の西壁を40cm、北壁を30cm拡張しており、東西6.5m、南北5.6mで不整な長方形を呈する。

［堆積土］１層は炭粒・焼土粒を含む黒色シルト、２層は炭粒・焼土粒・地山小ブロックを含む灰黄褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［壁］拡張部分以外は拡張前の壁を通用し、いずれも地山を壁としている。壁は住居外側へやや開き気味に立ち上がる。高さは東壁で床面から10cmである。また、西壁で床面から７cmである。

［床面］拡張部分は地山を床とし、それ以外はａ期の床面を通用している。床面は拡張部分にかけしだいに高くなり、西側の壁際では中央部より15cmほど高くなっている。

［主柱穴］ａ期の主柱（P1・2・5・6）をすべて通用している。

［壁柱穴］壁からやや張り出す位置でピットを２個確認した（P7・8）。いずれも南辺に位置する。平面形は長軸50～63cmの楕円形を呈し、深さがＰ７で37cmである。埋土はＰ７が炭粒・地山小ブロックを含む黒色シルト、Ｐ８は地山ブロックを含む黒色シルトである。このP7・8は、位置関係から入り口に伴う施設と考えられる。

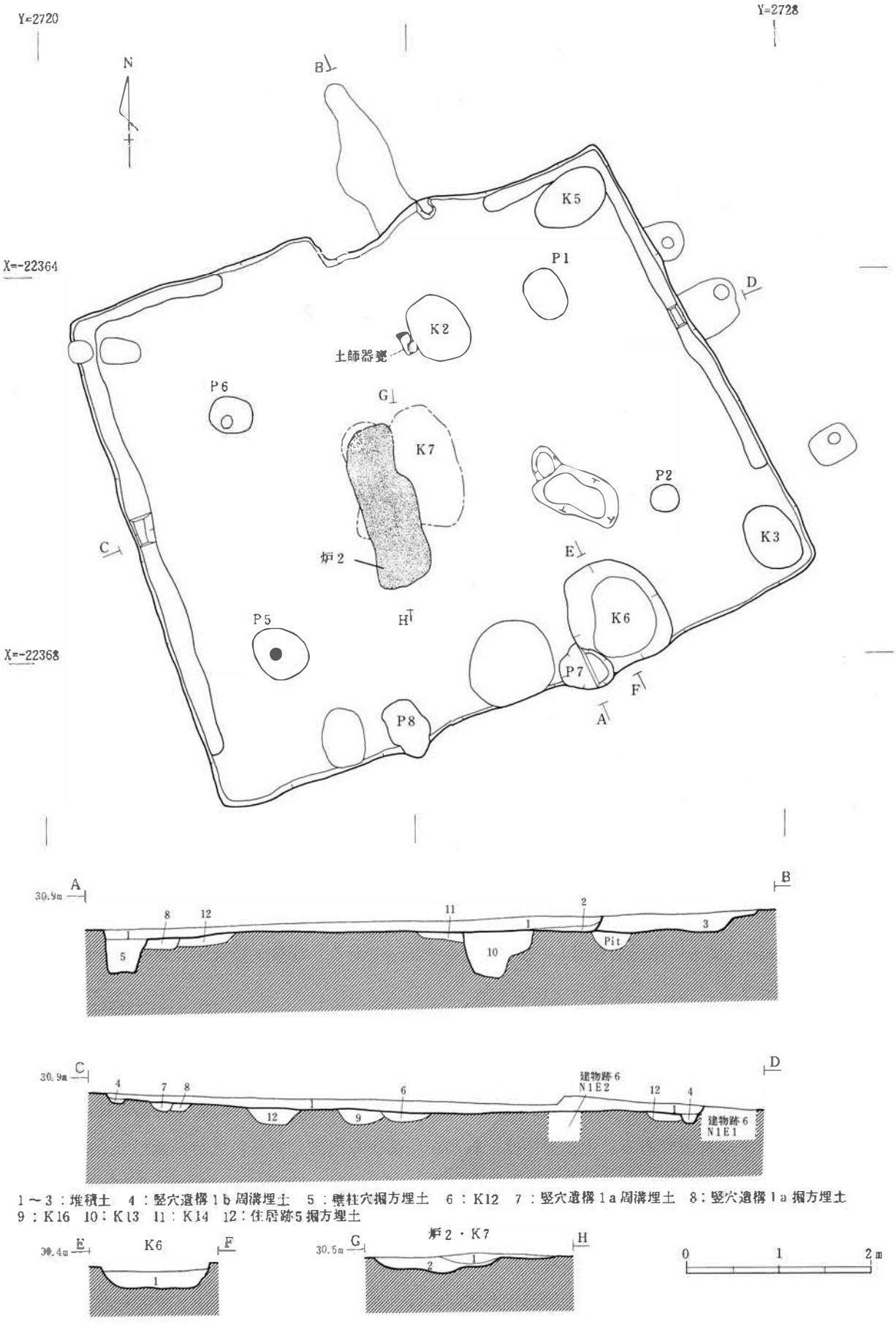
［周溝］東辺および西辺から北辺へ巡っており、北辺中央では認められない。上幅13～28cm、下幅10～14cm、深さ5～10cmである。断面形は「Ｕ」字状を呈する。堆積土は炭粒・焼土粒を含む黒色シルトで人為的に埋め戻されている。

［炉］住居中央で１箇所確認した（炉２）。土壙状の掘り込み（Ｋ7）を人為的に埋め戻した後に使用されている。平面形は長さ180cm、幅55cmの長方形を呈し、この範囲が赤色に硬化している。その下部のＫ12は、平面形が長軸137cm、短軸88cmの不整形を呈し、深さ37cmである。地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻され（２層）、その上に貼り付けられた黄褐色の粘土が火の影響を受け赤褐色に変化している（１層）。

［その他の遺構］床面で土壙を２基確認した（K5・6）。Ｋ5が北東隅、Ｋ6が南辺東寄りに位置する。平面形は長軸85～116cmの楕円形を呈し、深さがＫ6で26cmである。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトを主体とする。

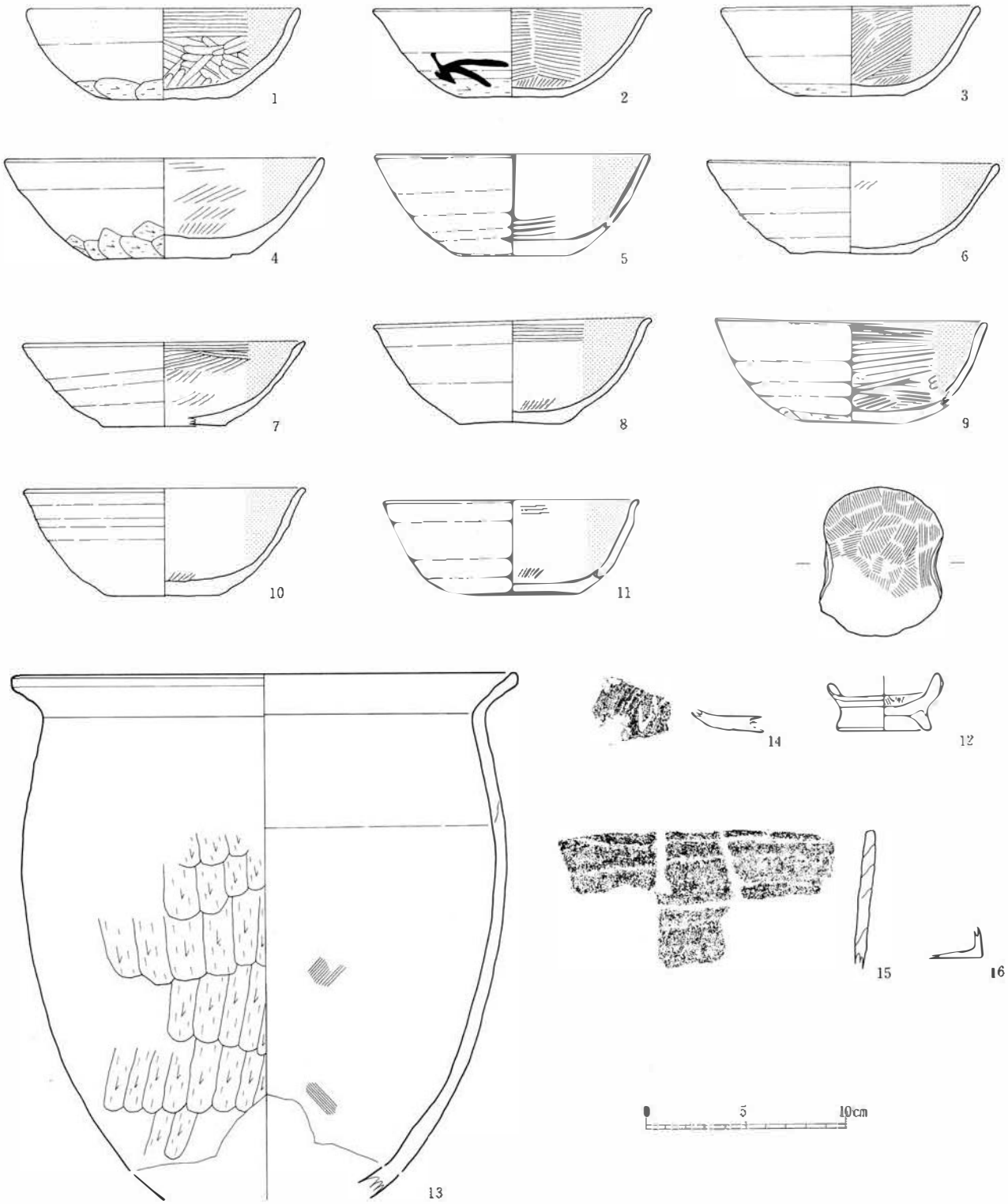
［方向］東辺でＮ－30°－Ｗである。

［出土遺物］床面や床面直上、Ｋ6から土師器坏・耳皿・甕、須恵器坏・高台坏・甕、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、製塩土器、弥生土器が出土している（第９図）。土師器の坏と甕が多く、いずれもロクロ使用である。土師器坏は、体部が底部から内湾して立ち上がる椀形で、そのまま口縁部にいたるものと端部が軽く外反するものがある。底部切離しはほとんどが回転糸切りで、再調整（手持ち・回転ヘラケズリ）の施されているものが主体を占める。Ｋ6から出土した土師器坏には、内外面ともにヘラミガキの後に黒色処理されているものや、体部に「万」の墨書が認められるもの⑵がある。また、堆積土から出土した土師器坏の底部には、焼成前に施された「山」カの刻書が認められるもの⑷がある。



1～3：堆積土　4：竪穴遺構1b周溝埋土　5：壁柱穴掘方埋土　6：K12　7：竪穴遺構1a周溝埋土　8：竪穴遺構1a掘方埋土
9：K16　10：K13　11：K14　12：住居跡5掘方埋土

第8図　E区 竪穴遺構1b



No.	種別	地位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真
1	土師器・坏	1b・床面	外面：ロクロナデ、底面：不明→手持ちヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.7)	(6.4)	4.5	1/3	
2	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：不明→回転ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理、墨書「万」	13.9	5.0	4.4	7/8	4-1
3	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：不明→回転ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.0	5.7	4.5	7/8	4-2
4	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り→手持ちヘラケズリ内面：ヘラミガキ→黒色処理	16.0	7.7	5.1	完形	4-3
5	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り→周縁ナデ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.8)	5.8	5.1	1/4	
6	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.6	6.1	4.7	7/8	4-4
7	土師器・坏	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.2)	(6.2)	4.2	1/3	
8	土師器・坏	1a・掘方埋土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.9	5.2	5.3	3/4	4-5
9	土師器・坏	1b・堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り→手持ちヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	5.6	5.0	1/2	4-6
10	土師器・坏	1b・堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.1)	(5.6)	5.4	1/3	
11	土師器・坏	1b・堆積土	外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）、内面：ヘラミガキ→黒色処理	(12.8)	6.3	4.7	1/3	
12	土師器・耳皿	1b・K7堆積土	外面：ロクロナデ、底面：不明→ナデ、内面：ヘラミガキ→黒色処理	6.0	4.8	2.9	完形	4-7
13	土師器・甕	1b・床面	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ、内面：ロクロナデ→ナデ	(25.2)			1/6	4-8
14	土師器・坏	1b・堆積土	刻書「田」カ				小破片	4-11
15	製塩土器	1b・堆積土	外面：指オサエ→ナデ、内面：ナデ				1/5	4-9
16	製塩土器	1b・堆積土	外面：ナデ、底面：ナデ、内面：ナデ？				小破片	4-10

第9図　竪穴遺構1a・b出土遺物

(4) 溝　跡（第 3図）

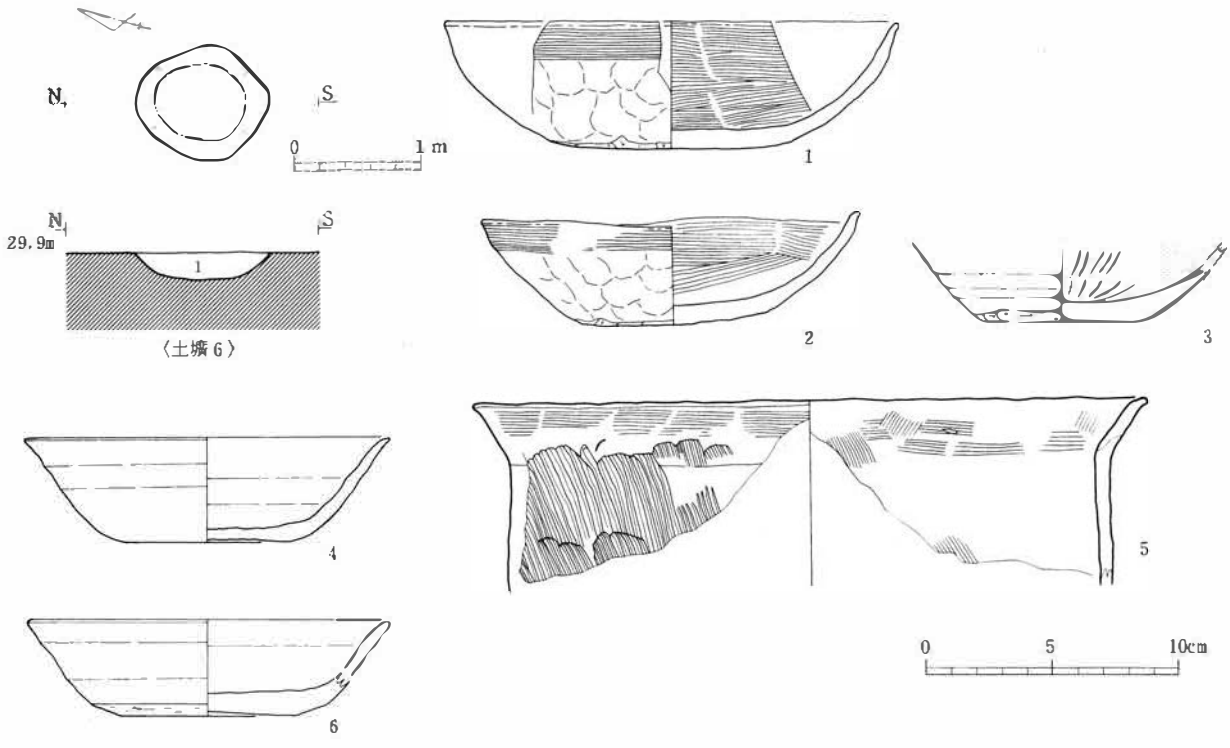
5条確認した。すべて平面確認に留めている。概ね東西にのびる溝（溝１～３）と南北にのびる溝（溝4・5）があり、溝跡３は土壙３より新しい。規模は上幅1.2～1.6mのもの（溝1・4・5）と0.6～1.0mのもの（溝2・3）がある。検出面における堆積土は、黒・黒褐色シルトを主体としている。遺物は出土していない。

(5) 土　壙（第3・10図）

7基確認した。掘り下げを行ったものは土壙６のみで、それ以外は平面確認に留めている。平面形は楕円形または方形を呈し、規模は長軸0.9～1.7mのもの（土壙1・2・5～7）と2.4m前後のもの（土壙3・4）がある。検出面における堆積土は、焼土・炭粒・地山ブロックを含む黒色・黒褐色シルトを主体としている。遺物は後述するもの以外は、土壙２でロクロ使用の土師器坏、須恵器甕が出土している。

【土壙６】（第10図）

F区中央で確認した。平面形は長軸1.1m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さが20cmである。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。堆積土は焼土・炭・地山粒を含む暗褐色粘土質シルトで、人為的に



No.	種　別	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	残存率	写真
1	土師器・坏	土壙６・上面	外面：指オサエ→ヨコナデ、底面：不明→手持ちヘラケズリ、内面：ナデ、焼成後外面赤彩	(18.0)	(9.6)	5.0	1/3	4-12
2	土師器・坏	土壙６・上面	外面：指オサエ→ヨコナデ、底面：不明→手持ちヘラケズリ、内面：ナデ	(15.0)	7.4	4.8	1/2	4-13
3	土師器・坏	遺物跡３・焼土	外面：ロクロナデ、底面：不明→手持ちヘラケズリ、内面：ヘラミガキ→黒色処理		6.3		1/3	
4	土師器・坏	住居跡４・遺構確認面	内外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り（無調整）	(14.0)	(6.4)	4.1	1/5	
5	土師器・甕	住居跡２・遺構確認面	外面：ヨコナデ→ハケメ、内面：ヨコナデ→ナデ	(16.4)			(口)1/4	
6	須恵器・坏	表採	内外面：ロクロナデ、底面：回転糸切り→回転ヘラケズリ	(14.4)	7.1	3.8	2/5	

第10図　F区土壙６および出土遺物、その他の出土遺物

埋め戻されている。

遺物は、堆積土からロクロを使用しない土師器坏、ロクロ使用の土師器坏・甕が出土している。図化した土師器坏（第10図１・２）は、製作にロクロを使用せず、平底で底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。外面は口縁部が横ナデ調整、体部が指によるオサエ、内面はナデ調整が施されている。第10図1は外面が赤彩されている。

(6) その他の出土遺物（第10図）

その他表土などから土師器、須恵器、縄文土器が出土している。土師器はいずれもロクロ使用で、坏には回転糸切り無調整や手持ちヘラケズリの再調整が施されているものがある。須恵器には坏（第10図６）と甕がある。

Ⅲ 考 察

１．遺物について

出土遺物には縄文・弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器があり、土師器坏と甕が圧倒的に多い。縄文・弥生土器は不明なものが多いが、弥生土器には十三塚式（伊東：1957）とみられるものがある。土師器には、製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものがあり、後者が大部分を占める。前者は破片資料であり時期を特定することができない。後者は製作に際しロクロを使用していることから、東北地方南部や宮城県における土師器編年からみて表杉の入式（氏家：1957、加藤：1989）に比定される。また、須恵器は小破片のため時期が不明である。

ところで、竪穴遺構１からは多くの土器が出土しており、土師器坏・耳皿・甕・甑、須恵器坏・高台坏・甕・壺、製塩土器がある（第９図）。ここでは特徴をとらえやすい土師器坏について検討をしてみたい。坏は、ロクロを使用し体部が底部から内湾気味に立ち上がる器形で、そのまま口縁部にいたるものと端部が軽く外反するものがある。口径が12.8～16.0cmの中型品で、口径に対する底径の比が0.42前後に集中している。底部の切離しはほとんどが回転糸切りで、切離し後に手持ち・回転ヘラケズリが施されるものが主体を占める。内面はヘラミガキの後に黒色処理が施されている。このような特徴をもつ土師器坏は、蔵王町東山遺跡土器溜出土土器（真山：1981）、山元町狐塚遺跡第５・６号住居跡出土土器（窪田：1995）に類例があり、９世紀中葉に位置付けられている。したがって、竪穴遺構１の土師器坏も同じ頃のものとみられる。なお、製塩土器は二次加熱により赤褐色を呈し、内外面ともに剥落している。成形は幅 1cm ほどの粘土紐の輪積みによるものである。器形は口縁部がほぼ直立し、端部が平坦になるものがある。

２．遺構について

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡８棟、竪穴住居跡５軒、竪穴遺構１基、溝跡６条、土壙７基などである。これらは調査区北側やや東寄りの比較的平坦な場所に集中する傾向にある。

(1) 掘立柱建物跡

8棟を検出した。規模は桁行2～3間程度、床面積35㎡以下の小規模なものが多い。建物の方向に着目してまとめると以下のようになる。

①建物跡2～4は、調査区やや東寄りで確認した。方向は東に対し北に10～13°振れる。柱穴は隅丸方形を呈する。

②建物跡1・5は、調査区やや東寄り①の南側で確認した。方向は東に対し北に17～18°振れる。柱穴は隅丸方形または楕円形を呈する。

③この他、建物跡6～8があるが方向に統一性がない。建物跡6は、調査区東寄りで①・②の東側で確認した。方向は東に対し北に25°振れる。柱穴は隅丸方形または楕円形を呈する。建物跡7は、調査区やや西寄り①・②の西側で確認した。方向は東に対し北に7°振れる。柱穴は方形を呈する。建物跡8は、調査区西寄り①・②から離れた場所で確認した。方向は東に対し北に2°振れる。柱穴は円形または楕円形を呈する。

①の建物は、2時期以上の変遷がある。建物跡2と3はほぼ同位置にある。これらは柱穴間の切り合いがなく、新旧関係が不明である。柱切取穴に注目すると建物跡2と3は2→3への建て替えとみられる。建物跡4は、建物跡2または3と建物の方向が一致し、いずれかに伴う建物と考えられる。また、②の建物は、両者が柱筋を揃えることから同時に存在したものと考えられる。

建物跡1は、重複関係から建物跡2・3より古い。よって、②→①の変遷がとらえられる。

年代は②からロクロ使用の土師器が出土し、周辺から出土する遺物も考慮すると9世紀代とみられる。①のうち、建物跡5はロクロ使用の土師器が出土した住居2より新しい。①は、周辺の遺物をみると9世紀代でありその頃のものと考えられる。③のうち、建物跡6は9世紀中葉頃の住居跡5より古い。建物跡7は年代が特定できないが周辺から出土する遺物の年代観により、上記の建物跡と同じ頃のものと考えられる。建物跡8は周辺からの出土遺物もなく、年代を特定することができない。

(2) その他の遺構の年代

掘立柱建物跡以外の遺構の年代は、出土遺物から竪穴住居跡がいずれも平安時代である。その中で、住居跡5とそれを拡張した竪穴遺構1a・bは9世紀中葉頃とみられる。溝跡・土壙で年代が分かるものは土壙6のみで9世紀頃と考えられる。

Ⅳ　ま　と　め

館の内遺跡は古代の遺跡として登録されていたが、これまで発掘調査が行なわれたことがなく実態は明らかではなかった。今回の調査で9世紀頃の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、竪穴遺構、溝跡、土壙などが検出されたことによって、その一端が明らかになった。

住居跡5を拡張した竪穴遺構1a・bでは、年代が9世紀中葉であること、拡張が行われて住居の機

能が工房へと変化したことなどがとらえられた。

掘立柱建物跡には、①の建物に顕著なように柱穴の形状や配置、建物同士の方向や柱筋が揃うなど規格・計画性を窺えるものがある。こうした建物は官衙やその周辺において見受けられるものだが、今回の調査が遺跡南端の一部にすぎず、こうした建物群の性格や変遷などの詳細は不明とせざるをえない。建物や住居、工房などで構成された遺跡全体の性格や変遷と合わせて、今後の調査成果に期待したい。

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』1

岩見和泰ほか（1991）：「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

小川淳一（1980）：「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

川村　正（1992）：『水浜遺跡』七ヶ浜町文化財調査報告書第8集

菊地逸夫（1995）：『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第8集

窪田　忍（1995）：『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書

後藤秀一（2000）：「日理郡」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

佐藤則之（1988）：「亘理町三十三間堂遺跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第127集

佐久間光平ほか（2001）：『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集

菅原弘樹ほか（1996）：「山王遺跡Ⅲ—仙塩道路関係遺跡発掘調査報告書—多賀前地区遺物編」
宮城県文化財調査報告書第170集

高橋信一（1983）：「松ケ平遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第集

西山眞理子（1991）：「船沢A遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告書Ⅱ』福島県文化財調査報告書第265集

丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群 宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集

真山　悟（1981）：「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集

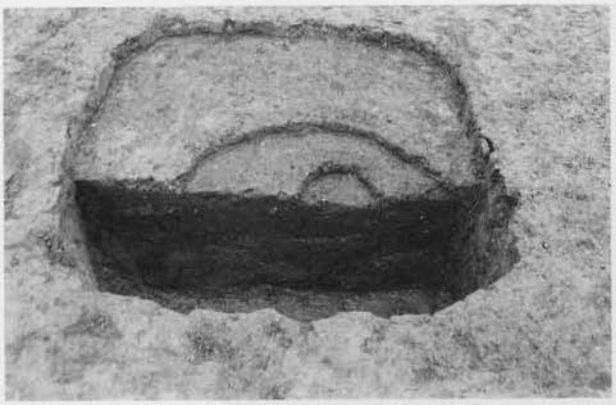
山元町史編纂委員会（1971）：『山元町誌』

遺跡遠景
（南西から）

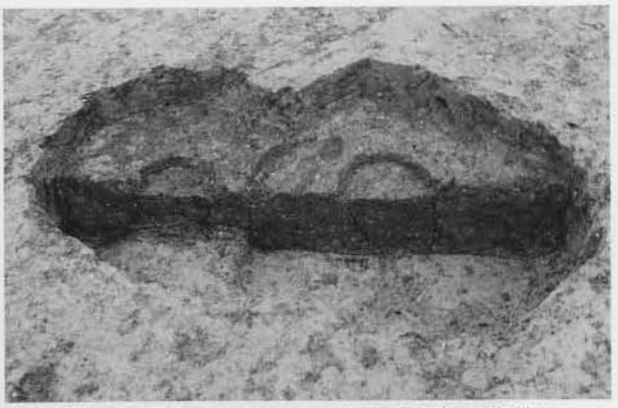
D区建物跡
（東から）

D区建物跡
（北から）

図版1



D区　建物跡2柱穴断面（S1E1）



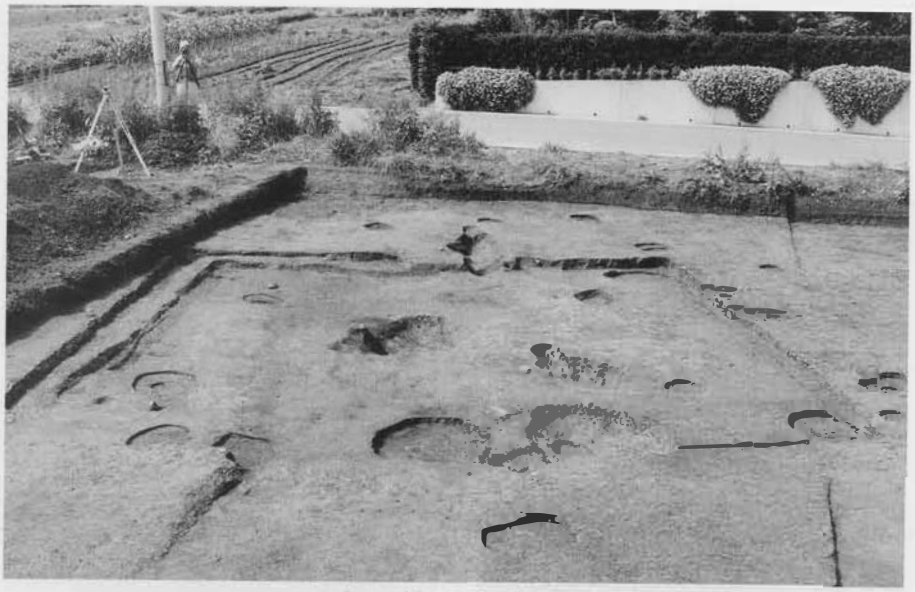
D区　建物跡3（S1E1）、1（N1W2）柱穴断面

D区　建物跡2（S1E2）、1（N1W1）柱穴断面

F区　土壙6土器出土状況

E区　住居跡5（南から）

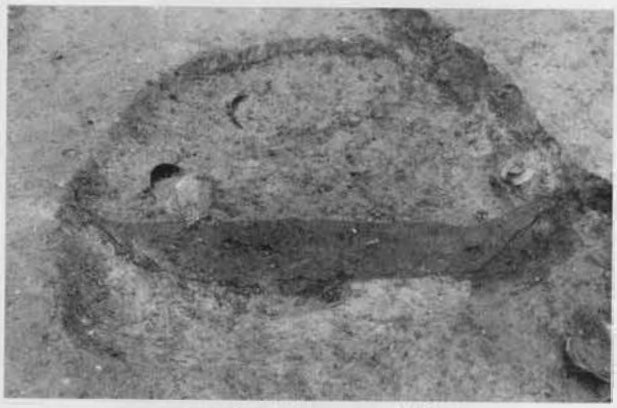
図版2



E区　竪穴遺構1a（南から）

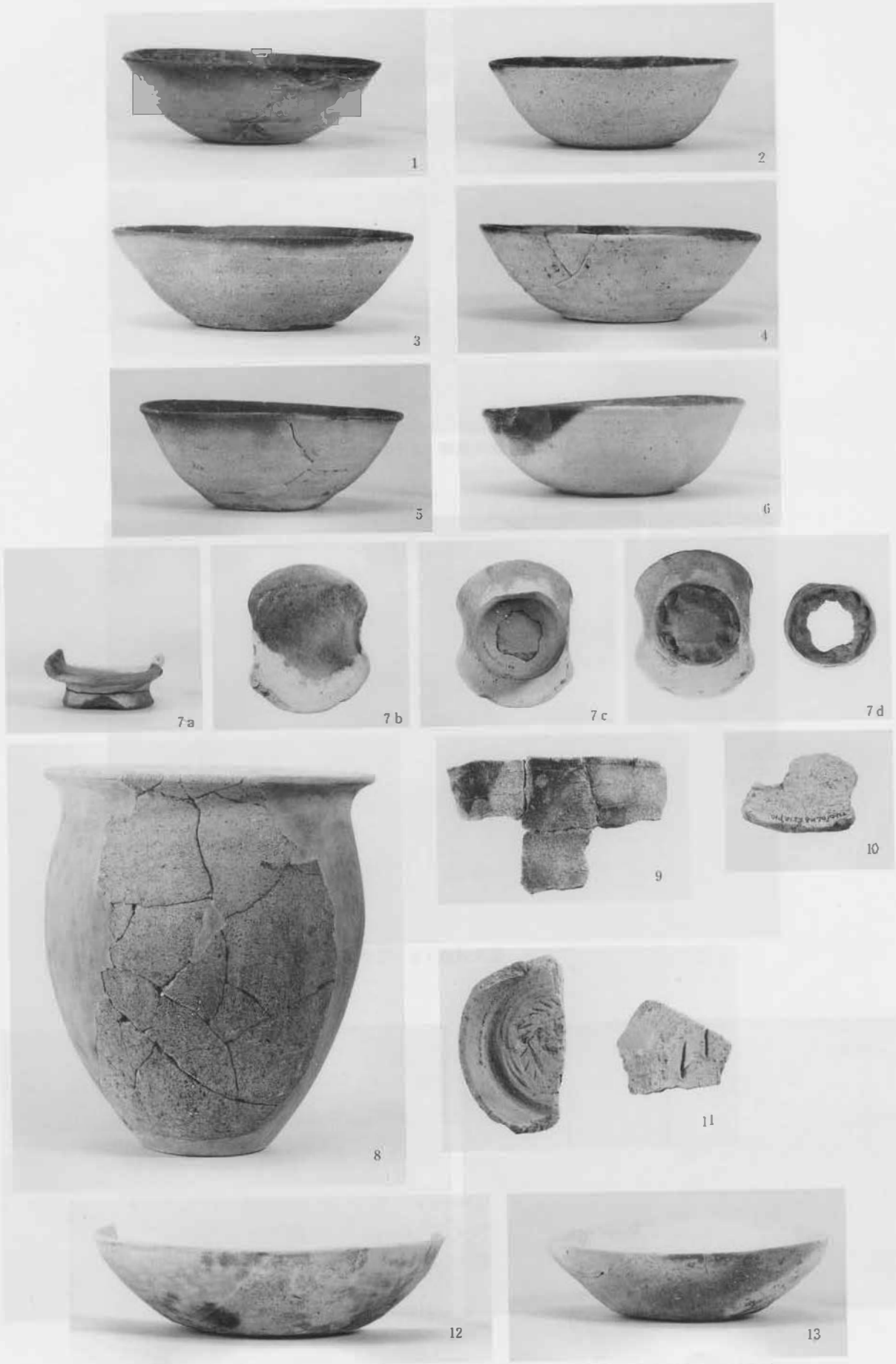
E区　竪穴遺構1b（南から）

E区　住居跡5　カマド周辺（南から）



E区　竪穴遺構1b　K6断面

図版3



1～11：竪穴遺構1a・b、12・13：土壙6（縮尺1～7・9・12・13：1/3、10・11：1/2、8：1/4）

出土遺物

図版4

一本柳遺跡・小沼遺跡

目　　次

第Ⅰ章　はじめに
1　遺跡の位置と環境……83
2　調査に至る経過と調査方法……84
第Ⅱ章　発掘調査の成果
1　基本層序……85
2　発見された遺構と遺物……85
第Ⅲ章　まとめ……88
引用・参考文献……88
写真図版……89

調　査　要　項

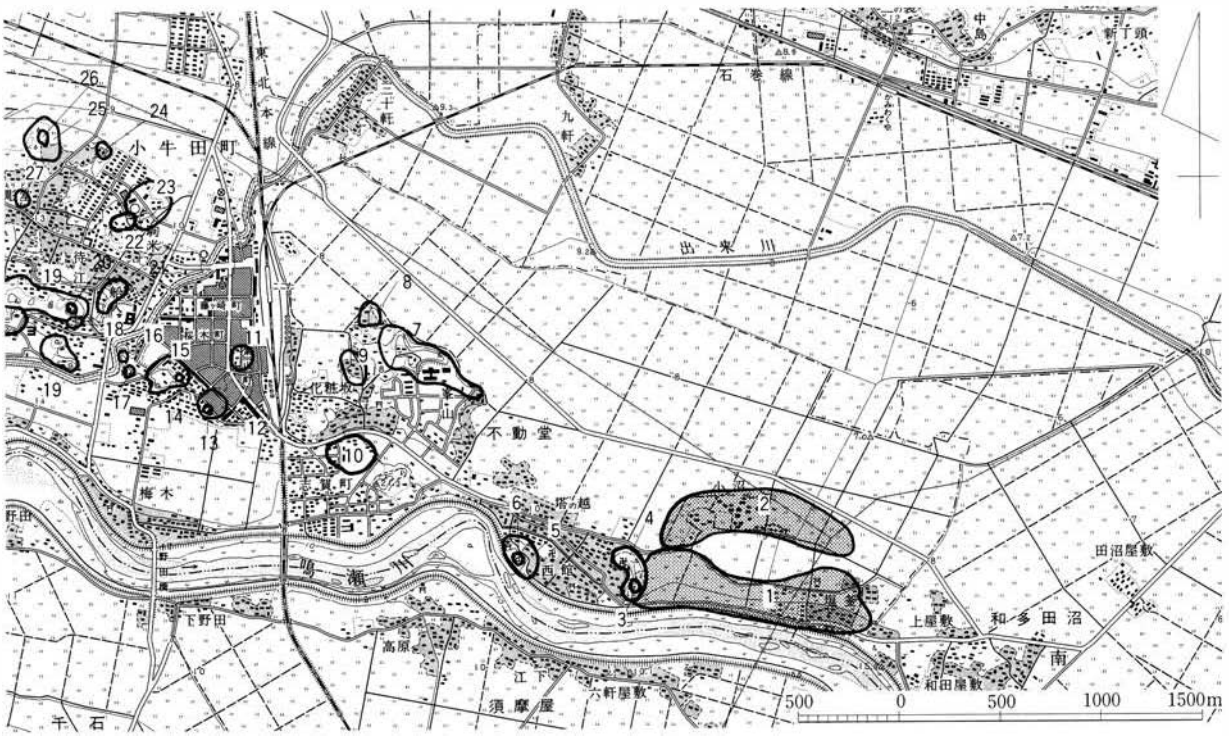
遺 跡 名：一本柳遺跡（いっぽんやなぎいせき）
（宮城県遺跡地名表登載番号：39044、遺跡記号 ＩＺ）
小 沼 遺跡（こぬまいせき）
（宮城県遺跡地名表登載番号：39033、遺跡記号 ＴＮ）
所 在 地：宮城県遠田郡小牛田町一本柳・小沼　他
調査原因：県営ほ場整備事業［出来川右岸地区（担い手育成）基盤整備事業］
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
天野順陽、千葉直樹
調査期間：2001年（平成13年）10月29日～11月9日
調査対象面積：374㎡（Ⅵ区 210㎡、Ⅶ区 164㎡）
調査面積：350㎡（Ⅵ区 210㎡、Ⅶ区 140㎡）
調査協力：小牛田町教育委員会、宮城県古川産業振興事務所、小牛田町土地改良区

第Ⅰ章　はじめに

1　遺跡の位置と環境

一本柳遺跡は、遠田郡小牛田町一本柳・新一本柳・塩釜に、小沼遺跡は同町小沼・勘堂・二ッ壇に所在する。これらの遺跡は、小牛田町役場の南東約３km離れた不動堂地区にあり、南郷町と境を接している。地形的には、江合川・鳴瀬川が形成した大崎低地東縁部にあって、鳴瀬川左岸に形成された自然堤防上に立地する（第１図）。一本柳遺跡・小沼遺跡周辺の丘陵や自然堤防上には、縄文時代早期から中世までの集落跡や古墳・館跡など多数の遺跡が周知されており、古くからこの地域が人々によって盛んに利用されてきたことがうかがわれる。なお詳細は、山田・伊藤（1998）を参照されたい。

一本柳遺跡は、奈良・平安時代、中世、近世にいたる東西１km×南北0.3kmにおよぶ遺跡である。平成７～11年に建設省（現国土交通省）東北地方建設局による鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設計画に伴う発掘調査が行われ、奈良・平安時代には掘立柱建物群が規則的に配置されており、官衙的集落であった可能性が高いことがわかった。また、中世では道路跡や掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡が検出され、



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	一本柳遺跡	集落	奈良・平安、中世、近世	10	悲賀堂城跡	城館	中世	21	船人遺跡	散布地	縄文後期
2	小沼遺跡（猫山遺跡を含む）	集落	古代・中世	11	宝銭塚古墳	前方後円墳	古墳中期	22	八雲古墳群	円墳	古墳後期
				12	鐘塚遺跡	散布地	古代	23	駒米遺跡	集落	縄文、古墳中・後期、奈良・平安、中世、近世
				13	鐘塚古墳	円墳	古墳後期				
3	岐蘇寺古墳	円墳	古墳	14	貝殻塚古墳	円墳	奈良				
4	岐蘇寺館跡	城館	中世	15	茶臼山貝塚	貝塚	縄文早期	24	東倉地古墳	円墳	古墳後期
5	西館跡	城館	中世・近世	16	保土塚古墳	円墳	古墳中期	25	堆沼遺跡	散布地	古代
6	鶴巡山古墳	古墳	古墳	17	後藤神社古墳	円墳	古墳中期	26	堆沼古墳	円墳	古墳
7	茶山遺跡	散布地	縄文晩期、古代	18	蜂谷森横穴墓群	横穴墓	古墳後期	27	影堂遺跡	散布地、古墳	縄文前・中・後期古墳、古代
8	小町井遺跡	散布地	古代	19	影堂七城跡	城館	中世				
9	化粧坂遺跡	散布地	古代	20	蜂谷森古墳	円墳	古墳中期				

第１図　一本柳遺跡・小沼遺跡の位置と周辺の遺跡

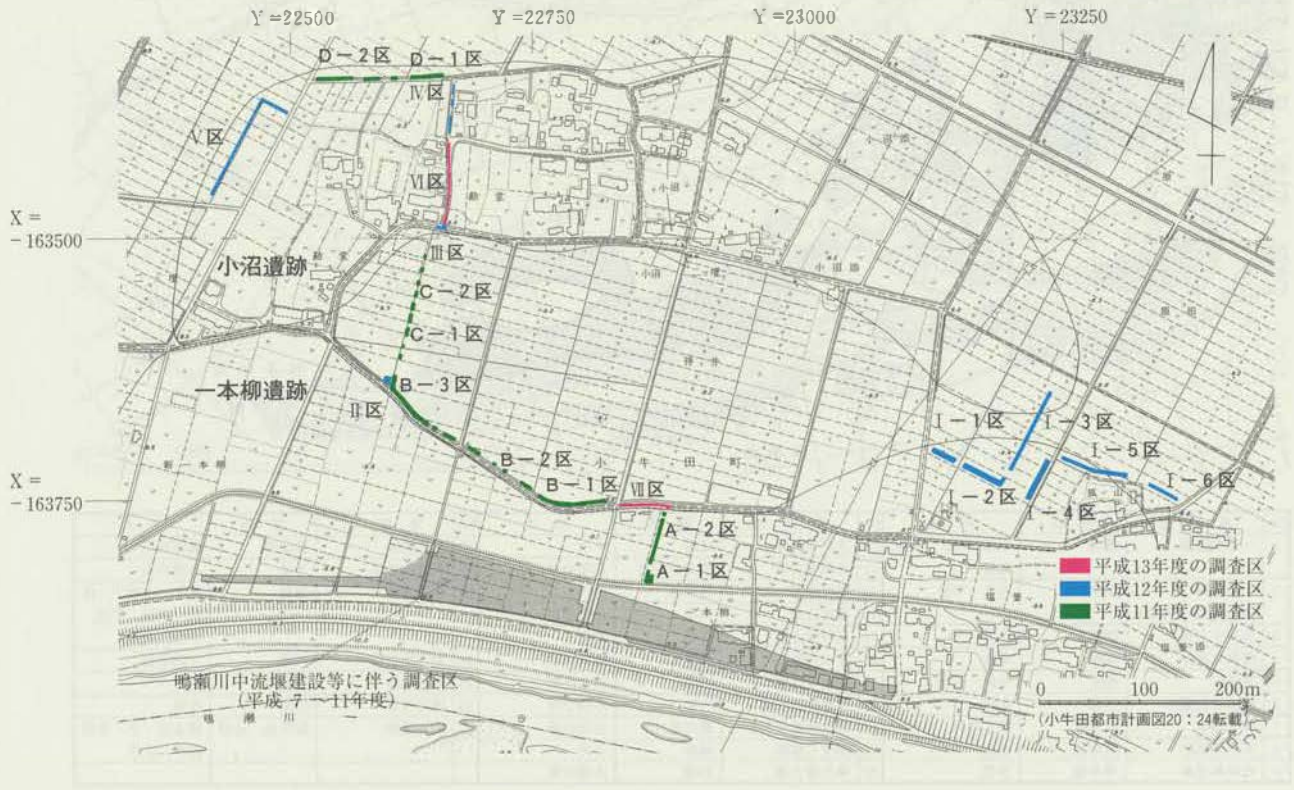
溝で区画された屋敷地が12以上確認された。(山田・伊藤：1998)。

小沼遺跡は一本柳遺跡北側の自然堤防上に位置する。これまで、土師器・青磁・白磁等が表土採集され、古代・中世の散布地として周知されていたが（小牛田町史編纂委員会：1970)、平成11年度、12年度の発掘調査の結果、古代・中世の土壙、井戸跡、溝跡が検出され、土師器・須恵器が出土していることから、古代・中世の集落跡であることが明らかとなった（茂木：2000、引地：2001)。

2　調査に至る経過と調査方法

平成8年に農政部から一本柳・小沼地区の事業計画が示された。対象地の大部分は両遺跡の間に広がる水田部分で、当時は遺跡の範囲に含まれていなかった。しかし、平成7年から行った一本柳遺跡の調査で、遺跡の範囲が北に広がるのは確実とみられたため、平成10年に水田部分の試掘調査を行った結果、一本柳遺跡の範囲が北側に拡大することが確認された。これを受け、調査は両遺跡間の水田部分も調査対象に含めて平成11年から継続して行われた。今回はその第3次調査（最終年次）で、現町道下に埋設される排水管部分を対象に調査を行った。調査区の名称は発掘調査を行った順にⅥ区（小沼遺跡)、Ⅶ区（一本柳遺跡）とした（第2図)。小沼遺跡では古代･中世の掘立柱建物跡、土壙、溝跡、柱穴が検出された。また、一本柳遺跡では古代の畦畔と溝跡が検出された。

検出された遺構は、Ⅵ区は1/20の縮尺で実測図を作成し、Ⅶ区は1/100の縮尺で平板測量を行った。また、断面図は1/20の縮尺で適宜作成した。記録写真は35㎜のモノクロ・リバーサルフィルムを用いて作成した。



第2図　調査区の位置

第Ⅱ章　発掘調査の成果

1　基本層序

小沼遺跡の基本層序は、Ⅰ層が暗褐色の表土・耕作土、Ⅱ層は暗褐色土で、下面に灰白色火山灰（10世紀前半）のブロックが部分的にみられる。Ⅲａ層はⅡ層からⅢｂ層への漸移層、Ⅲｂ層はにぶい黄色土、Ⅳ層は黄褐色土、Ⅴ層は暗灰黄色土で、Ⅵ層は灰色砂である（第３図）。遺構確認面はⅢａ層である。Ⅱ層がおよそ中世、Ⅲａ・Ⅲｂ層が古代と考えられる。

一本柳遺跡では調査区内に旧耕作土と古代の水田が広がり、良好な基本層序は確認できなかった。

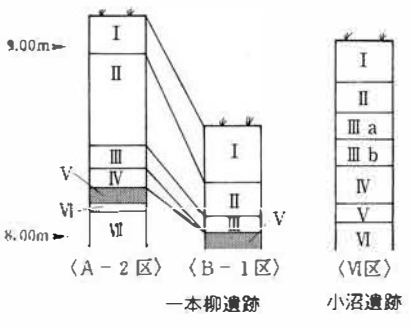
しかし、南のＡ－２区の層序を参考にすると、湿地性の堆積層であることがわかる。またＡ－２区と西のＢ－１区では約25cm の比高があることから、一本柳遺跡が鳴瀬川左岸の自然堤防から低地への落ち際にあることがわかる。

2　発見された遺構と遺物

(1)　小沼遺跡（Ⅵ区）（第４図）

掘立柱建物跡２棟（SB60、SB61）、土壙７基（SK50～56）、溝跡３条（SD57～59）、柱穴（Pit. 3他）が検出された。出土遺物では非ロクロ調整の土師器と須恵器が少数ある。以下おもなものについて説明する。

［SB60 掘立柱建物跡］　全体の規模は不明であるが、北東方向に３間以上、南東方向に２間以上と考えられる。方向は北側柱列でＮ－43°－Ｅで、柱間寸法は1.8mである。柱穴の平面形は方形で、長軸約44cm、短軸約34cm、深さ約30cm、柱穴埋土はⅢｂ層を主体とするにぶい黄色土である。遺物は出土していない。



一本柳遺跡

層	土　色	土性	備　考
Ⅰ	暗褐（7.5YR3/4）	粘質シルト	表土・耕作土
Ⅱ	にぶい褐（7.5YR5/3）	粘質シルト	
Ⅲ	黒褐（7.5YR2/2）	粘質シルト	
Ⅳ	にぶい褐（7.5YR5/4）	粘質シルト	酸化鉄を含む
Ⅴ	灰白（10YR8/1）	シルト	灰白色火山灰
Ⅵ	オリーブ灰（5GY6/1）	粘土	
Ⅶ	オリーブ灰(5GY4/1)	粘土	

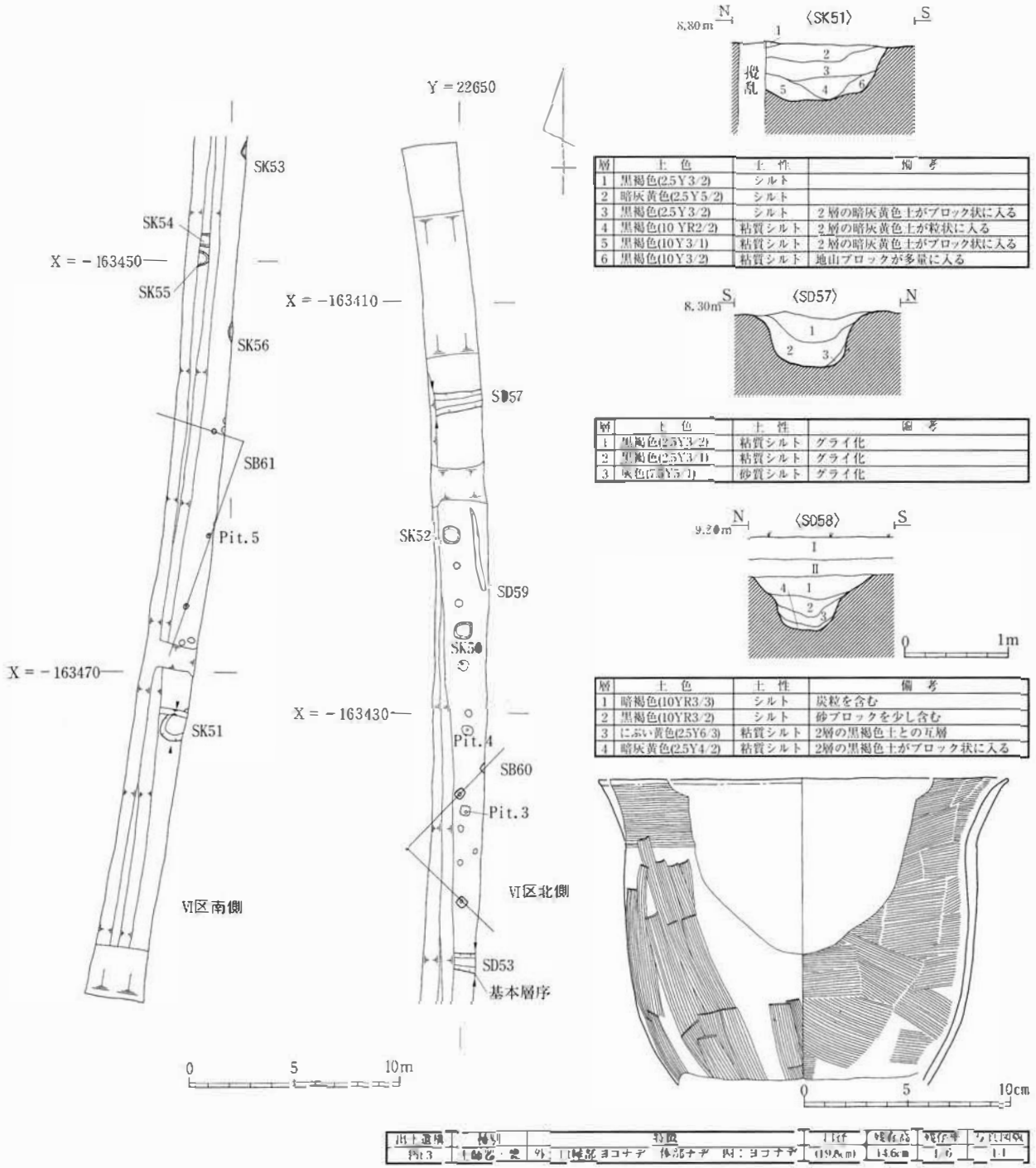
小沼遺跡

層	土　色	土性	備　考
Ⅰ	灰黄（10YR4/2～5/2）	シルト	表土・耕作土
Ⅱ	暗褐（3/4）	シルト	全面に灰白色火山灰ブロックが部分的にみられる
Ⅲa	暗褐（3/4）～にぶい黄（2.5Y6/3）	シルト	
Ⅲb	にぶい黄（2.5Y6/3）	シルト	
Ⅳ	黄褐（2.5Y5/3）	シルト	
Ⅴ	暗灰黄（2.5Y5/2）	シルト	酸化鉄を含む
Ⅵ	灰（10Y4/1）	砂	

第３図　基本層序

［SB61 掘立柱建物跡］　全体の規模は不明であるが、南北方向に２間以上、東西方向に１間以上と考えられる。方向は東側柱列でN－14°－Eで、柱間寸法は北側柱列で1.8m、東側柱列で北から4.1m、4.2mであると考えられる。柱穴の平面形は楕円形で、長軸約26cm、短軸約22cm、深さ約10cm、柱穴埋土はⅡ層主体の暗褐色土である。遺物は出土していない。

［SK50 土壙］　平面形はやや不整な楕円形である。長軸84cm、短軸78cm、深さ18cm で、断面形は皿状である。埋土はにぶい黄色土を主体とし、人為的に埋め戻されている。遺物は非ロクロ調整の土師器甕の小破片が出土している。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	
3	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	2層の暗灰黄色土がブロック状に入る
4	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	2層の暗灰黄色土が粒状に入る
5	黒褐色(10Y3/1)	粘質シルト	2層の暗灰黄色土がブロック状に入る
6	黒褐色(10Y3/2)	粘質シルト	地山ブロックが多量に入る

層	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)	粘質シルト	グライ化
2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘質シルト	グライ化
3	灰色(7.5Y5/1)	砂質シルト	グライ化

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭粒を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂ブロックを少し含む
3	にぶい黄色(2.5Y6/3)	粘質シルト	2層の黒褐色土との互層
4	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘質シルト	2層の黒褐色土がブロック状に入る

出土遺構	種別	特徴	口径	器高	底径	写真図版
Pit.3	土師器・甕	外：口縁部ヨコナデ　体部ナデ　内：ヨコナデ	(19.4cm)	14.6cm	7.6	11

第４図　小沼遺跡（Ⅵ区）遺構平面図・断面図・出土遺物

［SK51 土壙］　平面形は楕円形である。長軸1.2m以上、短軸1.0m以上、深さは58cmで、断面形は皿状である。埋土は黒褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されている。遺物は須恵器甕の小破片が出土している（図版１－４）。

［SD57 溝跡］　東西方向の溝跡である。上幅約1.2m、下幅40～60cm、深さ52cmで、断面形はU字形である。堆積土は黒褐色土を主体とする自然堆積で、３層に細分される。遺物は出土していない。

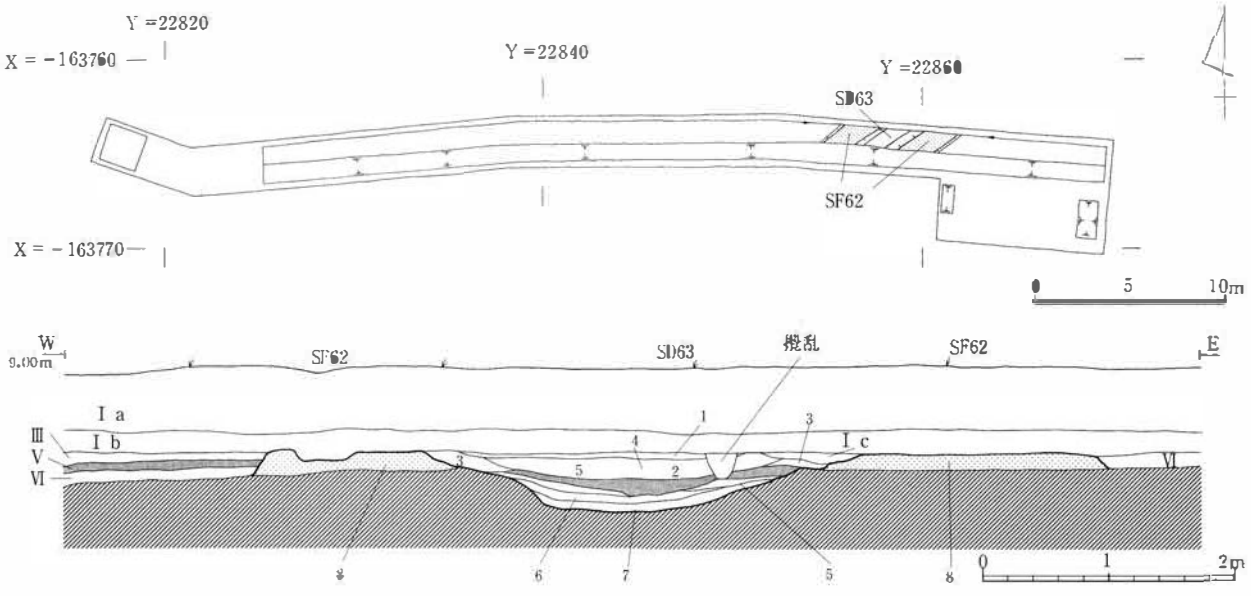
［SD58 溝跡］　東西方向の溝跡である。上幅約1.2m、下幅30～40cm、深さ53cmで、断面形は上部が開くU字形である。黒褐色土を主体とする自然堆積で、４層に細分される。遺物は出土していない。

［Pit. 3　柱穴］　平面形は方形で、長軸約48cm、短軸約42cm、深さ約45cmである。埋土はⅢ層由来のにぶい黄色土を主体とする。遺物は、非ロクロ調整の土師器甕が出土している。頸部に段がなく長胴形であることから、８世紀代と考えられる（図版１－１）。

(2)　一本柳遺跡（Ⅶ区）（第５図）

古代の畦畔１条［SF62］とそれに伴う溝跡１条［SD63］を検出した。遺物は出土していない。

［SF62 畦畔］　残存している畦畔の高まりは上幅6.0m、基底幅6.8mで、高さは10cm～20cmである。畦畔は地山の褐灰色土を主体とする土を盛り上げて造られている。この畦畔の東西は水田耕作土と考えられるが、明確な耕作土や小畦畔は検出されなかった。



遺構名	層	土　色	土　性	備　考
SD63	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
	2	黒褐色（10YR2/2）	粘質シルト	小層の灰白色火山灰を巻き込んでいる
	3	黒褐色（10YR3/2）	粘質シルト	小層の灰白色火山灰がブロック状に入る
	4	灰白色（10YR8/1）	シルト	灰白色火山灰
	5	褐灰色（10YR5/1）	粘質シルト	灰白色火山灰粒を含む
	6	暗灰黄（2.5Y5/2）	粘質シルト	黒褐色粘質シルトが層状に薄く入る
	7	褐灰色（10YR5/1）	粘質シルト	
SF62	8	黒褐色～にぶい黄色（10YR3/2～2.5Y6/3）	粘質シルト	炭粒を少し含む（人為）

第５図　一本柳遺跡（Ⅶ区）遺構平面図・断面図

［SD63 溝跡］　上幅3.5m、下幅1.0m、深さ48cmで、断面形はU状である。溝跡は畦畔のほぼ中央を通り、畦畔と溝跡の方向はE－36°－Nである。溝跡の堆積土は黒褐色土を主体とする自然堆積で、7層に細分される。4層が灰白色火山灰であることから、この溝跡と畦畔は10世紀前半より古いと考えられる。

第Ⅲ章　ま　と　め

今回の調査では、小沼遺跡で掘立柱建物跡、土壙、溝跡、柱穴が検出された。これらの遺構は、埋土などの特徴から古代のもの（SK50、SB60）と中世のもの（SK51、SB61）にわけられる。なお、溝跡については時期不明である。これらは調査区北側に古代の遺構、調査区南側に中世の遺構が認められる傾向がある。昨年の調査で小沼遺跡西部に古代・中世の集落が展開することがわかっているが、今回遺跡中央部まで範囲が拡大することが明らかとなった。また、集落の範囲は検出状況からさらに東に延びると予想される。

一本柳遺跡では畦畔とそれに伴う溝跡が発見された。この畦畔と溝跡は溝跡が灰白色火山灰に覆われていることから、古代（10世紀前半以前）であると考えられる。古代の畦畔は平成11年度調査A－2区、B－3・C－1区、平成12年度調査Ⅰ－4・5区においても検出され、一本柳遺跡と小沼遺跡の間にある低地に、古代の水田跡が広がっていることがわかっており、今回の発掘調査においてもその一部を確認することができた。

引用・参考文献

小牛田町史編纂委員会（1970）：『小牛田町史　上巻』

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

山田晃弘・伊藤　裕（1998）：『一本柳遺跡Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第178集

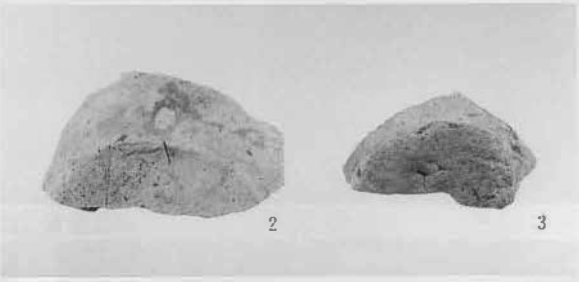
茂木好光（2000）：「一本柳遺跡・小沼遺跡」『名生館遺跡他』　宮城県文化財調査報告書第183集

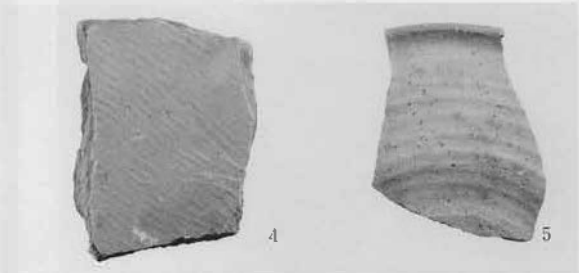
引地弘行（2001）：「一本柳遺跡・小沼遺跡」『名生館遺跡他』　宮城県文化財調査報告書第187集

Ⅵ区全景（南から）

SK51 土壙断面（西から）

SD57 溝跡断面（東から）





1．Pit3　2・3．SK50　4．SK51　5．遺構外
出土遺物（縮尺：1/3）

図版1　小　沼　遺　跡

Ⅶ区全景（東から）

Ⅶ区全景（西から）

SF62 畦畔・SD63 溝跡検出状況（南西から）

SF62 畦畔・SD63 溝跡断面（南から）

図版2　一　本　柳　遺　跡

刈敷館跡（かりしきたてあと）

目　　次

第一章　はじめに

Ⅰ．遺跡の位置と周辺の遺跡……93

Ⅱ．刈敷館跡について……93

第二章　調査に至る経過と調査の目的・方法

第三章　発掘調査の成果

Ⅰ．基本層序……95

Ⅱ．発見された遺構と遺物……97

第四章　まとめ

Ⅰ．遺跡の構造について……98

Ⅱ．遺跡の年代について……98

註、引用・参考文献、写真図版……99

調　査　要　項

遺 跡 名：刈敷館跡（かりしきたてあと）

宮城県遺跡地名表登載番号：49019　　遺跡記号：ＴＪ

所 在 地：栗原郡志波姫町刈敷三丁目地内

調査原因：県営ほ場整備事業（志波姫町中沖地区〔担い手〕４工区区画整理事業）に伴う確認調査

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課　佐藤則之、天野順陽、千葉直樹

調査期間：平成13年（2001年）11月19日～30日

面　　積：調査対象面積19,350㎡　　発掘調査面積836㎡

調査協力：宮城県築館産業振興事務所

志波姫町教育委員会

第一章　はじめに

Ⅰ．遺跡の位置と周辺の遺跡

刈敷館跡は栗原郡志波姫町刈敷三丁目に所在する（第１図）。遺跡の北部は迫川とその支流である一迫川によって形成された沖積地が広がり、南部は奥羽山脈から派生する築館丘陵が東に延びている。また、沖積地と丘陵の間には、「伊豆野原」と呼ばれる標高20～30ｍの緩やかに東に傾斜する段丘が発達しており、本遺跡はこの段丘の北側の一迫川右岸に形成された自然堤防上に立地する。

周辺の遺跡を概観する。まず館跡は、本遺跡南方1.5㎞の段丘に鶴の丸館遺跡（手塚：1981）、宇南遺跡（遊佐：1980）、日良館跡、また、迫川を挟み北方約２㎞の丘陵には金成町上館跡、下館館跡が位置する。

古代の遺跡は、一迫川を挟み本遺跡の西方約1.5㎞に神護景雲元年（767年）に設置された古代城柵である伊治城が位置する（宮城県多賀城跡調査研究所:1978～1980、築館町教育委員会:1988～2000）。また、本遺跡南部の段丘上には御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）、山の上遺跡（手塚：1980）、宇南遺跡（遊佐：1980）、淀遺跡（古川：2001）、吹付遺跡（註１）、さらに東方約５㎞に糠塚遺跡（小井川・手塚：1978）など奈良・平安時代の大規模な集落が連なっている。

Ⅱ．刈敷館跡について

刈敷館跡について出典が確かな文献はないが、栗原郡史（栗原郡教育會:1918）には「東西三十間、南北三十五間、刈敷に在り、刈敷右馬之丞、天文年中（1532～1554年）の居館址たり、…」（要約）と記されている（註２）。

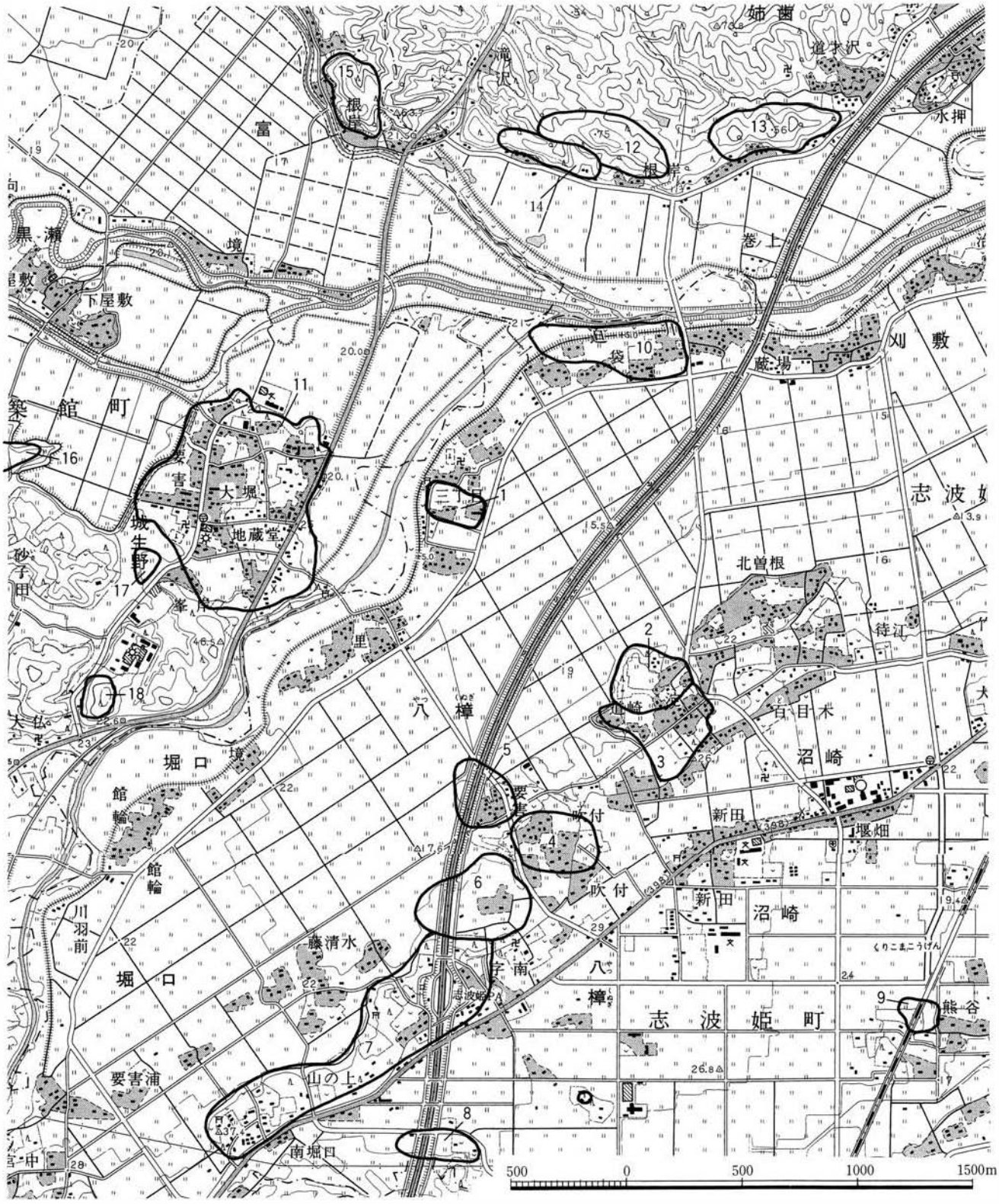
遺跡の現状は、畑として利用されている東・西２つの高まりと、それを取り囲む一段低い水田が認められる。東側高まりは東西約36m、南北約26mの不整長方形、西側高まりは東西約90m、南北96～105mの不整形である。水田との比高は共に約50～70㎝を計る。また、東側高まり周辺の水田には約10～15m幅の細かい地割りが残っており堀跡を反映しているものと考えられた。このような状態から遺跡は東･西２つの屋敷跡と、それを８の字に取り囲む堀跡で構成され、全体の規模は東西170m前後、南北60m前後の長方形を呈するものと推定された。

第二章　調査に至る経過と調査の目的・方法

平成９年に宮城県農政部から刈敷館跡地内における、ほ場整備事業の基本計画が示された。計画では一段低い水田を大きく取り囲むように道路と小排水路が敷設され、高まり部分は公園、一段低い部分は水田として利用し、基本的に小排水路部分以外は掘削しないというものであった。

これを受け、平成12年に宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館産業振興事務所、志波姫町の三者で協議した結果、確認調査を行い、その結果を基に再協議することになった。

調査は道路・小排水路部分および東・西の高まり、水田部分にトレンチを25本を設定し、遺構の有無、遺構面までの深さ、そして遺跡の範囲などを明らかにすることを目的に実施し、堀跡、建物跡等を確認した（第３図）。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	刈敷館跡	自然堤防	城館	中近世	10	刈敷袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代
2	旧良館跡	段丘	城館	中世	11	伊治城跡	段丘	城柵	古墳前・中・奈良・平安・中世
3	淀遺跡	段丘	集落	旧石器・奈良・平安	12	上館跡	丘陵	城館	平安・中世
4	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安	13	下館館跡	丘陵	城館	中世
5	館の丸館遺跡	段丘	集落・城館	縄文晩・弥生～近世	14	姉歯横穴墓群	丘陵	横穴墓	古墳後
6	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文前・晩・弥生～近世	15	高見山十三塚	丘陵	塚	
7	御駒塚遺跡	段丘	集落	縄文前・弥生～近世	16	堀切長根遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
8	山の上遺跡	段丘	集落	縄文・古代	17	其内屋敷遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
9	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・古代	18	大仏古墳群	丘陵	円墳	古墳後・古代

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

なお、調査区および堀跡の位置は、1/500の工事計画図に記入し、その他の遺構については適宜1/20平面図、断面図を作成した。また、35ミリカラーリバーサル・モノクロフィルム、デジタルカメラによる写真記録も併せて行った。

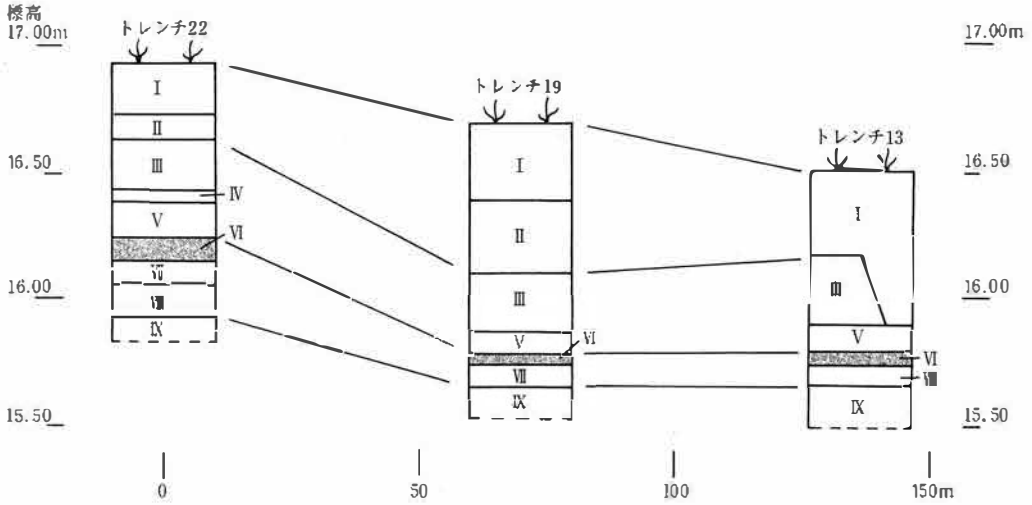
第三章　発掘調査の成果

Ⅰ．基本層序

基本層序模式図は西側高まりのトレンチ19・22、東側高まりのトレンチ13で作成した（第２図）。層序はⅠ層：表土・盛土・耕作土、Ⅱ層：褐色シルトを主体とする遺跡機能時に堆積した生活層、Ⅲ層：褐色シルト、Ⅳ層：Ⅲ～Ⅴ層の漸移層、Ⅴ層：暗褐色粘土質シルト、Ⅵ層：灰白色火山灰層、Ⅶ層：黒褐色粘土、Ⅷ層：暗褐色粘土質シルト、Ⅸ層：明黄褐色粘土質シルトである。遺構確認面は基本的にはⅢ層であるが、比較的新しい遺構はⅡ層で確認できるものもある。

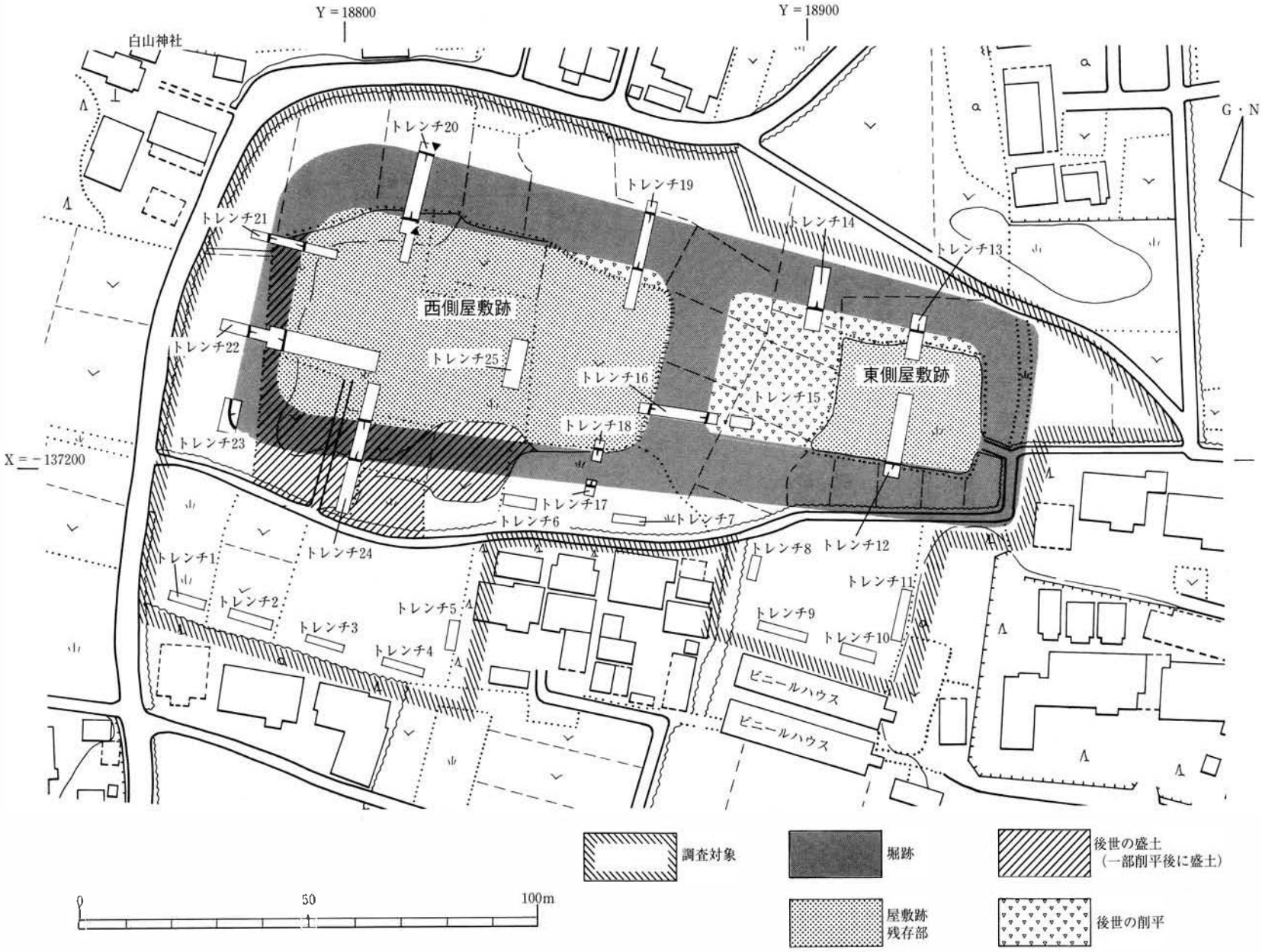
これをみると、Ⅳ～Ⅶ層は湿地性の堆積層であり、Ⅵ層が10世紀前葉に降下した灰白色火山灰層であることから、おおよそ平安時代は居住に適さない湿地であったことが伺える。

このようなことから、刈敷館跡は中世以降、洪水等の水の影響が少なくなった時期に、一迫川右岸の自然堤防上に作られた遺跡といえる。



層	土色		土性	特徴
Ⅰ	表土・耕作土・盛土・床土			
Ⅱ	10YR4/6	褐色	シルト	炭化物・焼土を含む。
Ⅲ	10YR4/4	褐色	シルト	遺構確認面。
Ⅳ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ～Ⅴへの漸移層。湿地性堆積層。
Ⅴ	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	湿地性堆積層
Ⅵ	灰白色火山灰			
Ⅶ	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	湿地性堆積層
Ⅷ	10YR3/4	暗褐色	シルト	
Ⅸ	10YR6/6	明黄褐色	シルト	

第２図　基本層序



第３図　トレンチの位置と遺跡の構造

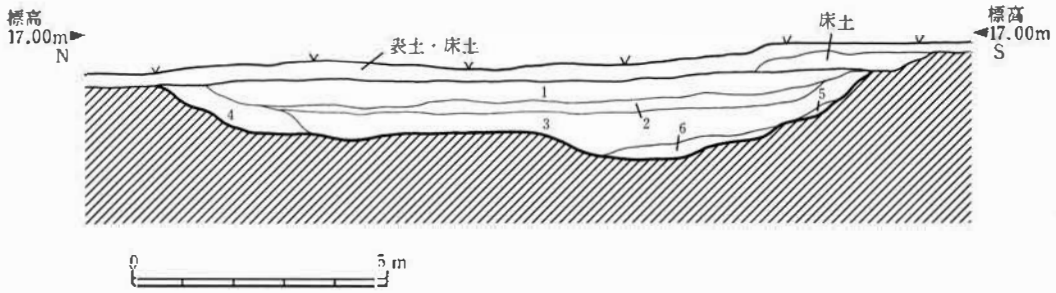
Ⅱ．発見された遺構と遺物

今回の調査で、トレンチ12～25で東･西２つの高まりと、それを取り囲むように堀跡が確認された。西側の高まりでは多数の柱穴、溝跡等が検出され、屋敷跡と考えられた。一方、東側の高まりはⅤ層まで削平されており、堀跡以外の遺構や遺物は確認されなかった。これらは一部削平を受けているものの、現地形から推定できる遺跡の構造と大きなズレはなく、残存状況はおおむね良好といえる。また、遺物はⅡ層から中世陶器、石製品、金属製品、銭貨など整理用平箱１箱分が出土している。

なお、トレンチ１～11では後世にⅨ層まで削平後、水田化されており、遺構･遺物は確認されなかった。以下、発見された遺構・遺物について記述する。

１．堀　跡

東・西２つの高まりを８の字に取り囲むように堀跡が確認された。堀跡は幅約15m、深さ2.0m、断面形は高まり側がわずかに窪むものの、おおよそ逆台形を呈する（トレンチ20）。堆積土は６層に大別され、ややグライ化した黒褐色粘土・スクモ層主体の自然堆積層である。掘り直しは認められない。また、橋跡は確認できなかった。出土遺物はない。



第４図　堀跡断面図

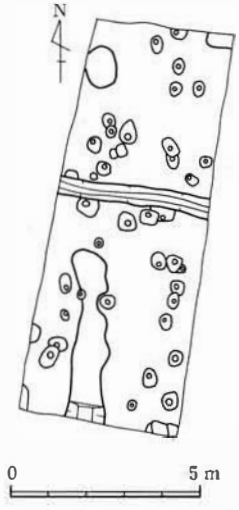
２．屋敷跡

①　西側屋敷跡

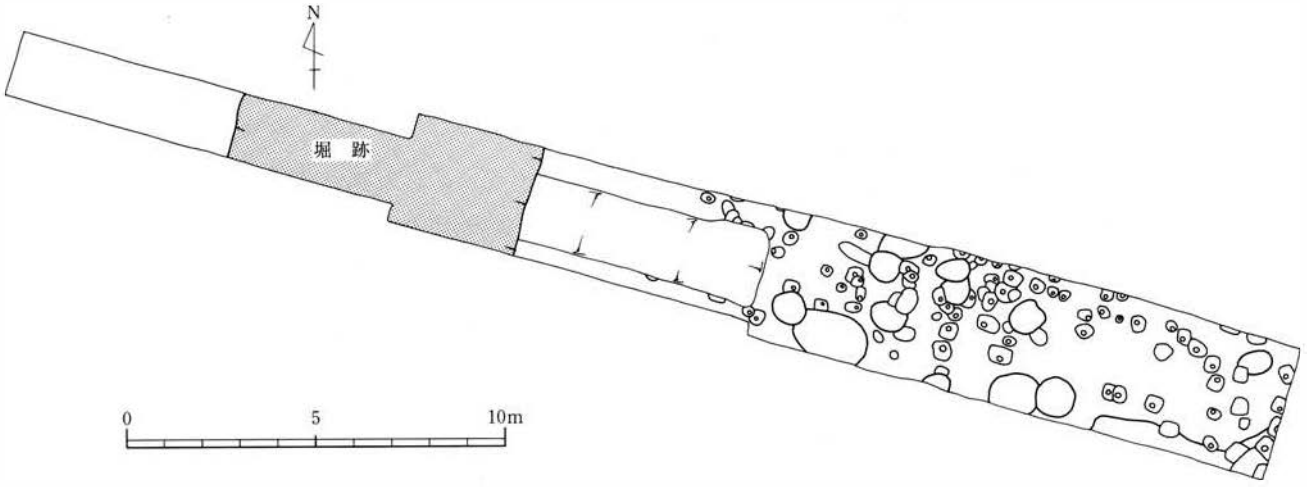
堀跡に囲まれた範囲は東西約84m、南北約46mの長方形を呈する。

トレンチ22・25では多数の柱穴等が確認され、高まり全域に建物跡を主体とした遺構が存在していると考えられる。また、柱穴の明確な組み合わせは確認できなかったが、少なくとも数時期の変遷が認められることから、比較的長期間、屋敷跡として利用されていたと推定できる。

遺物はⅡ層から常滑産陶器甕（14世紀ごろ）、在地産陶器甕（14世紀ごろ）、砥石、石鉢、北宋銭（淳化元寶）、釘などが出土している（第１表・写真図版参照）。



第５図　トレンチ25平面図



第6図　トレンチ22平面図

② 東側屋敷跡

残存している屋敷跡の規模は東西約36m、南北約26mであるが、堀跡の位置との関係から本来は東西約60m、南北約32mの長方形を呈していたものと思われる。また、高まりは後世にV層まで削平後、盛土されているが、当時は西側屋敷跡同様、多数の建物跡等が存在していたと推定される。出土遺物はない。

第四章　ま　と　め

Ⅰ．遺跡の構造について

上記のことから、遺跡は東・西屋敷跡と、それを取り囲む堀跡で構成され、全体の規模は東西約172m、南北は約55～67mの東側がやや狭くなる長方形を呈することが明らかになった（第2図）。

西側屋敷跡は東西約84m、南北約46mの長方形、東側屋敷跡は東西約60m、南北約32mの長方形を呈していたものと思われる。堀跡は幅約15m、深さ約2.0m、断面形は逆台形を呈する。これらは一部削平・盛土により不明なところもあるが、現地形・地割りから推定できる遺跡の構造と大きなズレはなく、残存状況はおおむね良好といえる。

Ⅱ．遺跡の年代について

遺跡の年代は、遺構確認面であるⅢ層が中世以降の層であることや出土遺物の年代から14世紀以降と推定される。また、存続期間について、築城時期や廃絶時期は具体的には不明であるが、検出遺構が少なくとも数時期の変遷を示していることから、比較的長期間存続したものと思われる。

種　類	出土位置	層	大きさ（長×幅×厚(cm)）	特　徴	図版番号
中世陶器（甕 体部）	トレンチ22	Ⅱ層		在地産。14C頃。	1
中世陶器（甕 体部）	トレンチ22	Ⅱ層		在地産。14C頃。	2
中世陶器（甕 頸部）	トレンチ22	Ⅱ層		在地産。14C頃。	3
中世陶器（甕 体部）	トレンチ22	Ⅱ層		常滑産。14C頃。	4
中世陶器（甕 体部）	トレンチ22	Ⅱ層		常滑産。14C頃。	5
中世陶器（甕 体部）	トレンチ22	Ⅱ層		常滑産。14C頃。	6
石製品（紙石）	トレンチ21	Ⅱ層	4.4×4.0×1.8	粘板岩。	7
石製品（石臼）	トレンチ22	Ⅰ層	上臼。1/5残存。	現代の炭化物付着。	8
石製品（石鉢）	トレンチ20	Ⅱ層	19.0×11.0×3.0	安山岩。表面敲打。	
銭貨（洪化元寶）	トレンチ22	Ⅱ層	外径2.3　穿径0.7	北宋銭。初鋳年990年。	9
鉄製品（釘）	トレンチ22	Ⅱ層		錆著しい。	

第1表　出土遺物

註

註１：宮城県教育委員会が平成12年度に、ほ場整備事業に先立ち確認調査を行った結果、古代の竪穴住居跡等が多数の遺構が検出された。また、吹付遺跡、淀遺跡の調査に先立ち県文化財保護課が周辺の分布調査を行った際、淀遺跡以東でも遺物が採取され、さらに平坦な地形が続くことなどから、この段丘には未発見の遺跡が多数存在している可能性がある。

註２：詳細は不明であるが、志波姫町史（志波姫町史編纂委員会：1976）には、「館跡の規模は東西三十間（約54m）、南北三十五間（約63m）の平城、館主は刈敷右馬之丞で、天正年間（1591年）まで大崎氏に属していた（要約）」と記されている。また町史、栗原郡誌に記された館跡の規模「…東西三十間（約54m）、南北三十五間（約63m）…」は調査結果と異なる。

引用・参考文献

菅　英治（1981）：『日本城郭大系　第3巻－山形・宮城・福島』　株式会社創史社

栗駒郡教育會（1918）：「栗原郡誌」

小井川和夫・小川淳一（1982）：「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ－宮城県文化財調査報告書』第83集

小井川和夫・手塚　均（1978）：「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査略報－宮城県文化財調査報告書』第53集

志波姫町史編纂委員会（1976）：『志波姫町史』

宮城県多賀城跡調査研究所（1978～1980）：「伊治城跡Ⅰ～Ⅲ－昭和52～54年度発掘調査報告－」『多賀城跡関連遺跡調査報告書』第３～５冊

築館町教育委員会（1988～2000）：「伊治城跡－昭和62年度～平成11年度発掘調査報告書－」『築館町文化財調査報告書』第１～12集

手塚　均（1980）：「山の上遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－宮城県文化財調査報告書』第69集

手塚　均（1981）：「鶴の丸館遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ－宮城県文化財調査報告書』第81集

古川一明（2001）：「淀遺跡」『名生館遺跡ほか－宮城県文化財調査報告書』第187集

遊佐五郎（1980）：「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－宮城県文化財調査報告書』第69集

遺跡全景
（南西から）

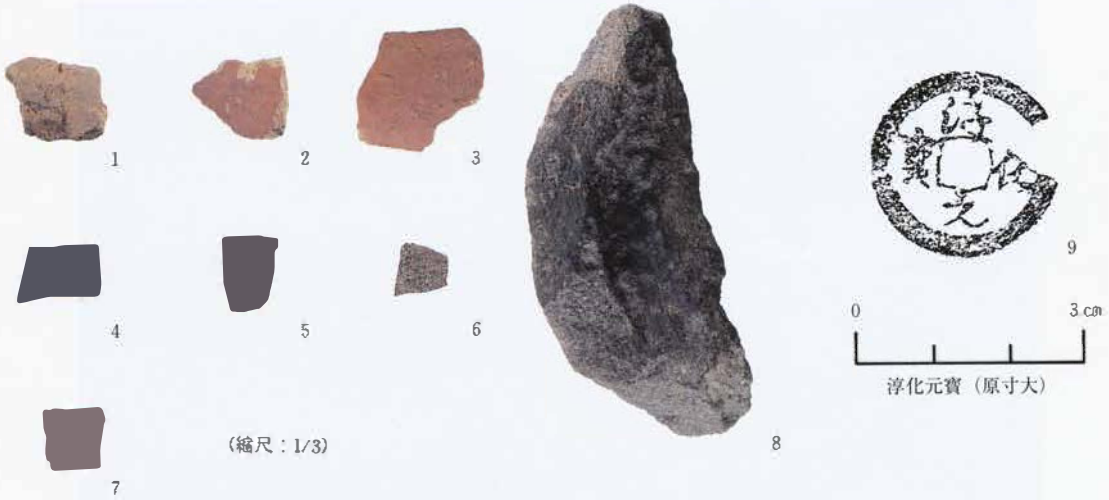
基本層序
（トレンチ22）

トレンチ20
堀跡断面
（南西から）

図版1

トレンチ22
全景
（東から）

トレンチ25
全景
（南から）



出土遺跡

図版 2

窪田遺跡・都遺跡・新城館跡

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 105
第Ⅱ章　遺跡の概要…… 105
　1．遺跡の位置と現況…… 105
　2．周辺の遺跡…… 106
第Ⅲ章　発掘調査…… 107
　1．調査の方法と経過…… 107
　2．調査結果…… 107
第Ⅳ章　まとめ…… 111

引用・参考文献
写真図版

調　査　要　項

遺 跡 名：窪田(くぼた)遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：05193　遺跡記号：TS）
　　都(みやこ)遺跡（登載番号：05015　遺跡記号：NR）
　　新城館(しんじょうだて)跡（登載番号：05049　遺跡記号：SC）
所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町平沢字窪田、都、小村崎字扇田
調査原因：県営ほ場整備事業　蔵王町円田２期地区
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課　佐藤則之　佐久間光平　吉野　武
　　蔵王町教育委員会　佐藤洋一
対象面積：約555.000㎡
調査面積：　5.960㎡
調査期間：2001年11月５日～12月３日
調査協力：宮城県大河原産業振興事務所　蔵王町円田地区土地改良区

第Ⅰ章　調査に至る経緯

蔵王町円田地区を対象とした「県営ほ場整備事業計画」のうち、円田１期地区については昭和63年度に協議が行われ、同年～平成２年度にかけて事業対象区域内の台遺跡、戸の内脇遺跡、白山遺跡、本宿前遺跡、中組遺跡などで範囲確認調査および用水路部分の事前調査が実施された（宮城県教育委員会1989・1990・1991）。これらの調査とともに水田面の切盛区域の保存協議が並行して進められ、遺構面に影響を及ぼさないように設計変更などの対応がなされて円田１期地区の事業は既に完了している。

平成８年度には、円田２期地区（約180ha）のほ場整備事業計画の提出を受けて、現地を確認した結果、都遺跡など11遺跡が事業範囲に含まれることがわかった。事業年次計画（平成13年度～17年度施工予定）が策定された平成12年度には再度協議が持たれ、平成13年度事業予定地内に隣接する中葉の木沢遺跡については同年秋に町教育委員会で確認調査を実施することになった。また、平成13年４月の現地確認の際に、事業と遺跡の係わりが予想以上に大きいことがわかったため、ほ場整備事業計画から除外する区域の拡大などを要望した。さらに、同年４月に町教育委員会が改めて遺跡の踏査を行ったところ、新たに３遺跡（窪田遺跡・三の輪遺跡・長根道下遺跡）が確認され、周知遺跡も範囲が拡大することなどがわかった。事業計画と遺跡との保護・調整を図るため、まず、事業計画地の南半部にあたる平成14年・15年度事業予定区域（約55.5ha）については、同年秋に県と町が担当して遺跡の確認調査を実施することになった。

こうした経緯を経て、平成13年11月から約１ヶ月間、円田２期地区南半部にある窪田遺跡・都遺跡・新城館跡の３遺跡の確認調査を行った。以下は、その概要である。

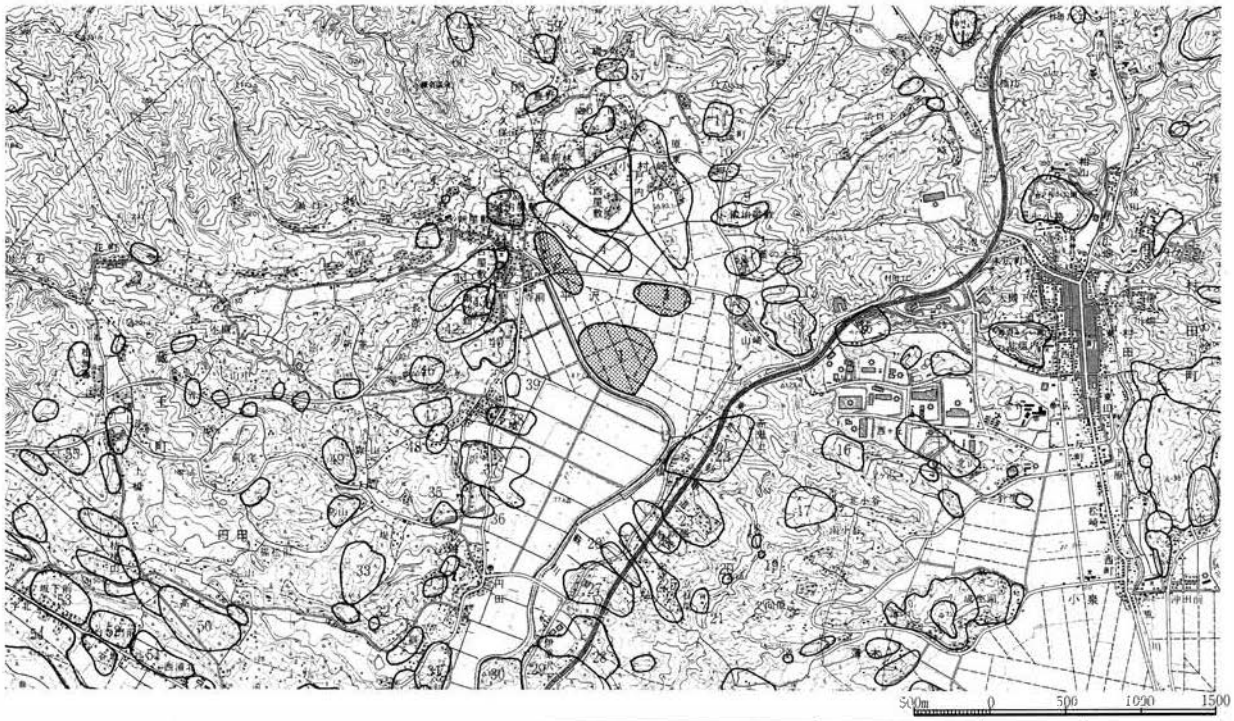
第Ⅱ章　遺跡の概要

１．遺跡の位置と現況

窪田遺跡・都遺跡・新城館跡は、刈田郡蔵王町平沢字窪田、都、小村崎字扇田に所在する。蔵王町役場の北東方約3.5㎞の地点、三方を低い丘陵に囲まれた円田盆地のほぼ中央部に位置している（第１図）。盆地内には北西から南東へ横断するように藪川が南流し、付近には沖積地が形成されている。窪田遺跡は西の丘陵地からこの沖積地へと延びる微高地上、都遺跡・新城館跡は沖積地内の微高地上に立地している。遺跡の標高は、窪田遺跡が87ｍ～90ｍ、都遺跡・新城館跡が83ｍ～85ｍである。

遺跡の立地するこれらの微高地は、以前は畑地として利用されていたが、昭和37年～38年の藪川築堤工事の際に土取りが行われ、その後、窪田遺跡の一部を除いてほぼ全域が水田化している。こうした状況から、現在では各遺跡の範囲が不明瞭になっている。

なお、都遺跡は、土取りの際に多量の縄文時代後期～平安時代頃までの土器類が出土し、これらの中に古代の瓦が含まれていたことから、地名「都」とともに古代「苅田郡」と密接な関連がある遺跡として注目されてきた。その後、ほ場整備事業計画が持ち上がったことから、平成２年度（1990年）



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	都	散布地	縄文後・弥生・古墳・古代	21	愛宕山	散布地	弥生	41	平沢	散布地	古代
2	窪田	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	22	赤鬼北	集落	弥生・平安・中世	42	諏訪館	散布地	弥生・古墳
3	新城館跡	散布地・城館	古代・中世	23	大橋	集落	縄文後・弥生・古墳・古代	43	諏訪館跡	城館	中世
4	十郎田	散布地	古代	24	屋木戸内	散布地	弥生・古代	44	諏訪館前	集落・散布地	縄文後・弥生・古墳・平安
5	西小屋館跡・前戸内	城館・散布地	旧石器・縄文後・古代・中世	25	道目場	散布地	縄文・弥生・古墳	45	坪沢館跡	城館	中世
6	原・六角上・六角下	散布地	弥生・古代	26	中沢B	散布地	弥生・古墳・古代	46	大林内	散布地	弥生
7	中葉の木沢	散布地	縄文・弥生・古代	27	中沢A	散布地	縄文早・弥生・古墳・古代・中世	47	北境	散布地	縄文早・弥生・古代
8	長根道下	散布地	古墳・奈良・平安	28	御原沢下	集落	古墳	48	沢	散布地	古代
9	鍛冶屋敷	散布地	縄文中～晩・古代	29	塩沢北	集落	弥生・古墳・平安	49	寨館館跡	城館	中世
10	三の輪	散布地	古墳・奈良・平安	30	台	散布地・水田跡	弥生・古墳・平安・中近世	50	高木	散布地	縄文中
11	清上	散布地	古代	31	宋願寺	散布地	弥生・古墳・平安	51	西浦・西浦B	集落・散布地	縄文中・後・弥生・平安
12	上葉の木沢	散布地	古代	32	八幡山古墳	円墳・方墳	古墳	52	弓門前	散布地	縄文中・後
13	山崎	散布地	縄文早	33	花楯館跡	城館	中世	53	前木	散布地	縄文中
14	北洞山	散布地	縄文・弥生	34	堀の内	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代	54	十文字	散布地	縄文中
15	西原	集落	縄文・平安	35	清水	散布地	弥生・平安	55	湯坂山B	集落	縄文中～晩・弥生
16	上ヶ沢	散布地	縄文・弥生・古代	36	白山	集落・散布地	弥生・古墳	56	後原	散布地	古代
17	南小谷	散布地	縄文・弥生・古代	37	本宿前	集落・散布地	縄文早・弥生・古代・中世	57	鹿ヶ坂	散布地	奈良・平安
18	夕向原古墳群1号墳	前方後円墳	古墳	38	中組	集落・散布地	縄文早・弥生・平安・中近世	58	大久保	散布地	古代
19	夕向原古墳群2号墳	円墳	古墳	39	堂の入	散布地	弥生・古代・中世	59	鹿野	散布地	古代
20	吉峰神社古墳	前方後円墳	古墳	40	小高・経塚	散布地	縄文・弥生・古代・中世	60	兵衛館跡	城館	中世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

に町教育委員会が小規模な確認調査を行い、微高地の周縁部に遺構が残存することを確認している（宮城県教育委員会 1991）。

2．周辺の遺跡

都遺跡などが所在する円田盆地周辺には、各時代の遺跡が濃密に分布する（第1図）。

縄文時代の遺跡には、本宿前遺跡（37）、中沢A遺跡（27）、中組遺跡（38）、前戸内遺跡（5）、鍛冶屋敷遺跡（9）などがある。いずれも盆地周辺の丘陵から丘陵裾部にかけて分布する。

弥生時代の遺跡は、丘陵裾部から沖積地にかけて数多く分布する。堂の入遺跡（39）、中沢A・B遺跡（26･27）、本宿前遺跡（37）、屋木戸内遺跡（24）などがある。円田式（中期）の標識遺跡である西浦遺跡（51）は、南西方の松川北岸の河岸段丘上に立地する。

古墳時代の遺跡には、大橋遺跡（23）、諏訪館前遺跡（44）、塩沢北遺跡（29）などの集落遺跡、古

峰神社古墳（20）などの前方後円墳、台遺跡（30）の水田跡などがみられる。集落の分布域は弥生時代とほぼ重複する。古墳時代前期の中でも最も古い段階に位置付けられている大橋遺跡では、竪穴住居跡が3軒発見されている。

奈良・平安時代の遺跡は、盆地縁辺部に広範囲に広がる。堀の内遺跡（34）、十郎田遺跡（4）、前戸内遺跡（5）、六角上遺跡・六角下遺跡（6）、赤鬼上遺跡（22）、塩沢北遺跡（29）などがある。堀の内遺跡では7世紀末～8世紀前葉の竪穴住居跡、赤鬼上遺跡では平安時代の竪穴住居跡と墨書土器などが発見されている。

中世には、北～西側の低丘陵上を利用して兵衛館跡（60）、平沢館跡（45）、諏訪館跡（43）、西小屋館跡（5）、花楯館跡（33）などが築かれている。

第Ⅲ章　発　掘　調　査

1．調査の方法と経過

円田2期地区の確認調査は、稲刈り終了を待って11月5日から開始した。調査対象区域内では事前に3遺跡の存在が知られていたことから、地形なども考慮して対象区域をA区：窪田遺跡、B区：都遺跡、C区：新城館跡に大きく3分割することにした（第2図）。

調査は、遺跡が立地する微高地を中心に現水田や畑地に沿って幅約2mのトレンチを適宜設定し、遺構の検出状況や地形・地層の状況を検討しながら随時調査区を拡張した。調査面積とトレンチ数は、最終的にはA区：1,600㎡（67ヵ所）、B区：3,360㎡（121ヵ所）、C区：1,000㎡（36ヵ所）となり、総計5960㎡（224ヵ所）である。調査トレンチの深度は概ね20～50cmであるが、一部は堆積層確認のために1m程度まで掘り下げたものもある。遺構が検出された場合には平面での確認にとどめ、遺構の掘り下げは基本的に行っていない。

記録は、縮尺＝1/1,000の図に検出遺構と調査トレンチの土層・深度などを書き込む簡易的な方法をとり、適宜、写真（モノクロとカラーリバーサル）撮影を行った。12月3日には確認調査を終了した。

2．調査結果

(1)　地形・土層の状況

対象区域全体の調査結果から、区域内の地形や土層の状況が概ね捉えられた（第2図）。

概略的に見ると、遺跡が立地する区域は、盆地周辺の丘陵から沖積地へとのびる丘陵末端部にあたり、それが台地もしくは微高地状に残ったものであり、その周辺は河川か湿地になっているものとみられる。つまり、窪田遺跡および都遺跡は西側丘陵から南東へ延びる丘陵末端部にあたり、窪田遺跡と都遺跡の境が河川によって開析されたために都遺跡は沖積地に取り残されて残丘状に、同様に、新城館跡は北側丘陵から南へ延びる丘陵末端部にあたり、やはり河川によって開析されて沖積地に残丘状に取り残されたものと考えられる。また、窪田遺跡・都遺跡と新城館跡の間には旧河川の痕跡が明瞭に残っており、これを境に現水田の配置も異なっている。

微高地上では、現耕作面から20cm～25cm下で黄褐色ローム面（遺構確認面）になる。ただし、前述したように、これらの微高地は昭和30年代後半の藪川築堤工事による土取りや水田整備によって削平を受けているため、表土を剥ぐと微高地中央部ほど下層の黄褐色粘土層・黄白色粘土層あるいは硬い黄褐色シルト層などが広がる。微高地の縁辺部（斜面部）では、旧表土の黒色土がわずかに残存する。沖積地では、現耕作土の下は概ね黒褐色～暗赤褐色粘土層、暗青灰色粘土層、黄褐色粘土層と続く。暗青灰色粘土層中には未分解の植物遺体を含み、また、灰白色火山灰（10世紀前葉）ブロックが含まれる区域がある。旧河川近辺になると、粗砂～細砂層などの分布が認められる。

なお、一部区域では現耕作土下に旧水田耕作土（近世以降）とみられるグライ化した粘土層が観察されたが、弥生時代や古墳～奈良・平安時代まで遡る水田跡の堆積層は今回は確認できなかった。

(2) 各遺跡の調査

【窪田遺跡】　北西から南東に舌状に延びる微高地上に立地している。微高地先端部の中央には小さな沢が入り込んでいる。遺跡は、今回の対象区域内では東西120m・南北300mの範囲に広がり、県道を挟んでさらに北側へも延びている。遺跡の南側は湿地、東側は河川、西側は藪川へ向かって湿地状になる。

遺構は、県道近くの畑地区域や微高地末端部などで確認された。遺構の密度はそれほど高くはないが、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡7条、土壙4基などがある。時期は、縄文時代、古墳～奈良・平安時代にわたる。縄文時代の遺構は、県道寄りの畑地区域（A63～65）に分布する。隅丸長方形状（長軸10m以上×短軸3.6m）の竪穴住居跡1軒（写真図版2－1）と土壙もしくは竪穴住居跡と考えられる隅丸長方形状（長軸4.8m×短軸2.6mほか）のものが3基ある。古墳時代では、前期（塩釜式）か中期（南小泉式）とみられる竪穴住居跡（写真図版2－2）がある。微高地南端部（A28）で確認されている。奈良・平安時代とみられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、県道近くの畑地区域（A63）や微高地縁辺部（A25・30・34ほか）に分布する。

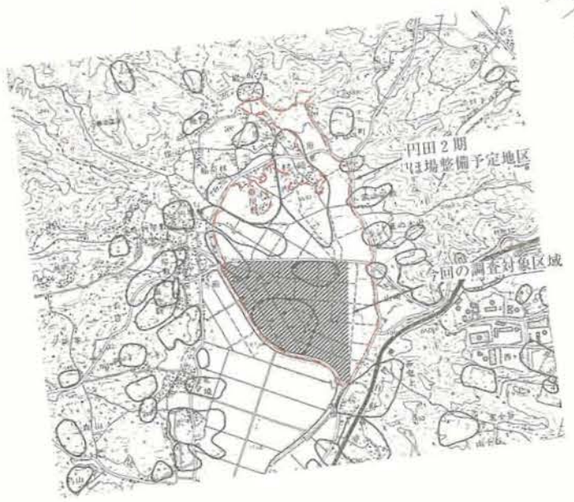
遺物はコンテナ1箱分出土した。縄文時代後期末～晩期の土器、石器（剥片）、弥生時代中期の土器、古墳時代～奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世以降の摺鉢などがある（写真図版3－3～12）。縄文・弥生時代の遺物は少なく、大半は奈良・平安時代のものである。

【都遺跡】　東西120m～200m・南北400mの微高地上に広がる。遺跡周辺は湿地になり、西側縁辺には旧河川の跡が認められる。遺跡の中央部は大きく削平を受けており、この区域では遺構は消滅している可能性が高いが、微高地縁辺部には遺構が多く残存する。

検出した遺構には、竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡6棟、溝跡14条、柱穴列跡2条、土壙3基、小ピットなどがある。

竪穴住居跡は、微高地の縁辺部（B21・32・42・53・55・57・73・114ほか）に点在し（写真図版2－3）、比較的南縁部に多く分布する。時期は、古墳時代前期（塩釜式）・中期（南小泉式）～奈良・平安時代にわたるが、特に古墳時代前期～中期が多い。

掘立柱建物跡は、北側と南端部で確認されている。いずれも古代の建物跡と見られる。建物全体の



第２図　調査トレンチの位置と遺跡範囲

規模は不明であるが、柱穴掘り方が１ｍを越えるものがあり、遺跡の北側（Ｂ59）で確認した建物跡は、柱穴掘り方が1.3ｍ×1.1ｍ、柱間寸法が2.4ｍの大型のものである（写真図版２－４）。南端部（Ｂ120）の建物跡も柱穴掘り方が１辺1.1ｍ、柱間寸法が3.3ｍの規模である。こうした掘立柱建物跡は、遺跡が立地する微高地中央部にも存在していたと考えられるが、削平のために消滅している可能性が高い。

柱穴列跡は、西側縁辺部のトレンチ２箇所（Ｂ46・48）で確認した。いずれも幅20㎝ほどの布掘り状の掘り方をもつ（写真図版２－７）。西側縁辺にそって流下する旧河川にほぼ並行しており、遺跡の西側を区画する施設ではないかと考えられる。古墳時代か古代かははっきりしない。また、遺跡北端（Ｂ105）では、地形の落ち際に沿って幅１ｍほどの溝跡を確認した。この溝跡も柱穴列跡と同様に区画施設の可能性がある。

遺物は、コンテナ3箱分出土している。弥生時代中期の土器、古墳時代～奈良・平安時代の土師器・須恵器、瓦片、中・近世の陶磁器などがある（写真図版３－13～17、４－１～９）。古墳時代前期～中期・奈良時代の遺物が比較的多い。なお、古代の瓦は、西側と北側のトレンチ（Ｂ48・62）から小片が２点出土したに過ぎない。

【新城館跡】　東西150ｍ・南北100ｍほどの独立した微高地上に立地している。遺跡の周辺は湿地状になる。遺跡は大半が削平を受けており、特に北側区域ほど著しい。遺跡の南側で遺構が確認されているが、残存する遺構は少ない。

検出された遺構には、掘立柱建物跡２棟、井戸跡１基、溝跡３条、土壙２基などがある。時期は古代～中世とみられるがはっきりしない。溝跡の一部は、時期が近世以降に下る可能性もある。

掘立柱建物跡はいずれも一辺40㎝程の柱穴掘り方をもつが、建物規模は不明である。井戸跡は径70㎝程の円形である（写真図版３－２）。

遺物は少なく、古代の土師器・須恵器片（写真図版４－10～13）が若干数出土したのみである。中世の遺物は出土していない。

本遺跡は、これまで古代の散布地・中世の館跡とされてきたが、中世については今回の調査では確認できなかった。

第Ⅳ章　ま　と　め

１．窪田遺跡・都遺跡・新城館跡の３遺跡の範囲が概ね捉えられた。それぞれ、周囲との比高差約１～２ｍの微高地上に立地する。微高地周辺は湿地もしくは旧河川になる。

２．３遺跡はいずれも昭和30年代後半の藪川築堤工事およびほ場整備などの際に土取り・削平がなされているが、遺跡は壊滅しているわけではなく、都遺跡・窪田遺跡では数多くの遺構が残存する。

３．窪田遺跡では、縄文時代、古墳時代（前・中期）、奈良・平安時代の遺構が確認された。周囲より一段高い県道近くの畑地区域には、縄文時代の竪穴住居跡をはじめとして遺構が比較的多い。

４．都遺跡では、古墳時代（前～後期）、奈良・平安時代の遺構が確認された。遺跡の中央部は削平さ

れているようであるが、微高地縁辺部には古墳時代の竪穴住居跡や古代の掘立柱建物跡が残存する。

古代の大型掘立柱建物跡の存在は、以前から言及されているように官衙関連遺跡であることを示すものと考えられる。ただし、遺跡の中央部は削平されており、官衙の中枢部は残存していない可能性がある。なお、瓦片は2片出土したのみであり、瓦葺建物の存在を示す手がかりは得られなかった。

5．新城館跡は、遺跡の大部分が削平されて残っていない。微高地縁辺にかろうじてわずかな遺構が残存する程度である。これまで古代の散布地・中世の館跡とされてきたが、中世については確認できなかった。

6．遺跡周辺の湿地区域には、弥生～奈良・平安時代の水田跡が広がる可能性があるが、今回の調査では確認されていない。

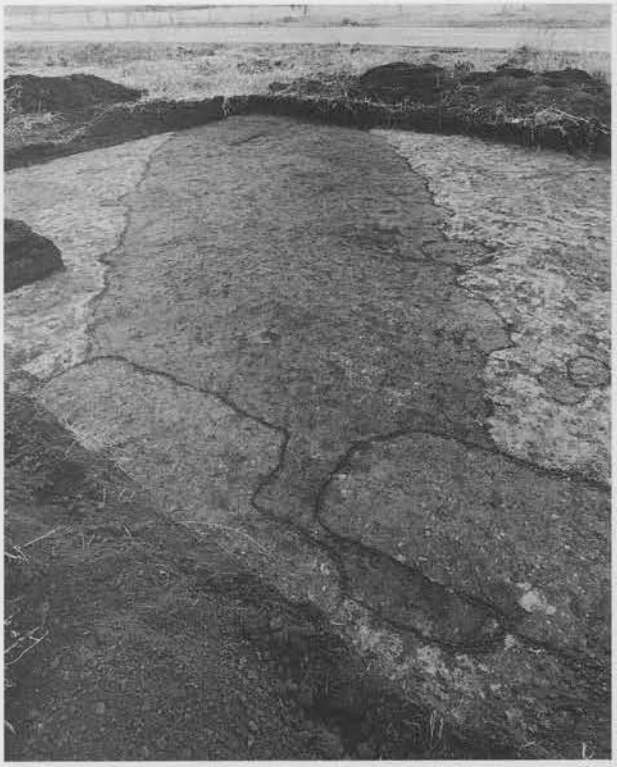
引用・参考文献

蔵王町史編さん委員会：1987『蔵王町史　資料編1』
1994『蔵王町史　通史編』
白石市史編さん委員会：1976『白石市史　別巻　考古資料編』
宮城県教育委員会：1989「台遺跡」「亘理町三十三間堂遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第131集　pp.176～184
1990「白山遺跡ほか」「寂光寺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第135集　pp.253～280
1991「都遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集　pp.321～328

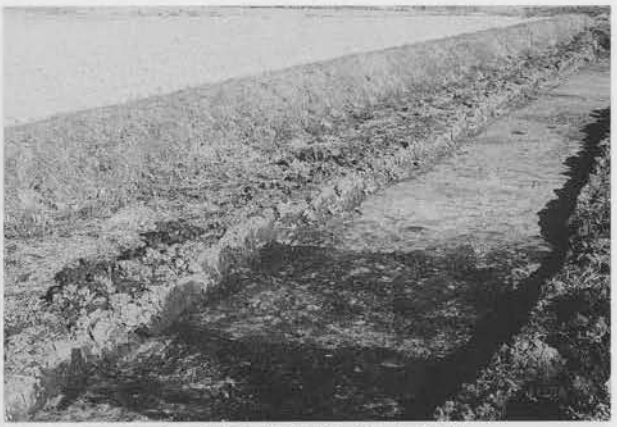
1．遺跡周辺の空中写真（白い部分が遺跡範囲と対応する）　昭和31年4月撮影　国土地理院
縮尺≒1／10,000

2．都遺跡近景　　鍛川堤防上から北をのぞむ

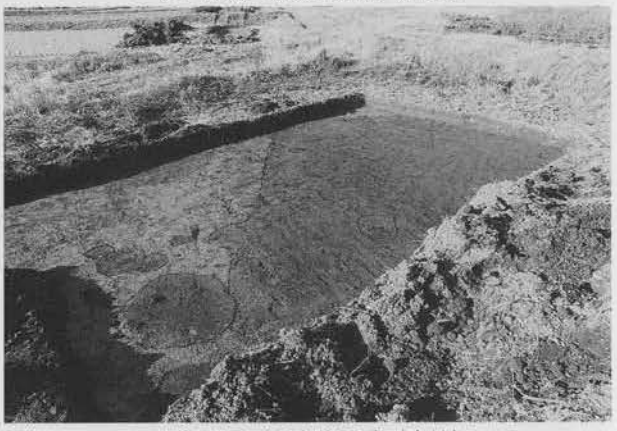
図版1



1．A63　竪穴住居跡（縄文）



2．A28　竪穴住居跡（古墳）



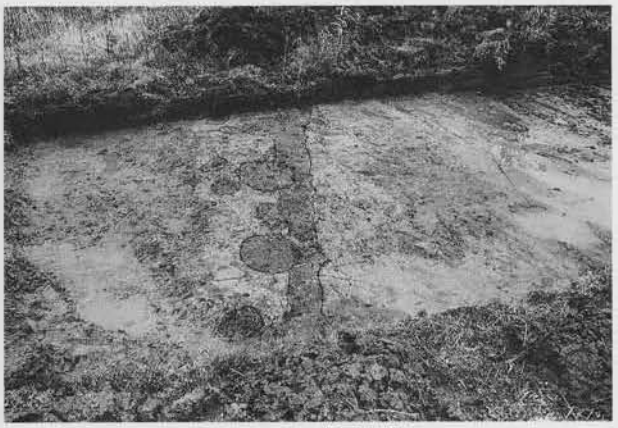
3．B73　竪穴住居跡（古墳）

1・2：窪田遺跡

4．B59　掘立柱建物跡（古代）

5．B59　掘立柱建物跡
北東隅柱穴

6．B22　掘立柱建物跡（古代）



7．B46　柱穴列跡

3～7：都遺跡

図版2

1．C11　全景

2．C11　井戸跡

1・2：新城館跡

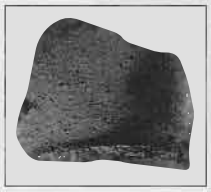
3

4

5

6

7



8

9

10

3～5：縄文土器　9・10：土師器坏
6：弥生土器　11：須恵器壺
7：土師器高坏　12：須恵器甕
8：土師器甑

縮尺　3～6：1/2
7～12：1/3

11

12

窪田遺跡

13

14

15

16

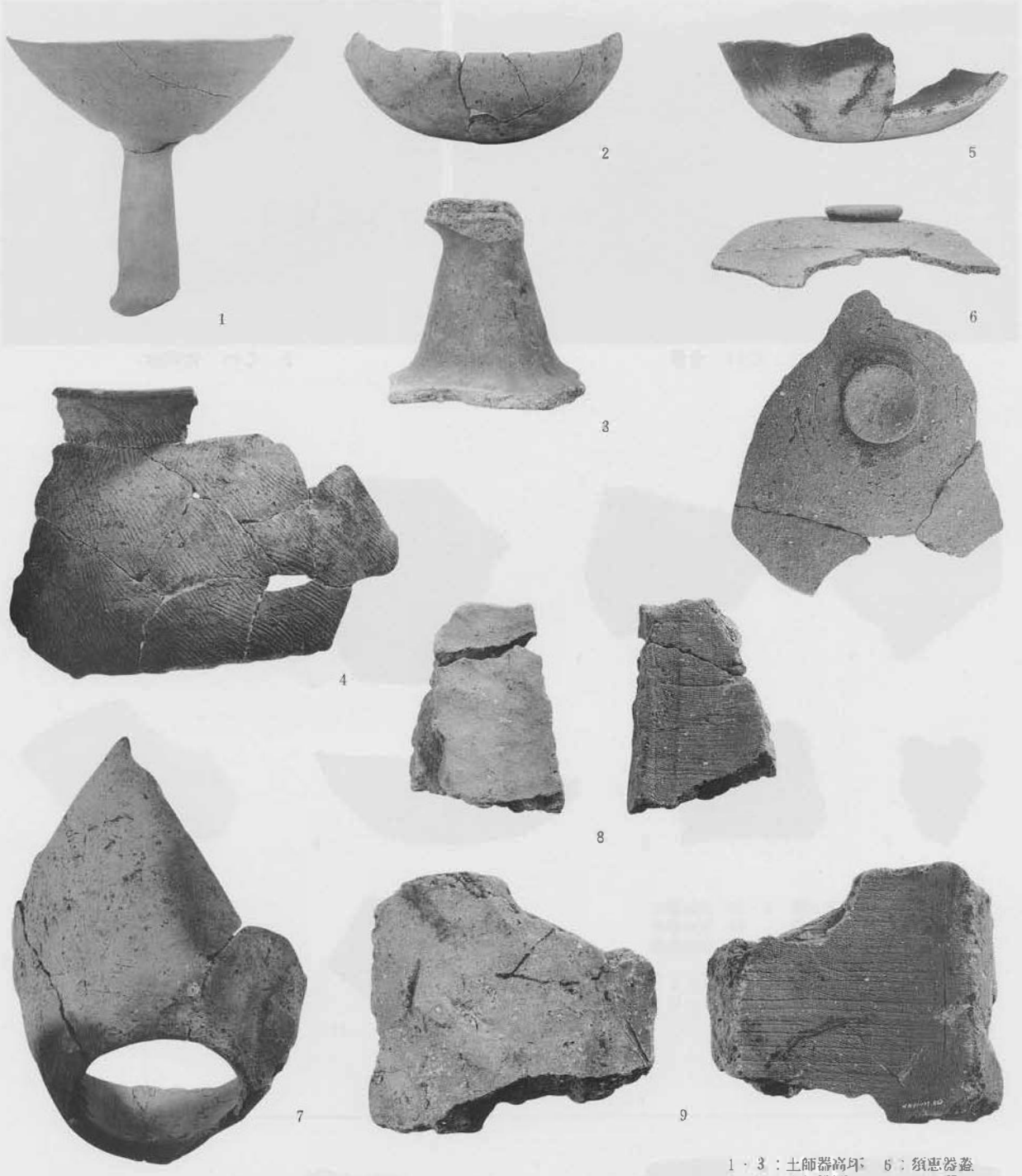
17

13～17：弥生土器

縮尺＝1/2

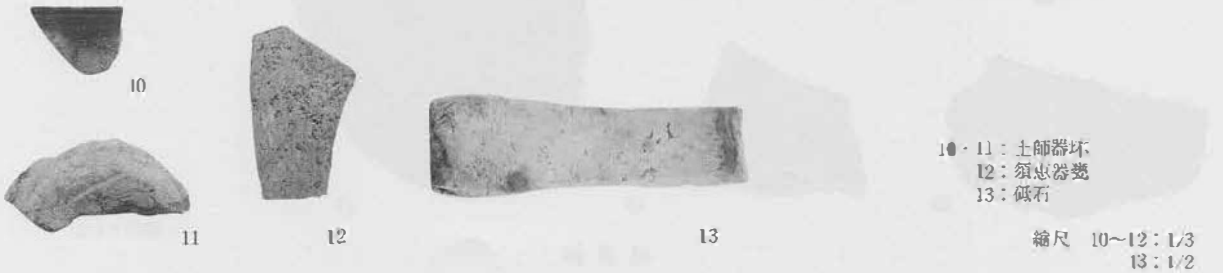
都遺跡

図版3



1・3：土師器高坏　5：須恵器蓋
2・5：土師器坏　8・9：瓦
4：土師器甕
7：土師器甑　縮尺　1：1/4
2～9：1/3

都遺跡



10・11：土師器坏
12：須恵器甕
13：砥石

縮尺　10～12：1/3
13：1/2

新城館跡

図版 4

報　告　書　抄　録

ふりがな	みょうだていせき
書名	名生館遺跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第188集
編著者名	阿部博志・須田良平・引地弘行・千葉直樹・天野順陽・佐久間光平
編集機関	宮城県貴教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL022-2113682
発行年月日	西暦　2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
みょうだていせき 名生館遺跡	みやぎけんふるかわしひがし 宮城県古川市東 おおさきあざみょうだて 大崎字名生館	042048	27018 27206	38度 36分 34秒	140度 53分 27秒	20010716～ 20010921 20011001～ 20011004	8,286	ほ場整備事業に伴う事前調査
たてのうちいせき 館の内遺跡	みやぎけんえぞりぐんやまもと 宮城県栗原郡山元 まちおおだいらあざたてのうち 町大平字館の内	043621	14009	37度 59分 07秒	140度 51分 50秒	20010611～ 20010627	1,080	農村整備事業に伴う確認調査
いっぽんやないせき 一本柳遺跡 こぬまいせき 小沼遺跡	みやぎけんとおだぐんこごた 宮城県遠田郡小牛 たまちいっぽんやなぎ　こぬま 田町一本柳、小沼	045039	39044 39033	38度 31分 26秒	140度 05分 42秒	20011029～ 20011109 20011119～	210 140	ほ場整備事業に伴う事前調査
かりしきたてあと 刈敷館跡	みやぎけんくりはらぐんてんしょう 宮城県栗原郡志波 ひめまちかりしきさんちょうめ 姫町刈敷三丁目	045292	49019	38度 45分 20秒	141度 03分 45秒	2001130	836	ほ場整備事業に伴う確認調査
くぼたいせき 窪田遺跡	みやぎけんかったぐんざおう 宮城県刈田郡蔵王 まちひらさわあざくぼた 町平沢字窪田	043010	05015	38度 07分 06秒	140度 41分 27秒	20011105～ 20011203	1,600	
みやこいせき 都遺跡	みやぎけんかったぐんざおう 宮城県刈田郡蔵王 まちひらわあざみやこ 町平沢字都		05193	38度 07分 06秒	140度 41分 43秒	20011105～ 20011203	3,360	ほ場整備事業に伴う確認調査
しんじょうたてあと 新城館跡	みやぎけんかったぐんざおう 宮城県刈田郡蔵王 まちこむらさきあざおおた 町小村崎字扇田		04049	38度 06分 53秒	140度 41分 36秒	20011105～ 20011203	1,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名生館遺跡	集落跡	縄文、古代	堀跡3、掘立柱建物跡22、井戸跡5、溝跡56、土壙91	土師器、須恵器、鉄剣、縄文土器、弥生土器、続縄文土器	名生館官衙と密接に関わる建物跡・溝、古代の溝と平行する土壙
館の内遺跡	集落跡	弥生、古代	掘立柱建物跡8、竪穴住居跡5、溝跡6、土壙7	土師器、須恵器、製塩土器、弥生土器	古代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、工房などで構成される集落跡
一本柳遺跡 小沼遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物跡1、畦畔1、溝跡1、土壙1	土師器、須恵器、	
		中世	掘立柱建物跡1、土壙1		
刈敷館跡	城館	中世	屋敷跡2、堀跡1、掘立柱建物跡、溝跡	中世陶器、石製品（石鉢・砥石）、金属製品（釘）、銭貨（淳化元寶）	
窪田遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代	竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡7条、土壙4基	縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶器	
都遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代	竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡6棟、溝跡14条、柱穴列跡2条、土壙3基	弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦	官衙関連遺跡か
新城館跡	集落跡・城館跡	古代・中世	掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、溝跡3条、土壙2基	土師器、須恵器、砥石	

宮城県文化財調査報告書第188集

名生館遺跡ほか

平成14年3月25日印刷
平成14年3月29日発行
発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24